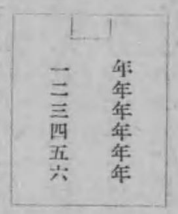
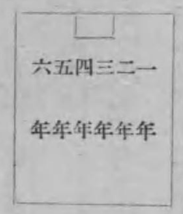
ればならない、「水よ水よ私の姿を持て行つておくれねと云ふと、ドンブリコ、ドンブリコと三里程流れて行くと男がやあ美しい顔が流れて來た一つ拾ふて歸りましやう……」とやらなければ三年以下には分らない。鎌倉で或子供が海の方を向いて「ハイチヤハイチヤ」と云つて居る。何かと母が尋ねると、「水がお出でお出でして居る」と云つた相な。此は全く嘘では無い、「何だ馬鹿らしい」と云つて大人の心を以つて批評する母親があれば其人は全く子供の同情者では無い。詩人は詩に天地の聲を聞くでは無いか。昔の詩人は松の風にも佛の聲を聞いたでは無いか。誰が此れを嘘と云ふ事が出來やう。三年以上と以下とは程度の差であるから、お話をするにも其の扱ひ方を代へなければならない。此の様に全く相異なつた二つのものを萬止むを得ず同室に入れた時は二者の内孰れかを犠牲にする事を初めに定めて置く必要がある。此の時はAの如くせずBの如く整列させる方が便利である。常に上級生を以て下級生を看視せしむるので横を見ると「静かにせんか」と上級生から叱られるので静にする。此れだと大抵の話は聞かせる事が出來る。

A



B



以上の如く種々研究に研究を重ねて行くと子供程案外導き易いものは無い。心を用ひて秩序的にやれば大人よりも子供の方が餘程話し易いのである。皆さんも御研究になつて子供の美しい無抵抗の時に佛の慈悲を入れて下されば誠に幸である。

三

近來兒童問題が八釜敷く云はれる様になり、これが一つの流行の様になつてゐる様だが、現在ですら不完全であり此先き十年たつてやつと役に立つかどうかさへも分らぬものをこんなにまで一生懸命になつてやらなければならないものか。こんなにまで目を注がなければならないかと云うことに發足點を置いてしばらくお話して見たいと

思ふ。

此頃時分蚊と云ふ奴は隨分厄介なもので、お互にお湯でも浴びてこれから暫くゆつくりみんなで夕涼みでもしようとしてゐると横合からブーンとやつて來てホッペタにとまる。顏をしかめて掌でピシャーンといゝ具合に打つたと思うと又ブーンと來る。又ピシャリとやつた時の痛快さ!! 一人で微笑みたくなる樣だ。そこへ又來る、「何んだ今度もこそと、力を入れて打たうとすると蚊はピーンと飛んで逃げた後へ自分で自分のホッペタを思ひ切り力まかせに打つた時の不愉快さ。諸君もよく御經驗のことゝ思うが、手際よくやつた時の氣持よさに比べてその不愉快さも又格別だ。

そんなにしてまで氣を焦つた所で蚊は殺し盡せるものでもない。それならと云つて蚊張の中へ入り込むのも結構だが人が度々出入りする內には何時とはなしに又蚊は入つて來る。こゝでどうしても一時抑へでは承知出來なくなつて、眞の原因と見るべきものを除去しない限りはどんな事も駄目な話である。

子供の社會事業とてもこんなものであると思ふ。

人間に罪があるからと云ふので罰を與へるのも實に結構は結構だが、これもほんの一時の氣休めに過ぎないものではあるまいか。これでは要する所石川五右衞門の所謂「濱の眞砂は盡きるとも世に盜賊の種は盡きまじ」になつてしまふのではあるまいか人を懲らしめの爲めに監獄に入れて心を入れかへさせ監獄は改化遷善と云ふことになる。であるからして如來樣までが監獄のむさくるしい佛飯を召上らなければならないと云ふお氣の毒な次第になる譯であるが、これを一歩進めて罪なんて云ふことは皆目知らない。そんな罪なんて云ふことは聞くことも出來ない樣な子供を育てると云ふことにならなければならぬと思ふ。

若し十六歲以下の子供が全人口の先づ三分の一とすると日本に七千五百萬の人口とすれば三分の一卽ち二千五百萬が子供と云ふことになる。その子供が善い習慣思想を持つと云ふこと、惡るく育つと云ふことは實に大なる問題ではないか。こゝに於て近

來內務、文部省あたりに於て喧しく兒童と云ふ事を重大視するに至つた所以である。

二三年前に紐育市の警察署長を辭したアーサー・ウッド氏の云ふ所によるとその結論として「今日の社會の生存は今日の子供を堅實なる國民として、育て上げることである。それには子供に自由なる運動場を與へ、快活に遊ばしめ、充分に食物を給し、心良き睡眠をとらすと云ふことである」と尙同氏はその在任中澤山の小運動場を得る爲めには廣大なる土地が必要であるがこれを得ることは容易な問題でない。そこでマンハッタンと云ふ小島に百三十ヶ所の橫町を選んで午後三時から六時の間を車馬の通行を禁止し臨時兒童遊園を作り兒童の爲めに開放したと云ふことである。

又シカゴ市には百七十ヶ所の兒童遊園を作り各遊園の距離を一哩と定めた。そこで遊園から最も距つた所にある家でも、子供は一哩の半分卽ち七丁にして遊園に達することが出來る譯である。先づこれ位の程度の歩みは子供としては左程無理でもあるまいと云ふことである。又これ位なら家から夕方子供を呼びに行くとしても左程不便利でもあるまい。

その外に更らに七十の公園を作つたのである。所が紐育に於ては斯樣な設備が出來兼ねるので道路遊園を作り、又安全地帶を設け巡査を附けて兒童が何の氣がかりもなしに自由に遊び得る樣に務めた。そこで子供は思ひ切り遊んで極端なる疲勞を覺へ大いに食ひ深い眠りに入ることが出來る。而もこれが子供にとつては最良なる境遇であると思ふ。

アーサー・ウッド氏は更らにこれを精神上にも適用したいと云ふことを考へた。

貧民の子供と云ふものはその悲慘な境遇からして純なる萠芽をさまたげらるゝ樣な事はないかと云ふことを最初に憂ひ、貧民の子供と云ふものは日曜日に敎會へも行けず從つて子供の最も樂しみとするクリスマスの贈物も受けることが出來ず、又ハロウインデー(感謝祭)と云つて十月の始め頃にある農家の祭りで農作を與へて下さつた神樣に感謝する祭がある。この晩は果物が踊り出すと云ふ程で子供等はどんなことをし

てもいゝと云うので子供はあらゆる惡戯をするので殊に警察は新聞社に賴んで、この日はとても警察では手が廻りかねるからしてお互に家々で氣をつけてもらひたい。そこで家にはきつと錠を下して子供が入らぬ様にし道に出てゐる看板や置物は家の中へとり入れてもらひたい。電線なども切られない様に各自で氣をつけてもらひたいと云ふ風に廣告すると云ふ有様である。この日子供は化物の玩具をもらうのであるがしかしこれは餘程の富豪でないとやらないのである勿論貧民の子供にはこんなことが出來様筈はない。これが爲めに子供にも「ヒガミ」根性を起すと云ふことはなからうかと云ふことを憂ひて、精神的に彼等を救ふ爲めに志士仁人から金を集め又は古い玩具、古い靴、古い靴下などを集めて警察から案内狀を出す、「十二月廿四日の夕方お前とこの子供をつれて來てもらいたい」と云ふ知らせが來ると、家では警察から來たと云ふので「きつと又子供が何か惡いことをしたのに違いない」と子供を叱りながら恐る恐る警察に來ると署長様の所へ行けと云はれるので、いよ〳〵これは叱られることゝ恐れながら子供の手を引いて靜かにドアーを開いて見ると思ひの外やさしい署長さんがニコ〳〵して立つてゐらつしやるばかりか眞中には美しいクリスマスツリーが飾つてあつて玩具、上衣、シャツ、靴、靴下といつた風の物がならべてある。よく見ると近所のジム、トムの連中も皆來てゐるので少なからず驚いてゐると署長さんは皆を集めてニコニコしながら挨拶がある、「私達を君方は仇の様に思つてゐるであらうが實は私達は君方を幸福にしたい爲めにやつてゐることなので今日も皆で一緒にクリスマスをお祝したい爲めに招いた次第であるが皆よく來て下さつて非常に有難い。これから一緒にクリスマスをお祝ひしてもらいたい」といつて下されると、外の人が立つて、

「ミスター、ジム!!」

「ハイ」

と云つて出て來たのは破れ靴をはいたジムだ。

「あゝ、ジムのは靴が破れてるな」

と云つて出して呉れたのは立派な靴、ジムはその靴を戴いてホク〳〵しながら引下る
と、又
「ミスター、トム」
元氣よくトムが出ると自分の穴のあいた上衣のかわりに立派な上衣を貰つて嬉さうに歸つて來る。こんな具合にして女の子にはお人形、ジバンの破れたものにはジバンと云つた風に皆メイ〳〵立派なクリスマスの贈物を戴いて警察から歸つて行つた。
こんなにして翌年の三月まで僅か四ヶ月の内に少年犯罪者を二割七分乃至三割を減じたと云ふことである。
子供が善良になれば親までよくなつて來る。
子供が良くされると親まで目醒めさせられる。
茲が吾人の社會事業の精神的基礎であると思ふ。
近頃各宗寺院に於て社會事業が盛んにやられるのは嬉しいことであるが、實際お氣の毒に思うのはそれらの方は二重の戰爭をしてゐられる樣に思はれる。卽ち
一つは部内の戰爭であつて卽ち宗内の分らず屋を先づ合點させる爲の戰爭であり老年の先輩や無智な生徒などに理解さす爲めに少なからぬ心配が入る。
二つは外部戰であつて卽ち地方にあつては小學校とか云つたものゝ抗擊反對であるこれが爲に仕事が非常に鈍ぶる譯であるからして、つとめてその方に力をそなへたいと思ふ。それで唯當面の研究のみならず、その方面に於ても深く研究を要することであると思ふ。
これからお嘶に入るのですが、先づ最初に考へなければならぬのは唯小學校の職員等その他のものが疑ふ所の多くは「あんなつまらぬ話を聞かされてなにゝなるか」と云ふことである。
お嘶は嘘を云ふ假空談だと云つて反對する。
「オトギバナシ」をなぜ「オドケバナシ」とするか、又「オトシバナシ」になるか。

だから時々實にヒヤ〳〵する樣な紹介を受けることがある。譬へて見ると、

「これから――先生がおもしろい、ためになるお噺をして下さるから、どこがお噺の眼目か、一言一句聞き落さぬ樣にして聞かなけらばならぬ」

とやられては實に恐縮である。もつと酷いのになると、

「これは明日の綴方の題にするからよく聞きなさい」

とやられるに至つては子供は一生懸命に一言一句を聞き落さぬ樣にと、まるで試驗問題でも出された樣に聞いてゐる。これらは子供がお噺に共鳴することそれ自身が役に立つてゐることを知らないものである。

私が意想外に思つて感じたのは私がある所でお噺をした時に一番前の方に年頃六十七、八とも思はれる爺さんが一生懸命に聞いてゐたがお噺の途中で何を感じたか膝を打つて「アーッ」と大きな聲をはり上げた。あまり大きな聲であつたので御自分ながら驚いたと同時に惡いことをしたと氣附いたらしい。お噺してゐる私の方に手を合せて盛んにお詫をする形をしてゐる。

不審に思ひながらお噺を濟せて壇を下りたが、どうも氣になるのはさつきのお爺さんだ。何んであんな頓狂な聲を出したのか知らんと聞いて見たくなつたので、そのお爺さんを呼ぶとお爺さんは恐縮しながら入口の方から頭をペコ〳〵さしながら入つて來て、

「先生どうも唯今は失禮しまして、どうも年をとりますとしまりがなくなりますので……へイ……實は私の親が文久二年に死んだと申しますから今からもうかれこれ六十年も前のことですが、私が未だ八ッ位の時だつたと思つてゐますが、父が何時も寢床の中で「身の程を知れ」と教へてくれましたが、その時の私には何んのことだか分らなかつたのが、そのまゝで今まで頭の隅の方に潜んでゐたと見ゐて今日お話を聞いて始めて「あゝ、あれだな」と思ひ浮んだのが遂に思はず口に出ましたので……へイ……どうも」と盛んにお詫してゐる。

實際「身の程を知れ」と云つたつて皆様でも一寸云ふのは難かしからう。程とは程合調子、加減、程度と云つたところで分りつこはない。「程合とは何んだ」、「加減だ」、「加減とは何んだ」、「程合だ」と云ふ風である。それが八つ位の子供に分る筈はない。それが六十年も頭の中に潜んでゐて始めて出て來たと云ふのだ。それに私はその時一口も身の程を知れなんて云つたのではない。その程と云ふのはこうなのです。

千里を翔ると云ふ大鳳が或る時考へた。

「自分は千里も翔る鳥の王だ、なんでもこれから世界の果てを一つ見極めて見たいものだ」と云ふので南へ向つて飛び出した。飛べども飛べども海の果しはつきさうにもない。どちらを向いても海ばかりだ。だん〳〵心細くなつて來たが一向海の果しはつかない。その内に羽はだん〳〵弱つて來る。なにか一休みする處はなからうかと見まわして見ると下に大きな船の檣が二本、「やれうれしや」と、とまらうとすると、

「オイ、人の鼻先にだまつてとまるやつがあるか、一體誰だい」

「僕は千里を翔る大鳳だ。世界の果を見極めようとやつて來た所だ」

「なんだつて、萬里を跳ぶ海老でさへも未だ海の果は見極めないのに千里の鳳が世界の果を見極めるとは生意氣だ!! 早く歸へれ、歸へれ。」と云はれたので鳳はホーホーの體で飛び去つた。後で海老は、

「千里を翔る鳳でさへ世界の果を見極め様とするのだもの自分は水の中にゐるのだから海の中に落ちる心配もなし、一つやつて見たい」と又南の方へ向つて跳び出したが相變らずなか〳〵世界の果は見ねさうにもない。身體は又弱つて來るので何處かでしばらく休まうと思つてゐると前に大きなトンネルがある。

「あゝ、これこれ、いゝものが見附かつた」と、中へ跳び込んで「あゝよかつた」と胸を撫でようとすると、恐しい聲で、

「誰だい、人の鼻の穴へ斷りなしに入るのは」

「オレは萬里を跳ぶ海老だ。世界の果を見極めに來たが身體がねらくてしかたがない

暫く休ませて呉れ」

「何だ生意氣な、自分は十萬年も生きる龜だぞ。オレでさへ未だ世界の果は知らないのに萬里を跳ぶ海老位で世界の果を見に來るなんて……オイ早く出ないか、鼻の中がムズ〳〵して困るではないかと云つてゐる内にハックショーと嚏をしたからたまらない。鼻の中にゐた海老は跳ね飛ばされた拍子に大きな岩に腰を打ちつけられた。それで海老の腰は今でも曲つてゐると云ふことである。

こんな風に頭の中に興味を以て聞いてゐる内にその海老が千里を走ることは嘘であるがその筋に神の力が加り佛の惠が助けてこのお噺の働きがあると思ふ。何處が爲めになり役に立つかと云ふことは子供が共鳴すること、それ自身が卽ち利益でなければならないと思ふ。

兎に角、お噺の際に人間が澤山集まれば集るだけ、その個性が滅却されるといふことを承知していただきたい。成程新戸邊博士は話に、人をよく動かす——山室はよく人に感動を與へる——と云ふのは、殆んどその內容が寓話である、觀面に具象化したことを話される。それは個性の發達しないもの、又は滅却されたものであるからである。

所が扨てこれが段々進んで行くにつれて、その寓話で滿足出來なくなる。そこで成るべく自分に近いものになつて來る。これが事實談であり傳說である。

だからこの時代の子供はよく「先生それはほんとうですか」と尋ねることがあるのは卽ちそれである。

こゝに於て傳說が生れ、事實談が尊ばれるに至るのである。そこで佛者が佛の事實の利益を傳說にかこつけて、いつか傳說化せられる事が少なくない。大きな岩や島には殊に多い。

又事實の事が童話化することがあり、又童話が傳說化せられることもある。この童話と傳說とはよく行き來するものであつて、一休和尙、曾呂利の如き者は世人があれ

にこんなことがあつたら面白からうと云ふ樣なことが、一休、曾呂利の名にかこつけて話されるに至つたものが澤山あることゝ思ふ。乃木大將の如きものでもそうである と思ふ。例へば「茄子大將」の如きもので今の人こそ乃木大將の命令に、目のあたり接した者であるから、それが殊更らに面白いのであるが、これが段々傳になつて英國に行き、米國に行きする樣になつて、これが童話化する樣になるのである。

これに伴うて來るものが英雄傳と稱するもので、自己の身體が完全になり、內面的の充實によりて、衝動を來す、そこで仕事をして見たくなるのである。そこで自己對人と云ふ問題になるのであるから、自然こんな話に興味を感ずる樣になつて來るのである。であるから、そんな子供が遠足などに行つてよくこんなことを云ふ。

「先生この山の先きをづつと向ふへ行つて見ませう」などゝ、向ふが漠然としてゐて自己と云ふもののみ明確であるが爲めに、やつて見たいといふ氣になるのである。

この時代に於て日曜學校あたりでは祖師の苦行、傳道の困難などを話しする事は適當である。十二三歳の子供が日校を離れやすいのは、多くこの傳說期とも稱する時代であることを考へないことによるものであると思はれる。

この時代の子供に具體化せられたる英雄談等をして確固たる信念の基礎を作つてもらひたい。

所で今は第一段から第五段までに分つて話したが、この間に總じて通じてゐるものは神秘談であると思ふ、卽ちその聞く人の深さによつて文學的に、哲學的であつて、天籟を聞くことによりて天女の囁を聞くことが出來、渺々たる海邊に佇む時、千古の秘密の藏せられたる中に或る何物かを見出す如く思はれるのは、これ神秘談の生れる所以である。

これから綜合して考へるに、求むる所の者に求むる物を與へ、欲する者にその欲する所を與へることが重要である、かく論じ來るときはお伽噺の不用論も先づなくなる譯であると思ふ、これによつて兒童による材料選擇をなし、自らその子供のお話の目

標を明かにする必要がある。

子供と云ふものはお互に經驗して來た所であるが、然るに扨て子供を扱ふとなると何だか他人を扱ふが如き感じを有してゐる。「大體お伽噺の理論は極めたが、どうも子供が扱へない」。大人と子供とは扱方が異つてゐるかの如き質問を受けることがある私は根本義に於ては差はないと思ふ。唯子供には手數がかゝり、準備が要ると云ふだけのことだと思はれる。勿論そこらは程度の差である。敢て云ふなれば、大人は話を前に聞くといふことがある。譬へばこれから「〇〇氏の△△に就ての講話があります」と云へば一同「ハーこれは役に立つことだから一つしっかり聞いてやらう」と云つた風に、前以て聞くことが出來る。又大人は話を話の中に聞く。それは少々嫌でも「これは必要なことだから是非聞かなければならぬ」と努力することになるが子供には決してそれがない。緣に乘じて話が他に轉ぜられて、遂ひに本話に入ることが出來ないで終ると云つた風の失敗がある。これは幼稚園などでよく經驗する所であるが、

「皆さん動物園に行つたことがあるでせう」「ハイ」「それでは動物園で獅子を見たでせう」「ハイ」「先生猿も居ります」「先生動物園には鹿もゐました」「ラクダもをります」と盛んにやり出す。

そうなると席で云つては氣がすまないと見て中には立つてやつて來て先生の前に出て來る、「オームも居ります」「先生、お父ちやんと行つてお壽司も食べました」などとやり出された日には、どうもこうもならなくなり、媒姆が出て來て靜めようとしても、云はなければ承知しない。そこで先生は「フムー、フムー」と云つてゐる内にとう〳〵肝腎なお話の方はオヂヤンになることはめづらしくない。

所が大人にはこればかりか話から思ひ出して呉れることがあるから結構だが、子供は話の前に聞かず、話の中に聞かず勿論話からは聞かないと云ふので、あくまで現實でなければならないのであるから、よく氣をつけて頂きたいのは、子供は現實に姿が見ゐ、現實に聞き、現實に理解し得るものでなければならないと云ふことになるの

である。そこで自分は現實に話し得てゐるかどうかを考へなければならない。

これについてよく接するのは寺などを會場にあてられた場合、子供が柱の陰、障子の外側にゐることがあるが、その時は如何に聲は聞こえても話は聞かない。そこで騷ぎ出す、これはよく云ふ滿員の不成功に終る所以である。

學校あたりが三教室位打ち拔きにした時など先づ十間位までは、聞いてゐる子供は私の爲めに話してゐるのだなと云ふ氣持で聞いてゐるが、その他の大抵はもう殆んど聞いてゐないと見てよからう。そこで注意を要するのは子供の並べ方である。學校などで組別の出來てゐる時は、小さい子供程、注意が散り易いからして、若し左圖の如く並べる時は、

一年生の後の半分位は要するに始めから話の中に入らない譯になるのであるからして、遂に騷ぎ出す、西端の高學年は可なり聞いてゐても、眞中から崩れるからして遂ひに話は不成功に終ることが多からうと思ふ、そこで無難と思はれるのは左の列べ方であらう。

演壇
生年一
生年二
生年三
生年四
生年五
生年六

所が、話の共鳴點は男女によりて大いに異つてゐるからして、折角のいゝ話も女子の方は盛んに共鳴してゐても、男子の方は一向平氣でゐてどう〳〵不成功に終る場合がないでもない、出來得れば男子、女子、男子と入り組んで列ばす時は群衆心理は男女混合心理となつてその共鳴點の異なることによる失敗も、多少緩和されることゝ思ふ。

子供は現實的なる故に目で聞くと云ふことである。先づ子供を澤山集める爲めに、劇場などを使用する場合と公會堂、教會、寺院などで話を聞くのでは、子供は大いにその印象を異にするのである。これは場所が聞かすのであつて、目で聞くのであると云つてよからう、從つて餘程注意を要するのは服裝である。

次は何んと云つても噺は聲である。嚙みしめて味があり、自分にしつくりと話してくれるのだなと思はねば子供は決して聞かうとしない。

次は態度である、群衆の前に立つて「皆さん」と手を一つ擧げるにしても人數に應じて自ら異る所がなければならぬ。これは自ら考へて如何にも誇張であるかの如く見にて嫌な感がするが決して多數の場合に於てはさうではない、のみならず推理腦力の減退した群衆に對しては是非そうしなくてならないと思ふ。

舞臺にあつて天竺德兵衛が煙草を吸ふ、煙草入れから煙草を出して手先きで一寸口に持つて行けばそれでよいはづであるが、群衆に於ては唯それだけでは煙草を吸うたことを承知してくれない。先づ手を差しのべて、前の煙草盆をぐつと引き寄せる、そ

れから煙管に詰め込む。それも唯の入れ方ではいけない、兩手を肩から動かして大きく捻ぢ込んだのを左から右に大きく、今煙草を拈ぢ込んだぞよと云はんばかりに右に取る。そうして群衆を「ハハー今詰め込んだナー」と思はせておいて首をニュッと前に突き出して火をつけた所を口から煙管を離して煙を思ひきり、フーッとはき出して先づ、エヘン一つやつた所で群集はやつと「ハハー今煙草を吸つたんだな」と合點してくれる。だから早いことを早く云つたからといつて決して早く見ねる譯のものでもない

日頃木村長門守を快く思つてゐなかつた茶坊主が一寸お湯に入つて見ると、澤山列んで洗つてゐる。あれがたしか木村だ、木村は何んでも堪忍々々だと云へば、よい氣になつて……今日こそと後からその尻を抓つたが運の惡さ、長門守と思ひしは日頃の豪の者、後藤又兵衛！あゝしまつた、と知らぬ顔をよそうて洗つてゐると、エイと立ち上つたのは又兵衛、あたりをぢろ／＼見廻わしてゐたが、つか／＼つとその茶坊主に近づくなり、「日頃堪忍強い木村殿を辱めんと、己と間違へよつた不屆者め」とグイと襟首引掴んでエイとばかり投げつけたからたまらない、ブーッとうなりを切つてどんで行つた、と見ると、向ふの腰板にドシーンー」こゝだ、嚴密に云つた時には襟首を引つ掴んだのと、投げたのと向ふにぶつゝかつたのとは殆んど時間と云ふ程の時間でもないと云ふので、グイ、エイ、ドシーン、ではさつぱり話にならない。そこに説明が入り、態度が入つて始めて群衆はその眞裸の茶坊主が、いかにも空中を飛んでゐるかの如くに見ることが出來るのである。勿論こんなことは皆樣も御研究が進んでゐることであるから、私が長々と申し述べる必要もないことゝ思ふが、こゝに容易であつても、大切なことが時々不注意に放つて置かれるのは、目で聞かせる聲の扱ひ方である、即ち言葉の云ひ切りに口を閉ぢること、これによりてどこが云ひ切りかと云ふことが分り自然話に締りが出來る。これで話が、ビシリビシリと頭につめこまれて行く譯になる。

大體に於てお噺の發生には二つの特色があると思ふ。

一つは言語遊戯に屬するもので卽ち發音遊戯である。二つは疑の解釋と云ふことで近代のアンダーセン、メーテルリングと云つた風の人の話の中には殆んどこれを見出さない。けれども童話が古ければ古いだけその特色をよくあらはしてゐると思ふ。

始めの言語遊戯の場合は何時から始まるかと云ふに人間が成長して或る域に到達し生活に多少の餘裕を見出す樣になつてからぼつ〳〵始まるので子供は生れてから二、三歳までと云ふ間はメキ〳〵成長する。この頃から更に本能が發達するこの時の子供はなんでも口にしたがる、甘いも、苦いも、固いも何んでも口に持つて行く。卽ち生きんが爲めの本能でこれが母親の乳房に口を當てゝこれを吸ふ譯になる。この時代を過ぎて五、六歳に達すると一通り身體は成長しこれから先きは多少身體に餘裕を生ずる所からぼつ〳〵言語遊戯を始めるこれが先づ人間が文化生活を始める第一歩である深く趣味を味ひその言語に樂みを持つ樣になることによつて子供の話の際に「口合ひ」「語呂合せ」と云ふものになる、譬へて見ると、

マグソ　マンタロウ
タキチ　タンヂユロウ

と云つた風のものになる。しかしこれは唯子供ばかりでなく人間の文化の進む階梯の中にも見出される。俗に云ふ「駄洒落」と稱するもので低級なもの程はげしい。今の衆議院の議員あたりが盛んに駄洒落を遣つて喜んでゐる所を見ても議員達の低級の度合が略々お分りだらう。丸嚙りの題にこんなのがある。

すきか、まくわをまるかぶり
すき、かま、くわ、を持つ百姓

次には又娘と云ふ題目の中に、

かみすいてゐる三谷町（紙を漉く所）

と云つた風な遊戯のあつたことを紹介して置く。これと同一の階梯を子供が通ると云ふことがお話を聞くと云ふことの第一段階であると思ふ。

これによつてお話に共鳴する點を見出すと云ふことがお噺の第一であると云ふことにも思ひ及ぶ所である。

次は疑の解釋と云ふことであるが、古代には「……であるから……は……と云ふところから始まつた」と云ふことが多い、卽ち疑と云ふものに對する解釋が卽ちお伽噺であつたのである。境遇が大となればなる程疑も增して來る譯であると思ふ。

疑へば迷ふ、迷へば悟りもするものである。大なる疑がある者程賢いと云ふ者で、子供の內はよく「何故か……」「どうしてか……」と何んでも質問する。

「お母さん、何處へ行くの?……誰と?……何しに?……」

と云つた具合に盛んに尋ねる。此の時代の子供は經驗が薄いからして出會ふものが總てが疑はれるのである。それと同じく人類の文明の程度の低くかつた時代の疑がお伽噺となつて殘されたのであると思ふ。

「何故狐の目の緣は黑いか?」「何故我々は死の國へ行けないのか、又なぜ生の國へ死が來ないか」「なぜ生が多く死が少ないか」といつた風のものである。

殊に古代民族の中にそんなのが多い。

狐の尻尾は何故に白いのかといふのにこんな話がある、周防の國に一人の木樵がゐた或る日のこと山で狐を射たが尻尾だけとれて逃げて行つたのでしかたなしに木樵はその尻尾を持つて家に歸つて寢てゐると、夜中にその狐が木樵の夢枕に立つて、

「どうぞその大切な尻尾を返してもらいたい、それは伏見の稻荷樣から戴いた大切な『白い尾』だからどうぞお返し下さい」と云ふことで、あの狐の尻尾の白いのは稻荷樣から戴いたものだと云ふことである。又一つは、

山の中に一匹の熊が朝から晩までゴロリ〳〵晝寢をしてゐるのを見た狐が何か熊をだまして一仕事したいものだと考へてゐたが、

「オイ熊さん〳〵あなたそんな大きな身體を持ちながら晝寢ばかりしてゐた日には罰があたるぜ、何か仕事でもしたらいゝではないか」と親切らしく忠告すると熊もノソ

リ〳〵起き上りながら、

「でも仕事がないから寝でもしなけりや仕方がないではないか」

「でもあの百姓達をごらん、毎日々々よく働いてゐますぜ、そんないゝ身體を持つて働かないと勿體ないよ、……鍬がない？鍬がなけりや、こゝにこんないゝ鍬が十本もあるし、これで土を掘つたらいゝぢやないか」と爪を見せる、「種がなけりや己が持つて來て上げらア」

と云はれて熊はいや〳〵ながら地を耕して種を蒔いた。するとやがて花が咲いて赤い美しい茄子の實が出來た。すると狐は、

「ネイ熊さん、君は上を取りたいかい、下にするかい」

「さあ、僕は下にしよかなー」

「ぢや君が下をとれば僕は上をとるぜ？」

「それなら僕は上にしよか」

「それなら熊君、君が上をとれば僕は下をとるがいゝかい、下にはきつといゝ實がなつてるぜ」

「ぢや僕は下にするよ」

「君しつかりきめなくては困るよ、ぢや君は下をとれ僕は上をとるから」と云ふので約束が出來上つた。

狐は赤い美しい茄子を取つて食べた。熊は定めし下にはいゝ物があらうと掘りかへして見たが何もないので失望した。約束しかしだと云ふので、

「では熊君、來年は君上をとり給へ僕が下をとるから」と云ふのでその場はすんだ。

今度は又土を耕して狐は又種を下した。

雨が降つて、日が照つて、その内に立派な勢のいゝ蔓が地面一杯にひろがつた、それを見た熊公は少なからず喜んだ今年こそは立派な實がなることゝ待つてゐると花は一向に咲かない、その内に霜が降り始めると、蔓が枯れる葉が萎びる。そこで熊公大

いに失望してゐる所を狐は、

「オイ熊さん、去年からの約束だ、今年は僕が下をとるぜ」と云ひながら枯れた蔓を引つぱると大きな芋がゴロ〳〵と轉げ出た。これを見た熊は、

「オイ狐君、そんなに君ばかり取らないでおれにも少しは分けて吳れよ」と賴んだが狐は約束だからと云ふので聞かなかつた。

それからしばらく經つてある日のこと狐が野原を歩いてゐると熊が大きな馬を捕らへて食べやうとしてゐるので狐はそれがほしくなつて、

「熊さんその馬を僕にも少し分けて下さいな」

と賴むと熊は、

「お前は大きな尻尾を持つてゐるだらう。その尻尾をあの馬の尻尾に結び附けて置いて馬の尻に食ひ附いたらいくらでも馬が食へるではないか、しかし氣をつけないと馬に蹴られるぜ」

と云はれて狐は大喜びで自分の尻尾を馬の尻尾に結び附けて馬の尻に食ひ附かうとすると馬から蹴飛ばされる、逃げやうとしても尻尾がしつかり結び附いてゐるので逃げられない。その内に谷川に蹴落されて半死半生の處をやつとのことで生きかへつた

今でも狐の目の縁の黑いのはその時馬に蹴られた跡だと云ふことである。古事記の中に、

伊弉諾命が黃泉の國に行つて伊弉冊命の見てはならないと云ふ所を見たと云ふので伊弉冊命は伊冊諾命を追つかけて出雲の國の比平坂までやつて來た時伊弉冊命はそこに石を立てゝ黃泉の國と常世の國に境をつけた。そこで伊弉諾命はその罰に常世の人民等を千人づゝ殺してやると云つた所が伊諾冊命は「お前が千人殺せばこちらは千五百人生んでやる」と云つたので黃泉の國と常世の國とは行き來が出來なくなり死ぬる者より生れる者が多くなつたと云ふことである。

これらはたしかに疑の解釋であると云ふことは明かである。

であるからして小さい子供を扱ふには先づ「何故に」と云ふことを第一として次に發音遊戯と云ふことを第二の問題とするが必然であると思ふ。

勿論これらは程度の問題であつて次の第二段に來るものは寓話に屬するものであると思ふ、卽ち七、八、九歳の頃でこの類には非情の者、人間以外の者が出て來る場合が多い。

これには二つの必然的意氣があると思ふ。

一、性格の描寫

二、類似感念(原人生活の複顯)

大人で見ればこゝに武彦と云ふ惡人があつたと云へば直ちに武彦と云ふ者は惡い者だと云ふ記憶經驗が働き易いが、子供は次郎三郎と云つただけでは直ぐにその性格を分らすことがむづかしい。そこで動物を以て來れば熊と云へば直ぐ剛情我慢であるが血のまはりの惡い奴だなと合點が出來、兎がピョン〳〵と飛んで來たと云へば優しい者を想像する。卽ちその性格を具象化したものをあらはすのである。

寓話は推理能力の薄いものに想像させ易くする爲めに作られたもので「あれは鶴の樣だ、ベリカンの樣だ」と云へば一々說明せずともそれを想像するのである。そこで働きから云つて見れば類似觀念の働く時であるから似た者を想像するのである。

だから十歳位の子供によくあるのは、石燈籠が恐かつたり、何んでもないものが恐ろしかつたりするのである。これが時期を過ぎると差別觀念が發達する所からもうこんな寓語では承知出來なくなる。似た者では安心が出來なくなつて差別を見出す樣になる。

「內のお父さんと、雪ちやんとこの小父さんはよく似てるなー」と云ふと、

「なーに違つてら、お父さんには眼鏡があるが雪ちやんのお父さんはあてゝないぜ」

と云つた風である。

又原人生活の複顯と云ふことがある。それはめつたに見たこともない筈の動物の觀

念があらはれて働く。これは原人時代に動物と雜居時代の潜在意識が働くのだといふことである。

兎に角、お話の際に人間が澤山あつまれば集まるだけその個性が滅却されると云ふことを承知していたゞきたい。

話をする時は必ず「……であるんである」と顎をシヤクル所にあると思ふ。又今一つは握り手を振り上げて、テーブルを叩く所卽ち今云ふ、目に見せる聲である。

これは又同時に呼吸の調節にあづかつて力があることを云つて置く。又顎の角度によつて聲に變化を來すことがある。諸君試みにやつて見たまへ顎を突き出した時と、引き締めた時との差を。

次に申し上げたいのは、現實に興味を感ずる話でなければならないと云ふことは勿論であるが、往々にして、笑を以て話の興味あるかの如くに考へてゐる方があるかの樣に思はれる。けれども笑が必ずしも興味でないことを注意して置く。私は笑を大別して會心の笑と、侮蔑の意味の笑がある。

我々の云ふお話の笑は、急激なる變化による、或る矛盾より來る、所謂侮蔑の笑でなくて「ハヽーナルホド、さうだな」と思わず綜のゝびる會心の笑でなくてはならないと思ふ。さうでない時は、所謂落語師、講釋師のなす所と選ぶ所なしである。

子供には、笑ひはなくとも滿足されるものであると云ふことをはゞからない。卽ち會心の笑を具體的に云つて見れば、

一、自分が云はうとする所を明確に、適切に云ひあらはされた時。

二、明らかに、それとは意識には止まつてゐなかつたが云はれて見ると、「なーる程さうだつたわい」とうなづかれた時始めて、期待、滿足、印象の順序を踏んで、始めて興味を生ずることになる。これベルグソンの謂ふ教育哲學の眞髓であると思ふ。

我々はお噺をする時には子供に深い印象を與へることに努力しなければならない。

忠臣藏は實に面白い。何が面白いかと云はれると一寸返答に窮するであらうが、そ

れは國民性を遺憾なく現された、その忠臣藏の行動に吾々が共鳴するから面白いのである。又藝術品が喜ばれるのもそこにあると思ふ。卽ち忠臣藏と云へば、德利を以て雪の中を千鳥足で歩く赤垣を思ひ出す。その自分の腹の中の赤垣と合致する赤垣が、舞臺に現れて來た時、無上の興味を生ずるものである「あそこはこんなになるだらうこゝはあんなになるだらうと想像し、期待した事が、ピシリ〳〵と適中する所に痛快なる興味を生ずるのである。そこで興味が涌いた所に深い印象が殘されることになるそこでお噺は子供に疑を明確に意識させると云ふことが大切であると思ふ。

お噺が子供に喜ばれる所以を考へて見ると、

一、疑に對する解釋。

二、希望に對する差別の手段、又は希望の滿足である。これに就いて思ひ及ぶことがあるが。我國の民族童話は室町時代の僧侶の手によりて、なされたものが多い。がそれに一つの動かすことの出來ない特色が見出される。弱い者が勝つ。牛若が遂に辨慶の荒武者をやつつけたとか、兄弟が爭つて最後の勝利を弟が占めたとか云ふ風である。アブラハムの兄弟の話などの終末は、肉慾の滿足によつて、終つてゐるが。五山の僧の手によつて作られたものは未だこの肉慾では滿足出來ない。

更らに佛門に入り出家得脫したとまで行かねばならぬ。八ヶ月姫とか、鉢かづきと云つたものを見ても分る所である。

三、無聯絡に攝取したる諸材料に統一を與へること。大きい奴、强い者と云ふ一つの智慧、大きい者と弱い者が一つだと云ふ風な無聯絡なものに統一を與へる。龜は歩みがのろい。兎は早い。油斷をすればいけないといふ。各無聯絡な智慧を統一することによつて、話が成立する所以である。

四、子供自身の生活に經驗したる事の再顯、或は表顯によつて興味を感ずるものである。

五、以上の理解によりて、更に進みたる生活に入るべき諸要素の培養によりて、諸

徳目に對する理解を以て、よく高き生活を引くと云ふことである。であるからして、お噺は單に子供の問題にあらずして大人の問題であると思ふ。

要するに無聯絡に取入れられたる智識を押弘めて、更らにこれを具體化したるものにすることであると思ふ。學校の諸科目の中からは、克己、忍耐の諸德目は學べないが、所謂お噺によりて多くのかゝることを取入れることが多いと云ふことである。

そこで日曜學校あたりで、法話とか、訓話とか云つたものは僅かに十分か、十五分にすぎないと云ふことは、甚だ物足りないことゝ思ふ。これでは、宗教々育と云ふにあまりに貧弱であると思ふ。そこでこれらの意味を、お含みになつて、日曜學校と云ふものを、も少し徹底さしていただきたいと思ふ。

多くの偶發的犯罪と云つたものは、多くの場合に境遇に支配されることが多い「人の物を取る」「人を殺す」と云ふ樣な恐ろしいことでも、多くは、その取る、殺すと云ふことを豫期せないで、唯その場合に、左右せられるのである。多くの犯罪の中、止むを得ずしてさうなるものは、習慣性の七割であると云ふ。少年の入獄させられるものゝ百人中の四拾人は、十六歳以前であると云ふ所から見ても。彼等少年時代が如何に重大であるかを感ずるのである。英國あたりでは、少年牧師がゐて、又それに關する書籍も多くあると云ふことである。

以上述べた所で、大體一通りお話したつもりであるが、最後に申して置きたいのは子供の言葉についてゞある。子供には持ち合せの言葉が非常に少ないものである。さう云ふと思ひ出したのは、私の幼稚園で、子供が澤山積木の小さいのを積んでゐた。おしまひが濟んで後で先生が子供に向つて、

「皆さんまだ積木が、十二、三殘つてゐますよ」と云つたら、子供はさも不審さうな顔をしてゐたが、

「アラ先生積木がオヂイチヤン!!」と云つて目を圓くした。これは正しく子供に大人の云ふ十二、三なんて云ふ都合のいゝ言葉がないからだ。

誰でもよくやることであるが、チンチンチンと七時がなりましたと語れば、大人はそれでよいが、子供は現實三つしかチンチンチンがなつてゐないので間違を生ずることが往々にしてあることである。

だから子供には、おれは林檎を三つも食べたと云つたのでは子供には、そのほんとの三つは分からない。そこで「一つ林檎を食べてあゝおいしかつたと又一つ食べても一つ食べたんですよ」と、かたれば子供には、「ハハー三つ食べたんだな」とその三つが明確に頭に入るのである。

私がかつて、「或程お嘶の祕決はこゝだわい」と感じたのは蒲苅島で或る人のお說教を聞いた。その說教に、

「都には水道と云ふ大邊便利なものがある

水道とは水の通る鐵の管であるゾヨー

水が水道を沿ふて注くが如く、彌陀の慈悲が私共の胸に注がれるのであるゾヨー」

と云はれた。これでこそ、水道を知らない田舍の翁さん婆さんにも、ようくそこの所が味へる譯である。

語調を氣をつけなければ。子供は頭の働きが遲い。そこでそれをしばらく考へるだけの餘裕を置いてやらなければ、子供はそれを明確に頭の中に入れることは、出來ないのである。文章は誰も一生懸命に練るが、話を練る人はあまりない。子供には子供の心。子供語で話してもらひたい。そこで子供に話す場合には少なくとも、一遍は書いて見る位の準備はあつてほしいものだと思ふ。私が九州に行つた時に、島原半島の加津佐と云ふ所に泊つたが、夕方その邊の人に案內されて、海岸の方に行つた所が、海岸の非常な斷涯の上に松が一本海の中へ突き出てゐるのがあつた。その松の木に以前大きな古い猿がゐたと云ふことである。その猿と云ふのがなか〳〵のいたづらもので、下を船で通る人の眞似をして、しかたがない。どんな事をしても逃がさうとするけれど、またどんな事でも眞似をして、逃げない。それかと云つて斷涯のことである

から、行くわけにも行かず。皆何とかしてやりたいものだと考へてゐた時、一人で船に乗つて、その下へ行くと待つてゐたと云はんばかりに、猿は老人の櫨を漕ぐのを盛んに、眞似してゐる。老人は益々手を早めると猿も益々早める。そこで、いよ〳〵こゝだと思つた時、老人は櫨を持つたまゝ海の中へ落ち込んだ。上の猿もまけるものかとザブーンと海中に落ちこんだ所を、こゝだと云つた風で掉で殺して持つて歸つた。

皆のものが不思議さうに尋ねると老人は笑ひながら、「なーに奴の手で奴を捕つただけのことだよ」と云つてゐた。

皆さんも是非この「向ふ道具」でやると云ふつもりでやつていただきたいと思ふ。

お伽噺の話方及び構成法

岸邊福雄

始めにお伽噺に就て御話しやうと思ふ。「おとぎ」とは眠る時に側に居て話しやうと云ふ事で、小供を眠らす時、負へば「ネンネコロリ」を歌ふ所をお話するのである。終日小供が元氣よく活動して後夕方たつぷり御飯を戴き兩親の前で緩り手足を伸べてうと〳〵眠る時は、此の世ながらの極樂であり、一日中最も心の平な時で此の時最も効果が有る。小供は心の平なる時話せば喜んで聞くが、少しでも心の焦立つた時には中々聞くものでは無い。隨つて左程の効果も無い。心の平なる時話を辿り〳〵眠て行くと云ふ樣な時の話が、最もよく心の奥底に染込むものであつて、小供に喜んで聞かせると云ふ事が最も大切である。喜びとは有り難い心持になつた時起るものであつて、

此が有つたなら決して惡い事は出來ない筈である。だから喜びを與へるお伽噺は道德上敎育上最も有効なものである。

小供は小學校で一日四五時間づゝ六日間續いて働かなければならん。一體日本では小供の學課が重過ぎる樣である。身が枉る樣に重い學校道具を見ても、其だけ彼れの學課の負擔が重いと思ふと、可愛相で堪へられない。小供は此の六日間の疲れを日曜日に醫さなければならん。此所に於て日曜學校の必要を切に感ずるのである。小供が日曜日に日曜學校に行き、自分の家より餘程大きい御寺の中を歩くと、自分の家の樣にギーギーとは云はない。一體音は氣性を生ずる上に大な關係があつて、日本の薄齒下駄の音は決して剛健な氣性を作らずして輕薄に導く樣な氣がする。此は餘談として小供が大きな寺の中を歩くとドシン〳〵と大きな音がする、そして自ら肩を反らして歩いて居る。おゝ可愛い！實にいゝ姿勢である。此だけでも大したものである。其れに有り難い歸依する佛樣の前に叩頭づく。おゝ此だけでいゝ。其にまだ讃美する歌を歌ひ、面白いお話を聽く……。

日曜學校の事は明日にして今日はお伽噺の話し方を御話しいたします。お伽噺は小供に喜を與へる事甚だ大きく、又之によりて色々有効な事を小供に與ふるものである若しも人間から文字を取り去たならゴッ〳〵又ゴッ〳〵で殺風景のものでありませう此大切な文字的興味を知らず識らず小供に與へるのがお伽噺である。元來お伽噺と文字とは甚だ關係の深いもので、初は文學者によりて作られたものであるが、終にはどうだ話して見ないかと云ふ事から其文學者連が話し始めたものである。けれども子供に話をすると云ふ事は幼稚園や小學校の先生が本職である。文士は興味中心であり先生は敎訓中心であるので、どうも先生の方が受けがよくない、小供は面白いものには蜜の樣に集るものである。其所で私は興味中心と敎訓中心とを一所にした樣な話でなければならんと思ひ、面白くて爲になる話をする樣にして居る。面白くて爲になる話と云つても、之より前は面白い事、之より後は有益な話と分けるのは甚だ不味い、初

から終まで何處とも無くふつくりと含める事が大切である。又宗教的教育をしやうと思ふ時でも、何處とは無しに宗教的感味を味はせる樣にしなければならん。

教育的お伽噺とは甚だ範圍が廣く、普通教育的お伽噺と思はれて居る教訓的お伽噺は、教育的お伽噺の中に其一部として呑んで居る。强て勸善懲惡で無くとも教育的と云ふ事は出來る。或る川で一方から胡瓜が流れ一方から靴が流れて來て、二つ一所になつて。キユークツ(窮窟)。此でも皆さんは御笑になる。笑と云ふ事はいゝ事であつて此の話も教訓的では無いけれども、教育的とは充分云へる、此んな短いものでも、小供は大變喜んで聞くものであつて、文字の一部を占領して居る滑稽的風味を味はせる事が出來る。此も一種の教育である。最も廣い意味で云へば害の無い話は教育的と云ふ事が出來る。

以上お伽噺とは如何なるものかと云ふ事に就てお話したが、次に話しをする時に注意しなければならぬ事を思ひついたゞけ述べて見やう。

練習の必要。　お伽噺をする時には、少しでも早過ぎたら小供に分らない。遲くてくどいと小供は厭いて來るので、話す時は充分稽古してをかなければならぬ。紙に書いたものを見て話すなんか大禁物である。充分練習して其の話が全く自分のものになり自分と話と一になつて居なければならん。私の經驗によると、話が自分のものとなつた時には、話す時、身が浮く樣に嬉しい心持になる。此所まで行て居らないと成功はしない。一體日本では小供を輕く見る風がある。一等國と云つて居る我國民は未だ〳〵諸外國から輕く見られて居る傾きがある。此を今一歩國位を高めて何所に行ても一等國たるの面目を保ち得る樣にするのは、全く現在の小供である。其を始めから馬鹿にして教育して居るなんて、何たる矛盾だらう。吾人は小供を尊び、其の教育に重大なる任務と責任とを持たなければならぬ。世界の大雄辯家、米國の大政治家として知られたるブライアントは、文學者にして法律家たる自分の妻と小供とを前に置き、次の日曜日に日曜學校で話すべき話を試み、妻子に訂改して貰ひ、次の日再び其の話

をしてやうやく妻子の賛成を得、然かる後日曜學校に行て話されるとの事である。世界の雄辯家にして此の苦心あり此の如く小供に對する尊敬心がある。此の一事を以てアメリカの將來を律する事が出來やう。

又話す時場合によりては短かく、時によりては長くしなければならない。此の時充分自分のものとなつて居らなければどうする事も出來ない。次の辯士は來ないのに早くやめなければならぬと云ふ事になり、又小兒が疲れ切て居るのに長く話さなければならぬ樣になる。此の場合長く話すと云ふ事は、害有りて益なきものである。要するに話の練習と云ふ事は大切な事であり、話の効果に甚だ影響するものである。

演題。　演題はなるべく出さない方がよい。すべて話と云ふものは自分が主で無く聞く方が主である。それ故に話の内容は聽衆の如何によりて定むべきものである。又疲勞して居る時と自ら形式内容をかへなければならない。聽衆は如何でもいゝやるだけやるでは成功するものでは無く隨つて何等の効果も無い。然るに強て演題を出せと云はれた時には、如何樣にでも話の内容を變じ得る樣な演題を出して置くがいゝ。此は演題に就てゞは無いが、自分が話す時は前辯士の話を後半分位聞く事が必要である前半を聞かないのはあまり長く聞いて居ると疲れるからであり、後半を聽くのは其の時種々會場を觀察しなければならぬからである。觀察すべき細目は後に一々に就いて述べやう。

服裝。　此は又大いに注意しなければならぬ事である。鏡が有るならば鏡を見て正して登壇するがいゝ。洋服で云へばチクタイが歪んだりカフスが出たりして思はぬ滑稽を演ずる事がある。最早小供に喜ばれて居ると思て得々と話して居ると、豈圖らんや先生の顏に墨がついて居ると云はれると汗を流さなければならぬ。さうすると話の先を忘れると云ふ風に話の全體を破壞されて終う樣になる。髭もなるべく剃つたがいゝ女の人であるなら髮を極注意しなければならぬ。靴も充分磨かぬと、僕のお母さんは僕が靴を磨かずに居ると叱るが、先生の御母さんは叱らんのか知らんと云ふ樣な顏

で見て居る。此も注意すべき事である。其の他小さな事でも服裝は衆人の視線の集まる所であるから、注意しなければならん。次に服裝では無いが、出席の時間に後れて汗を拭きながら登壇する人を時々見うけるが、聽衆に不快な感を與へる。少し位暇が入つても靜まつてから登壇した方がいゝ。

拍手。　此は自分で爲すのでは無く、聽衆の拍手を觀察するのである。先に前辯士の講演を半分聞く樣に云つたが、此の時注意すべきものであつて、聽衆が疲勞して居る時は、必らず緩るく重く叩くのである。だから此は見なくては駄目である。隣室から聞て大分盛に叩て居るわいと思ふて登壇して思ひがけ無く聽衆が疲勞して居る時が有る此に反し小供が心から歡迎する時は輕く早く叩くのである。

登壇。　愈々登壇すると云ふ時は滿場の視線を一身に集めて居るから餘り氣取つてはならないが、又餘り沈んでもならない。氣取らない樣沈まない樣其の中間を得なければならぬ。愈々壇上の人となつた時、辯士の視線はテーブルの上に在る。先づ第一に靜かにコップの三分の一位水を注いで一口飲み又靜かに置く、其の時聽衆の視線は辯士のコップを持た手に集まつて居るから、まだ顏は上げない。靜かにコップを置いた手を靜かに指の先で机の上を摩る樣にして自分の前まで持て來て急に一二寸机より上に離す。其と同時に顏をあげて、今まで手先に在た視線を、總て同時に顏に受けなければならぬ。そして視線を一身に集めて一切を捕へなければならぬ。次に變調ではあるが、前の先生が失敗して總壞れして居る場合には、辯士自ら手を叩きつゝ登壇する小供は其に負けまいと思ふて、尙一層叩く、然かし視線を集める。其して子供は最早辯士の暗示にかゝつて居るから辯士が止めると皆一時に止めるのである。又前に餘興で手踊の如きものがあつた後では、子供の頭の中にはまだ視覺より來た觀念が殘て盛に働いて居る。視覺より來たる觀念は、又視覺より奪はなければならぬ。故に此んな場合には、手巾か何か探す眞似をする、さうすると子供は、一體何して居るんだ……アー手巾かと云ふ風に甘い工合に子供を捕ふる事が出來る。又前辯士が長くやつて疲

らして居ると見た場合には、先生の話は此だけと短かい事を示し、前辯士の話の語が六ヶ敷かつたと思ふ時は、思切り平易な小供の語で始める。そして疲れて居るけれど短かくて易いなら聞て往くと思はせなければならぬ。此んな種々の點より見て前辯士の話を半分聽く必要が有る。

水。　水はなるべく飲まぬ方がいゝ。若し飲めば湯の方がいゝ。湯でも熱い程がいゝ。卵を飲めば聲がよくなると云ふ人が有るが、食道より胃に行き、聲には無關係である。聲の最も必要な義太夫は歸納的に此の事を研究して居る。彼等は漆塗の蓋の有る木製の器に熱湯を入れて、其して此は飲むのでは無く、一寸開いて湯氣を吸入するのみである。

腹。　腹はなるべく輕い方がよい。からと云つて眼の眩む輕いのはよくない。普通腹八合と云ふが此の時は六合位がいゝ樣である。

眼。　場内の十分の七位の所を中心として視線を置くがよい。假りに十間とせば七間位前の所を見て滿場を眼で捕へなければならぬ。

陣取。　或る人は一圓の中心に陣取るが最もよいと云ふが、私は扇子形の會場で其の要の所に陣取るが最もよい樣である。一目の本に場内全體を見る事が出來るからである。又小供を配列するには、比較的年上の者を兩側に置き小さき者を中心に置くがよい。大きい者は話の系統で興味を起すけれども小さい者は聲によりて管理をする事が出來るからである。

お伽噺を繰り返す事。　先生が話をする時、生徒の中に若し其の話を知て居るものがあつて、隣の者の耳に電話をかける事が有る。此を見て不快に感ずる人も有るが、其は餘り歪み根性である。吾人は彼等が電話をかけた後の態度を見なければならぬ。

一往は知つて居る嬉しさに隣に電話もかけやう、然し電話をかけ終つて先生の方を見返つた時の態度を見ると、確かに外の小供より熱心である。其の話は知つて居るから聽かぬと云ふのでは無く、より以上に興味を以つて聽いて居る。私は五年間に桃太郎

の話を二百度話した。同じ噺を繰り返し捲き返し話す所に眞のお伽噺の効果が有る。何度も〳〵聽く内に自分が話の中に入つてしまう。或る所の小供は桃太郎さんと云はなければどうしても返事しない子が出來たことがある。此所までゆくとお伽噺の効果は大したものである。純粹の記憶は一寸見て何處かで見た樣な人間だな位では無い。何の某何日何處で何の用でまで記憶して居なければならん。此所まで行くには一度や二度では六ヶ敷い。小供の記憶は一度覺つたものを保持する力は强いが、一寸見て一寸覺ゆると云ふ事は困難である。だから一度や二度話を聞ても話の内容は茫として居る。三度も四度も同じ話を聞く内にだん〳〵系統が了解され、終に其からかうでしやう、あゝでしやうと問答する樣になり、最後に小供が自分に話したいと思ふ樣になる。同じ話でも決して厭かない。厭かない所が反て同じからん事を欲求するのである。例へば小供のよく知つて居る話をすると喜んで聞いて居るが、若し少しでも前の話と異うと直ちに訂正する。此を見ても同じ話に厭かない事が分かる。以上述べた樣に同じ話をする事に興味を以つて然かも有効に聞かせる事に於て、一度〳〵語を更へて話す事の遙かに及ばざる所である。

話の中の人物に位置を與ふる事。　小供は割合單純であつて話の人物が多かつたり入込んだりすると分からなくなつてしまう。此を助けるのが話の中の人物に位置を與ふる事である。例へば目上の者は左に置き、目下の者を右に置く事に定めて置くと目上の者が目下の者に對して話す時は右下を向き、目下の者が目上の者に對する時は、左上を見て話すのです。すると小供に分かり易く興味を加へるものである。餘り甚だしくやるのは惡いが、唯少しする丈けで効果の有るものである。此でも餘り入り込んだ話は分からない。譚中に活躍する人數は尋常一二年なら二人位で充分である。三人となるとはや混雜して解り難くなる。

モデル。　話して居る内に其の人を活動させる爲めに「モデル」を作つて置かなければならん。桃太郎を話さうと思ふ時、意志の强い、身體の大きい、快活な小供……

誰に似て居るか知らん、と物色して誰の小供と定めて置いたら、其の桃太郎の話には甚だ活氣がわいて來る。其の他老人軍人の一々「モデル」を定めて置いて、話す時は思ひ浮べ得られる樣にして置かなければならぬ。人間の「モデル」を作つて置かずとも、畫を見て置くだけでも甚だ有効である。

音聲。　聲はよくとも其が聞へなければ何にもならない。此位の家で此位の聽衆ならば何時間位は出來ると考へて置いて、中々堪へないと思ふ時は其話を短かくやらなければ終りに至つて聲が續かなくなる。聞へない時は大人は眠るから靜になつていゝが小供は活動し出すので愈々話し難くなる。此んな時は早く止めた方がよい。又話し始める時は聲を小さくして注意を集め、話して居る時は餘りに身を動かして小供の注意を散らす樣な事は避けなければならん。

態度。　此も亦話す時最も大切な事である。動かさなければ話に力が入らず、少しでも動かし過ぐれば小供の注意を散らす虞が有る。然らばどの位動くべきかと云ふに自分の立つて居る眞下に一尺四方の廣さを想像して其の内に右か左かの足を入れて置く心持で居たらよい。若し會場に柱でもあつて其に聽衆の顏が隱れて居ると、どうかして其にも顏を合はする樣にしなければならん。顏を合はさないと、其だけ興味も少なくどうしても其所から崩れ出すのである。同じ理由で机の上にも顏の隱れる樣な花瓶などは置かぬ方がよい。若し聽衆の一部分が騷ぎかけたならば其の方には大きな聲を送り、他方には顏を向けて總てを支配する樣にしなければならぬ。

言葉。　分からない六ケ敷い言葉が少し出ると最早話は分からない樣になる。自分が普通話して居る語は分かると思つても、小供には案外分からないものがある。自分が話す時人に用語だけ抜書して貰らつたら、いか程六つかしい言葉の多きかゞ分かるだらう。決して、非常、注意、姿勢、正しく、甚だ等は話す人は氣付かないが、六つや七つ位の小供には一寸分かり難い。

調子。　話す時には句讀を明確に切り、立板に水と云ふ樣にサツ〳〵と進行して行

き然かも分かり易く、早過ぎない樣にしなければならない。アーエーなど云つて居ては決して小供に感興を起させない。小供がよく話を聞き其の話の中に入つて仕舞つた時には話が終つても拍手はせず茫として居る。其して辯士が降壇してしまつてからやうやく喝采を始める。

質問。　話を始める前か、終つてからならよいが、語の中に質問するのは話を殺す樣なものである。今まで話に集中して居た小供の注意を消して仕舞ふ。

感情の表現。　自分が話の中に居て、眞に話して居るなら感情の表現は自然に出來るものであるが、此所に注意すべき二三に就て話します。笑はお伽噺に甚だ必要なものである事は前に話した通りであるが、話が面白くて笑ふので無く話し手の笑ふ顏を見て笑つたのでは面白くない。辯士は餘り顏を崩さないで小供の笑を誘ひ出す位の所で止めなくてはならぬ。又辯士は少しでも泣いてはならぬ。辯士が泣けば悲しい所が反て滑稽になるのである。泣かずとも泣く位の所で「うら聲」位は用ひてよい。小供は餘り泣かしては惡るいが滅多に泣くものでは無い。

其の次に「シマツタ」と云ふ時の表情に二つある。上を見て話た時には其所に尙幾何かの希望があるが、下を向いて言ふ時には最早絕望の時である。其の他恐怖は瞳子を据ゑ、眉の間に皺をよせて僅に顏を左右に向ける。驚愕は口を開く等一々申さずとも自己が話しの中に入れば自然に出來る事であるから略します。

以上は實に話し方の唯一部に過ぎない。其の外注意すべき事は殘酷な話はよくない。繼母が小供を虐待する話等は大禁物である。西洋の學者が「小供と遊ぶ事の出來る人が小供を敎育する事が出來る」と云つて居るが、實に千古不變の語である。小供に面白い話を話さうと思へば自分が小供にならなければならぬ。よく觀察してチイーツアナチョコガ(小さな雛が)と云ふ樣に小供と爲り切らなければならない。其の他物賣りの聲、アンマ、唱歌等平常に出來るだけ觀察して置いたら、此等を用ひて話を生かす事が出來る。又話はなるだけキチ〳〵と極めて進まなくてはならない。進行が同りく

どかつたり説明がくどかつたりすると小供は厭いて來る。

省略法。　例へば鐘が十二時を打つ時十二もゴン〳〵と云は無いで、始め二つゴン〳〵と鐘の音を稱へ、それから指を折つて中八つを小供に數へさせ、後二つ又ゴン〳〵と稱へておゝ十二時だと云ふ風に省略する事が又大いに必要である。

形容。　何事でも形容する時は又小供に分かる樣に形容しなければ何にもならない夜遲いと云ふ經驗が小供に無いから夜は森々としてでは分らない。ランプも消ねて、電燈も消ねて、ガスも消ねて電車もねんねして……等彼等の日常經驗して居る事で説明し如何に夜遲いかと云ふ事を想像させなければならぬ。大風を表はすにも、色々の語を用ふるよりも、「帽子を吹き飛ばす樣な大きな風」、と云つた方が小供には餘程大風である。其は小供に於ては大切な帽子を吹き飛ばすと云ふ事は一大事であるからである。此の如く色々小さな事によく心掛けて觀察して居なければならぬ。

次に米國の日曜學校の事を御話致す前、私の幼稚園で如何なる事をして居るかの一を御話しやうと思ふ。私の幼稚園には地藏樣が安置してある。地藏樣は未來に於ける幼稚園の先生で、あの無限の豐かさと慈悲とに滿ちた先生に御願して置くと此んな安心な事は無い。此んな理で生徒で死んだ者の寫眞を、地藏樣の首に懸てあるカバンの中に入れてある。私は毎朝其の前に行つて禮をする。宅の小供は毎朝御茶をあげる樣になつて居る。其して一年に二回一番花の有る時、花の日と稱へて全生徒が花を持つて來る樣にしてあるのである。其の日にはそれは澤山の花が集まる。集まつた花で御殿を作り其の中に地藏樣を安置し死んだ生徒の寫眞を出して、僧侶の御方に御經を讀んで戴く樣にして居る。此が私の幼稚園の年中行事の重なる一である。小供の兩親も來て非常に喜んで居る。實によい事を始めたと私自身でも亦大いに喜んで居る。

次に米國で見る日曜學校の事に就てゞありますが、米國で日曜學校と云へば無論キリスト敎に屬したものであるが、其の中でも新敎と舊敎とは互に長を誇り短を攻擊して相爭つて居る。形式に於ても新らしいものも有れば、舊式に囚はれたるのも有るが

皆中々熱心である。宗教は老人になつてから信仰を高め様など考へても駄目である。

其れより小供に宗教々育をすると云ふ事は實に宗教の百年の計である、と此所に目を付ける米人は日曜學校に全力を用ひて居るのも無理は無い。

小供の漸く歩ける様になるには生後十三ヶ月と云ふが、米國では此位から日曜學校に來て居る。無論お伽噺も聞かなければ讃美歌も歌は無いで、唯日曜日一日を自分の定められた席に來て座り、人の爲す事を見て居るだけである。唯其だけの事であるが日曜學校に通ふ習慣が出來て、やがては直に信者となり宗教の生命を得る様になるのである。

或る時シカゴの或る日曜學校を見に行つた時、女の教師が居て非常に歡迎してくれた其して「此御方は遠方から御出になつた日本の御叔父ちやんです」と紹介してくれたので、小供は喝采して歡迎の意を表した。やがて小供等が集つて來て、私に來いと云て呼ぶので行つて見ると、私を中に立てゝ「歡迎」の歌を歌つて、私の周圍を回り一人々々握手をした。其の時、實に嬉しかつた。唯其の一事で「遠方より來た者は歡迎すべし」と云ふ事を教へて居る。人間には上下の差別は無い。人を愛しなければならん。と云ふ御佛様の御教の有りの儘を十分教へて居るのである、こんな風で總てが温情に滿ちて居る。少し大きくなると學課を授けて居る。其の時は實に靜かなもので、參觀に行ても「暫く其所に」と云つて決して小供に近づかせない。然かし此の時間は極短かい。私の學校でも此に似た様な事を爲して居る。毎朝「御早う」の挨拶が濟んで「おつとめ」と云ふと小供は皆座て手を膝の上に組み默て眼を閉ぢる。愈々用意が出來ると、私が何か格言を一句云ふ、さうすると小供が其を一齊に眞似ると云ふ様にして居る。例へば「小さい子を可愛がる子は強い」「人を打つ子は鬼、桃太郎さんは打たない」「泣く子は弱い強い子は泣かない」と云ふ様な簡單なものを稱へる。其が濟んで靜かに眼を開かせる。其の瞬間、小供が眼を開いた後の瞬間森として居る時は、格言が大いに有効であつた日である。此んな日に小供を見て居ると、意外に効果が表はれる、けれど

も眼を開いた時騒がしかつた時は少しも効果が無いのである。私は一番上の子供には四五分試みる事がある、米國の日曜學校では此の様な祈禱を稱へて居る。

次に生徒を教育するに注意しなければならん事は、性質である。現今教育界に於ては個性教育と云ふ事が盛に唱へられて居るが、特に宗教の如きは一人々々觀察して其の個性に適する様に授けなければならない。如何に設備が有つても此の點を無視して居れば、其は理想的なものでは無い。充分觀察の出來る様に三十人も居れば二三人の教師で此を教育して各々個性を見て教育して、其が型に入てから後又十人位入學せしめて此を教育すると云ふ風にしなければ、正確なる教育は出來ない。日曜學校も徒らに生徒の多きを誇らず此の様にしたらいゝだらうと思ふ。私が十五年前幼稚園を始めた時、生徒の數が非常に少なかつた。其の時が最も効果があつた様に思ふ。生徒の數が多いのは一般的ではあるが比較的有効では無い様である。凡そ教育、教訓と云ふ様なものは小供の性質を觀察してからの事である。小供を理解してからで無いと、小供に適する教育は出來ない。だから性質と云ふ事は大いに注意しなければならぬ。普通多血質、膽汁質、神系質、粘液質の四種に分けて居るが、之を懸賞問題を出した時の實例を以て説明して見やう。四人の態度は各々異て居る。今懸賞問題を出す事を知らしたとすれば、

多血質。甘いぞ、僕が一等賞取るんだ愉快々々、賞品は何か知らん、飛行機だつたらいゝがさうすると……。と自分で賞品取る事に定めて居る、其して色々の事を想像して喜んで居る、此は活快な樂天的な性質であつて感じが早いかはりに又忘れ事るが早い、小供的とでも云ふ事が出來やう。

膽汁質。剛毅な性質であつて感じはそれ程早くないが忘れるのが遲い。思立た事は何處までも行つてやると云ふ性質で君今度の懸賞問題の答を出すか。出すとも、六ケ敷かつたらどうする。六ケ敷かつてもやるさ、賞品取れなかつたらどうする、取るさ、と答ふる性質の者であつて、何處かに大きい強い所が有る、中々人の言ふ事を聞かな

い、育て難い子供であるが、又育て甲斐の有る者である。云はゞ男性的性質である。

神系質。感じが早くて忘れる事が遅い。懸賞問題を出すと先生が云はれた時、誰さんの顔を見て先生は笑はれた。屹度誰さんの知つて私の知らない問題を出されるんだ……と云ふ様に自分一人で定めて自分で心配して蒔き込んでゐる。此は前の膽汁質に比べて女性的であつて進めばヒステリーとなり恐怖病となるのである。

粘液質。君出すか、何を、懸賞問題を君知らんのか先日先生が言はれたゞらう。聞いた様だ出してもいゝ出さぬでもいゝ……。と云ふ風に感が遅く忘が早い何事にも氣の進まぬ。無欲な遲鈍で、人の事か自分の事か分からない様に何事にも刺戟されない性質で、まあ老人的とでも云ふ事が出來やう。

此等の事を能く知り分け得なければ到底完全な教育は出來ない。如何に知識と技術とが有つても個性に適せしむる事が出來ない。前にも云つた如く教育は此等を知り得てから後の事である。

又「可愛いくば五つ教へて三つ褒め二つ叱りてよき人にせよ」と云ふ事が有るが、多くの家庭では「五つ叱り三つ叱り二つ叱つて居る」と云ふ風である。此では教育も出來ない、此等は叱るのでは無く怒るのである、叱ると怒るとは大いに其の趣を異にしてをる。怒る時は怒る人が主で怒られる人は受身で犠牲にならなければならぬ。叱るのは子供を育て様と思ふて叱るのであり、此の時はら叱れる者が主である。叱るのは一の教育法であるけれども怒るのは全く教育を離れて居る。前の歌の様に叱るのは十分の二位でよい。教へるのを五にしなければならぬ。時には小供がよく忘れるからと云つて叱つたり怒つたりする人が有るが、此は少し無理である。小供は早く覺ゑるものでは無い。「小供は忘れる者なり」と云ふ格言を作つて、自ら制し自分の教へ様が惡るかつたから印象が無かつたんだらうと思つて、根氣強く教へなければならぬ。小供は忘れるものであるなら、教へざるに等しでは無いかと云ふに、さうでも無い。「印象の深いものは其影を殘す」のである、だから一つ印象が出來ると其の印象を育てあげる様に

しなければならぬ。故に教育は永遠の事業である。殊に宗教の如き高遠のものは、急いで目の前に其の効果を見樣とするのは甚だ大なる間違である。世人動もすれば「日曜學校が出來てから一年になるが、少しも効果が無い。宗教心も起らない樣であると云つて日曜學校の價値を疑ふ人が有る。又此れに雷同して攻擊さへする者も有るが、あれは大なる間違である。一年二年で其んなに効果が現はれるものでは無い。一二年で外面から見て著しく變化が有る樣になつたなら、其こそ反て中毒して居るのかも知れない。清新な空氣と水は何時とは無しに私達の身を强健にする。効果が表面に現はれなくともいゝから、强い動かぬ潜勢力を作らなければならん。私は小さな時、何の意義無しに唯父の稱名を聞いて居た。唯其だけの幽かな思想が、今地藏樣を安置して幾百の小供に毎朝禮拜させると云ふ樣に、明かに具體的に表はれて居るでせう。表面に見へなくとも、或る力を具へて置けば、何事かに當る時に現はれるのである。早く花を咲く樣にとすると、反つて其の物を萎縮させてしまう。

次にホッキシー博士著「幼稚園の保育細目」の附錄として出て居る日曜學校教授細目を參考の爲めに申しあげやう。

○六歳より十歳に至る間の兒童に對する年中行事

第一　家族關係

〔甲〕兩親に對する關係――(兒童の目上に對する尊敬心を敎ふ)

　從順　報恩　役の立つ事　勤勉及び信用するに足る事等を敎ふるお伽噺及講話

〔乙〕兄弟姉妹及び遊び友達に對する關係――(同等の人々に對する尊敬心を敎ふ)

　寛大なる事　利己心なき事　正義　兄弟姉妹の愛等を表示するお伽噺及講話

〔丙〕召使及び從僕に對する關係――忠實に仕ふる者を當然尊敬すべき事を敎ふるお伽噺及び講話並びに兒童側の自重心を敎ふるお伽噺及び講話

〔丁〕愛育動物及び我々の役に立つ動物に對する關係――(兒童の目の下のものに對し尊敬の念を敎ふる事)

動物に對する適當なる注意及び其取扱方についての講話

第二　外界に對する關係

〔甲〕社　會――（毎年執行せらるゝ祭禮を採る）

（一）感謝日（米國にては通常十一月最後の木曜日を此の日と定め神に感謝す）

感謝の意を表す手段としての慈善の義なる事についての話

（二）クリスマス

總ての人に對する愛、好意、寛大なる事、利己心なき事、幷に親切心を示す

お伽噺及び講話

（三）豪傑の誕生日――（兒童の目上のものに對する尊敬の念を敎ふ）

理想的性格或は理想的勇氣　勇敢　正義　信用するに足る事　謙遜　尊敬幷に忍耐を表はすお伽噺及び講話　諸神　英雄　巨人　騎士等のお伽噺

（四）復活會

變形と新生涯の講話

（五）飾り日（米國南北戰爭に於ける戰死者の靈を祭る日にして五月三十日その墓を飾る）

（愛國心　職分に熱誠なる事　世道の爲に個人を犧牲に供する事　一致團結の力等を表すお伽噺及び講話）

〔乙〕實　業――商買及び職業

商工に從事して我々の役をなす人々の講話―大工　石工　左官　裁縫師　紡績工　機織業者　靴工　鍛冶　麵麭屋　農夫及び其他の總ての我等の安寧に貢獻する人々　並びに勞働に對する尊敬の念及び理想的勞働者に對する尊敬を敎ふる講話

〔丙〕自　然――（兒童の目上に對する尊敬心を敎ふ）

四　季

年の冬の季節に於ける自然の兒童の變化についての講話　幷に純粹　成長　力

勇氣　生々したる事業を例示するお伽噺　（以上）

此の細目が理想のものであるか否かは別問題として、幾分なりとも御參考となれば頂上である。

お伽噺の構成だと云へば少し仰山になるが、小供に話す物語に就て御話しやう。

一體小供に話す物語は大別して、傳說、神話、寓話、事實譚、自然に關する物語、歷史的物語等に分ける事が出來るが此を總轄して童話と云ふのである、歷史的物語は餘り込み入りたる物を避けて簡單なものを撰ばなければならん。自然に關する話と同じく小供には一寸分かり難いので面白がらない寓話も極注意して話さなければ小供には分かり難いから餘り歡迎されない。一口噺や落語のおとしの樣なもので說明を加へては面白くなくなる。

神話は分かり易く小供に喜ばれる。一體神話は人間の智識が未だ幼稚な時代に出來たもので、丁度小供と同じ智識で出來たもので小供に適して居る、小供に此んな野蠻時代の話をするは不可ん等、評論する者も有るが、小供は此で充分智慧も開發し喜びもするのである。小供に喜ばれると云ふ事が話の大切な事である。お伽噺の參考書としては小波山人の『世界お伽噺』にしたものは無い。百冊合本になつて居て話の數が百二三十もありませう。大變都合がよい。

西洋のお伽噺と日本のお伽噺との比較。次に西洋のお伽噺と日本のお伽噺を比較して見ると、日本のは佛敎から出來たからでもあらうが、大抵老人が活動して必らず勸善懲惡の意味が有る。唯桃太郎のみ獨り異彩を放つて居る實に大傑作である。此に反して西洋では皆小供が主として活動して居る。其して一帶が極めて樂天的であつて終は必らず愛で結んである。

お伽噺の要素、此の如く同じお伽噺と名づけられるものゝ中、種々の性質が有るが、果たして如何なる條目がお伽噺として必ず含まなければならぬものだらうかと云ふに大略左の樣なものであらう。

一、主人公が活動性を持つて居る。小供は活動的のものであり從て活動的の話を好むものである。桃太郎の鬼退治の如き好適例である。

二、感情を刺戟する事。小供にどんな話をしやうかと問ふと恐い話、悲しい話をしてくれと云ふ。此は感情を刺戟してくれと云ふのであつて、はつと思はせる所。ホロリとさせる事が話の一部になければならぬ。寓話は活動性無く感情も刺戟しない。從て小供に喜ばれないのである。

三、空想的の事柄を含ませる事。冒險談の樣に空想の樣な話が最も好まれるのである。

桃太郎の話に於ては實に遺憾無く此の三條件が含まれて居る、活動性は全體に滿ち勇ましいと云ふ感情を刺戟し、桃から生れて鬼退治等全く空想的の事柄である。私は話の中に私の主義として居る動物愛護と云ふ事を含ませる。例へば桃太郎の旗の上に蜻蛉の標が有つた。見送る小供が『とんぼやとんぼ、しをからとんぼ、むぎわらとんぼ、もちざを持つとも御前はさゝぬ、日向は暑い、こつち來て遊べ日蔭でやすめ』の歌を入れて歌つた等動物を可愛がれと露骨に云はないで其の精神を含ませる。此所を日曜學校だつたら、御佛樣の慈悲か何かフツクリ宗教的精神を含ませると云ふ事が大切である。又話も小供と關係の深い事柄の方が興味を引く、玩物でも海岸の小供が舟を好み都會の小供は電車汽車を好むのである。話す時彼等の經驗を呼び起すと云ふ事が興味を起させるに必要である。

四、變化の有る事。以上の諸條件に次いで變化と云ふ事も甚だ必要である。變化で刺戟しつゝ話を進ませなければならぬ。變化が無いと小供は厭き易い。

五、反覆した所の有る事。此を小供に非常に興味を起さするものである。例へば桃太郎で犬が來たり猿が來たり雉鳩が來たりする樣に同一の事を反覆する所に興味を起す。

單なる反覆で無く變化の中に反覆しなければならん。

六、統一の有る事。以上五つの條件が有れば如何なる小供も大抵喜んで聞くが、今一つ必要なるは統一である。統一が無く、くどくなつたり結論が出て來なんだりすると興味も無くなつてしまう。

以上六つが話を作る主なる標準であつて、なるべく此の標準に合つた話を爲す事が必要である。—(完)—

お伽噺の性質及び話方

巖谷小波

甲、お伽噺の性質

一、お伽噺の起源

元來お伽噺と云ふものは、別に教育者は童話又は兒童文學と云つてゐる。然し私は教育者ではない。文學者であるから其立場から見ると、お伽噺は文學の最も幼稚なものである。單に其相手が幼稚であるのみならず、其内容性質も亦幼稚である所の文學である。元來古代の文學として最もなもの幼稚であるから、卽ち一種のお伽噺に過ぎなかつた。尤も如何なる國にも神話や傳説があるが、私から云ふと此等も皆お伽噺で

ある。私は嘗て日本の古事記などもお伽噺であると云つて國學者から叱られ、又アダム・イブの神話などもお伽噺の中に入れて、牧師から叱られたことがある。此の有樣では釋迦の雪山の苦行や、又帝釋阿修羅の戰なぞをお伽噺として扱つたら、亦諸君から叱られることゝ思ふ。然し私から云ふと是等のものを全てお伽宗の中に入れたいのである。然し、何故昔のものがお伽噺であるかといふに、凡そ子供といふものは原始人と同じ發達の過程にあるものである、が其生活狀態が同じである。如何に進歩した今日の文明人と雖も、生れる時は皆眞裸體で飛び出して泣くより外に云ふことを知らないのである。そしてこれが千古を通じて變らざる眞理である所から見ると、社會が如何に進歩するも常に原始時代の面影は繰り返されるものであるのだから、又文學も古代未開人のもつてゐたのは現代にも繰返さる可き筈で、只時代の發達につれて其取扱方が進歩してゐるのみである。然らば吾人の祖先が何故に斯る文學を有したかと云ふに、人間が肉を持つと共に亦心をも有する以上、肉を喜ばせるものを要すると共に、又心を樂ましめる物を需めるのは勢ひ止むる得ぬ事で、卽ち其所に文學の發生を見るのであります。

今日ならば社會が復雜であるから、種々の事件が多く、加之各自の生活に忙しくて寧日なき有樣である。原始時代に於ては社會も極めて單純で、餘程生活にも餘裕があつた。其爲に彼等の口は只食ふ事と雜談とに使用されて來た。然るに事件が尠なくて日々の會談の材料にはならない。そこで彼等の考察や空想が常に話の種となり、自然や天體に關する空想がやがて話柄になつたのであるが、然し彼等自身は必ずそれを眞實であると思ふてきたに相違ない。何となれば現代でも子供は「お月樣イクツ十三七ツ」と云ひ。月を有情の人と思つてゐる。又有名な一茶の句に「名月をとつてくれろと泣く子かな」と云ふ句もあつて、子供の世界と、原始人の世界とは非常によく似てゐる。學者が自然神話と云ひ、太陽神話と稱して各國に傳へ殘されてゐるものは皆此類である。而してこれが今日の子供のお伽噺に相當するものである。

二、お伽噺の種類

そこでかう云ふ原始的文學が子供に適してゐると云ふことを、今日は一般に認める様になつたが、更に怜悧な考へから其子供の喜ぶ處に教訓的な説明や意味を附けて種々訓誡を與へやうとする、これが童話なるものである。然しそれは文學上からは只お伽噺の一部に過ぎないので、お伽噺なるものゝ大部分は、やはり興味に訴へるものを目的とするものである。換言すればお伽噺は教訓を直接の目的にするものでなく、從つて因果應報や、仁義人道をのみ説くものではない。かゝる所からお伽噺を非難する人があるが、もつと大きな廣い意味に於て立派な教訓になるのである。卽ち一を小乘的とすれば、一は大乘的である。又文章軌範の語を借つて云へば、前者は小心的お伽噺、後者は放膽的お伽噺といふことも出來やう。而してこの放膽的お伽噺の中には斯るものがお伽噺かと諸君が驚かれる様なものをも取り入れることが出來るのであります。

三、お伽噺の變遷

日本のお伽噺の今日までの歴史を考へて見ると、又種々の變化があります。必ずしも教訓的でないもの、滑稽なもの、猥褻聞くに堪ぬものすらあつた。或時代には人を騙しても成功しろと云つて狡猾を奬勵したこともあつた様に思ふ。例へば日本の鰐と兎の話。あの話の原書にあるのは、兎がうまく鰐を騙したのみになつてをる。又兎と龜の話も其通りで、原話は龜の方が狡猾な考へを起して、競爭前に自分等の仲間を澤山つれて來て、決勝點まで一連に路傍の草蔭に忍ばしておき、走らずして勝つたと云ふ筋になつてゐるが、それでは善くないと云ふので今日傳へられてゐるものに改作したのである。過去には斯る如何がはしい教訓もあつた。それが斯る簡單な物語のみならず、隨分長い物語に於ても尠くなかつた。

日本のお伽噺としては先づ誰でも桃太郎、カチカチ山、花咲爺等に指を屈する。古い處では足利時代にあつた鉢かつぎ、文章草紙等で、これらは恐らく今の子供は知る

まいが、文學上から見ると餘程よく出來てをる。然し現今の道德上からは甚如何はしいもので、其儘子供に聞かせると云ふことは危險な話である。彼の名高い竹取物語なども文學的には餘程價値のあるもので、教科書にまで編入されてゐるが、若し之を平易に現代語に譯すると、時に危險な考を挑發こそすれ、一向教訓にならない事になる。

それですら或時代には立派な面白い而も有益なものとして取扱はれてゐたのである。今斯るものが自由に取り扱はれた當時の社會狀態を見ると、或時代にあつた話は皆其時代の社會の風潮によく合つてゐたのである。例へば竹取物語りの著はされた平安朝時代などは、今日よりも、ずつと新しい氣分があつた。男女は同權で所謂新しい女が盛に居つた。紫式部の如きは其代表的人物である。今日からは野合とも云ふ可き事などが、實に好い美しい言葉で語られたり、書かれたり、畏多いが時の帝ですらさかんに戀歌を讀まれたりした。其他今日の社會よりも新しい點が少くなかつた。斯る社會にあつては、今日では如何はしい樣なお伽嘶も決して子供に害にならなかつたのである。

然るに斯る風潮が自ら文弱の氣風を致し、國家が疲弊したから、武士が出でゝ武家政治となり、盛んに儒佛二教によつて武士道を皷吹した。佛教は主として性慾の禁止を說き、儒教は所謂意志教を力說して感情を排し、社會は餘程窮窟になつてきた。

そうなると今迄の放膽なお伽嘶が不都合であるから種々に改作されたり、經典などから適當に飜譯されたりする樣になつた。更に封建時代になると愈勿れ主義の道德が必要になつて來た。足利時代は將軍も餘程藤原時代に似てをり、政治、文學、美術等の點に於ても未だ大分自由な悠長な氣分があつたが、德川時代になつて愈社會が姑息な窮窟なものになつた。彼の東照宮の遺訓の如きは德川家の安泰を計る爲めに足らざるを知つて、分を守れ、上を見るな下見て暮せと云ふことを教へ、外交手段でうまく諸侯を籠絡してをいて盛んに寡慾從順を皷吹した。それと云ふのも皆斯る道德が、封建時代の社會に於ては必要であつたからである。彼の舌切雀は此の時代のお伽嘶の代表

的のものであるが、寡慾主義の色彩が頗る鮮明にでゝゐる。

爺さんは折角大きな葛籠を出されたのに、自分は老人の事だから輕い方で澤山だと云つて遠慮して小さいのを取つたから結構な寶物がどつさりあつた。之に反して婆さんは慾張つて一番大きいのを取つたものだから、酷い目に會つたといふので、前の方では動物愛護の意味もあるが、遠慮深い爺を褒めて、慾の深い婆さんを罰してある。斯して小成に安んじ分を守れと云ふことを子供に敎へ込んだのである。これを聞いた子供は「成程慾張つてはならん、人が大きなものをくれても小さなものを取つてをく方がよい」と思ふ樣になる。封建時代の處世法としては此方が安全であつたに相違あるまい。然し、そんな引込思案は今日以後の活社會にあつては到底益に立ないのであります。

一體明治維新以來階級制度が廢せられて、四民平等と云ふことになつた。今日では權兵衞、太郎作も能があれば大臣にもなれ、華族も馬鹿なら裏長屋で棚賃の仕拂に苦しむと云ふ有樣である。自由に自分の力量を伸ばし、出來る丈遠慮なく進まねばならぬ。實力本位の時代に在つては、舌切雀の話をして、大きなものより小さなものを取れと勸める要はない。それよりも獨立勇邁なる進取の氣象を壯んに養成するのが肝要である。

又封建風制の殺伐な時代には、お伽噺も殺伐なものが迎へられた。其代表的なものはカチ／＼山である。この噺には頗る危險な思想が含まれてゐた。成程勸善懲惡を敎へてはゐるが、其勸善懲惡たるや今日の文明思想から考へると甚だよくない性質のものである。

まづ最初に爺さんが、山で狸を生捕つて來て、晩には狸汁にして食はうと云ふ。

これが一體宜敷ない、狸が大入道に化けるなぞと云ふのは未開時代の迷信で、今では却つて動物學者から益獸とさへ云はれてゐる。それを生捕つて汁にして食ふてしまふなどゝは、第一爺さんが心得違である。そこで又この狸を爺さんの留守の間、婆さん

が預つて居たが、留守仕事に麥を搗いてゐる。梁に吊りさげられて居た狸が、その麥を代りに搗いてあげるから暫く繩を解いてくれと云つて、うまく誑して卸してもらつて矢庭に婆さんを殺してしまひ、その婆さんで汁を作つて自分が婆さんに化けて居たこれはなるほど狸が惡いが、また一方から考へると折角爺さんから預つた狸を、勝手に兎してやるばかりか、其兎してやつたのが麥を代りに搗いて貰はうと云ふ、骨惜みから來たものだとすると甚だ横着千萬な話で、此奴も心得違ひな婆さんと云ふ可しである。

又殘忍な點から云ふと、婆さんを殺した上でそれを汁にすると云ふ。想像してさへ眉の寄る殘忍極まる話である。

一體日本のお伽噺には、科學的思想に乏しい爲めに不條理な事が多いゝ。今の話でもそんな殘酷な仕事は狸には全く出來ない筈である。兎にしてもそうで、人間の爲めに仇討をする程强い動物ではなく。然るに茲へ兎がでゝきて狸に對する制裁をする。

まづ最初に山へ連れ出して、脊中に大火傷をさせるのだが其の時のかち〳〵と云ふのが又今日の時勢にあはない。火は「まつち」を摺つて起すもの、燧石などは今の子供は知らないから、かち〳〵で火が出ると云つたつてわかるものではありません。

更に殘酷な廉を數へると、其大火傷の上へ、唐辛味噌をなすりつける。最後に川へ連れ出してとう〳〵土左衞門にして仕舞ふ。嘶の興味から云ふと、或は斯ふなければならぬかも知れないが、考へて見ると立派な嬲り殺しだ。隨分殘酷な仕方ではありませんか。

かう云ふ風に考へて來ると、成程婆さんを喰つた惡狸が、兎によつて亡ぼされると云ふのは、立派な懲惡には相違ないが、かうした殘酷な出來事の多い話は、逆磔や炮烙の行はれた封建時代なら知らぬ事、今日動物愛護會などが少年社會にも組織されてゐる時代には大した効果の無い計りか、事によると害にもなり兼ねない不都合なお伽嘶と云つてよいのであります。

四、理想的お伽噺

總て昔あつた話の中には、其時代には善かつただらうが、現代には適せないものが多いゝ。古來の有名なお伽噺でも、細かく解剖すると種々の危險な思想を含んで居る。卽ち時代に伴つた話は其時を過ぎては適合しないと云ふことになる。然しながら、幸にも茲に日本で古くから傳へられて最も名高い、而も今日に於ても理想的なお伽噺がある。桃太郎の噺が卽ちそれである。尤もこの噺も地方によつて多少變つてをる。

上流から流して來たのは桃ではなくて二つの箱で、その一つを拾つて歸つたら中から桃が出たと云ふのもあり。桃太郎の生れる段も、桃の中から飛び出すのではなくて、まづ二人が桃を食べたら急に若夫婦の昔に還り、間もなく男の子を生んだと云ふのもある。更に甚しきに至つては、桃太郎と猿蟹合戰とを混じて、桃太郎の代りに桃が島仇討と云ふ噺で通つてをる地方もあるが、今は兎も角東京を標準として專ら行はれて居る形を採る事にする。

一體お伽噺は、菓子の中へ藥を含めて子供に與へる樣なものである。子供が藥を嫌ふ樣に表へ教訓を出した話は好まないから、噺の中へ教訓を含めてをいて子供がよろこんで食べて居る間に、其教訓が滲み込む樣にしたものである。それで小心的童話を治療劑とすれば放膽的お伽噺は滋養劑で、前者は一定の患部に施すものであり、後者は全體の健康を增進するものである。病氣を持つて居るものに藥を與へるのは無論必要であるが、それより健康の人間を一層强壯にするのが更に社會の利益である。然るに日本のお伽噺の多くはカウシテハナラヌ、アヽシテハイケナイと云ふ小乘的消極的の教訓、教訓と云ふよりは教誡と云ふ方で、教訓卽ちカウセヨ、アヽセヨと人を導く積極的大乘的の話が少ない。噺の終りには必ずそれだからカウシテハイケナイと云ふ風の誡が附いて居る。然るに獨り桃太郎のみは選を異にして最も放膽的大乘的であるのは、大いに人意を强くするものである。試みにそれを解剖して見やう。

まづ噺の初まりは日本のお伽噺通有の爺さん婆さんで起してある。然し爺さんは山

へ柴刈に、婆さんは川へ洗濯にと云ふのが、やゝ注目す可き點である。元來日本と云ふ國は兎角隱居好きの國で、昔はもう四十になると初老と云つて老人染みてしまひ、五十頃には家督を子に讓つて隱居に引下がるのが多かつた。尤もこの爺さん婆さんは家督を讓らうにも子供がない。隱居しやうにも財産が無いので、仕方がないから働らいたのかも知れないが、兎も角年は取つて居ても少しも骨を惜まないで、毎日盛に稼いで居た。其稼も草鞋を作るとか苧を績むとか、老人相應の仕事もあらうに、柴刈だの洗濯だのと、比較的力の要る仕事を少しも厭はずやつてゐた所にその活力の程も偲ばれて先づ以て頼もしい。

そこで、この爺さん婆さんが斯くの如くよく働いて居ると、或日のこと、川上から大きな桃が流れて來たので婆さんはそれを拾つて歸つた。この桃が只の桃でなくて大きかつたと云ふ所が又面白い。何處から流れて來たか、誰のものかわからない桃だ。殊に非常に大きいときて居るから、大抵の者なら事によると化物が入つてをるかも知れないと躊躇するのが當然である。然るにこの婆さんは驚きもしないで、無造作に拾ひ上げた所は年にも似氣ない元氣者で大に進取的で頼もしい。殊にかうして拾つた桃を家へ持つて歸つてから、夫の爺さんの歸來を待つて仲よく二人で一緒に食べやうと思ふなどは、亦夫婦の情愛の程が偲ばれる。

偖て家へ持つて歸つてから、爺さんの歸るのを持つてその桃を割つてみた。中から可愛い男兒が飛び出した。食はうと思つた桃の中から、人間の子供が出たのだから大抵の者なら膽を潰して腰を拔かすか逃げ出すかする、所が二人は却つてそれを喜んで丁度子供の無い所だから、と其儘養子にして育てる事にした。此所も甚だ無造作で可い。

そこで桃太郎は、この二人の家に育てられる事になつたが、段々大きくなるにつれて逞ましい若者になつた。すると或日のこと、突然鬼が島征伐を思ひ立つて鬼退治に出かけるのである。この鬼が島征伐がまた甚だ突然で、別に今までに鬼が島から何等

の侵害を受けて居ないのに、只此方から征伐しやうと云ふのだ。これも君子の目から見たら無名の師とも云ふべきで甚だ面白くない事だらう。而し我桃太郎はそんな事には頓着なく、只鬼が島の鬼を退治して寶物を取つて來やうと云ふには何等の理由、目的もないのが又無造作の喜ぶべき所だ。又儒教の教へる所によれば、父母在ませば遠く遊ばずで、かうして年寄つた兩親のあるのに、その膝下を我から離れて、所もあらふに鬼が島などと云ふ恐ろしい所へ出かけると云ふのだから、こんな不孝な話はないそれを桃大郎は平氣で思ひ立つて、平氣で暇を求めると親達も平氣なもので、直ぐそれを許して居る。折角これまで育てた子供をそんな遠い恐しい所へ何うして放してやられやうとは普通一般の人情だ。さうでなくとも一人子であれば放しかねて洋行したいの出京したいのと云つても留めたがるのが親の情だ。所が、この爺さん婆さんは已に初めよりも年を取つて居るが、決してそんな因循なことは云はない。却つて桃太郎の意を壯として快よくそれを許した上に、尙自分達が手を下して辨當まで拵へて與へた。

偖て桃太郎は、爺さん婆さんの拵らへてくれた黍團子に、日本一と云ふ銘を打つたそれが又面白い。元より大切な親達の心を籠めて拵へて呉れたものだ。桃太郎にとつてこれ以上の尊い物はない。これへ日本一と銘打つのは何の不思議もない話だが、然し何の猶豫もなく直にかう云ふ銘を打つた所に、無邪氣な眞率な桃太郎の性格が發露して居る。

類は友を呼ぶ。かくて無遠慮な桃太郎は、この黍團子をもつて出かけると、やがて又同じ樣な無遠慮な奴が現はれた。それは犬、猿、雉である。三匹共初對面の桃太郎に「一つ下さい、お供しませう」と云つて直ぐと食物を請求する。畜生の淺ましさと云へば云ふものゝ。頗る無遠慮な奴等である。桃太郎も其無遠慮に所望した無邪氣な眞情を愛でゝ大切な團子を惜し氣もなく、そして三匹平等に頒ち與へた。この桃太郎の雅量と公平とは彼をして益偉大ならしむる所以である。

桃太郎はこの三者を部下として愈鬼が島に押し渡り、鬼共とはげしく戰つた揚句、鬼の大將を降服させて、島中の寶物を取あげ、之を持つて芽出度く凱旋した。これがこの噺の結末である。凱旋してからの事は殆んど何とも說いてない。その寶物で家が樂になつたから、爺さん婆さんに樂隱居をさせたの、或はこの寶物を殿樣へ献上したのと云ふ樣なことは一切噺にないのである、卽ち寶物は取ばなしで噺はしまつて居る。それが又この噺の大に尊ぶべき點で、他の舌切雀や花咲爺の樣に「それだからそんな事をしてはならん」とか「かう云ふ風にするものですよ」とか教訓がましい事は何も云つてない。これを聞いた子供は「あゝ面白かつた」「實に愉快だつた」とか云ふ桃太郎を讃美した辭だけでしまひになる、實に放膽的である。

或人は桃太郎の話を神代から在つたと云ひ、或は支那から傳つたとも云ひ、又或人は元佛敎から出て來たものだと云つて居る。余は矢張り原は印度にあつたもので、それが日本へ來て全く日本化したのだと思ふ。それは兎も角も吾等の祖が斯る立派な噺によつて其國民性を養成せられて來たと云ふことは、我國人の大いに誇とす可き所である。

元來、日本の國民性は進取的のものであつた。それが封建制度で壓へつけられて、本來の其活力を束縛せられ甚だしく退嬰的な人間になつて居たのがこゝ五十年前までの有樣であつた。然し明治になつて其束縛から全く解放せられた。そして僅々五十年內外に一躍して一等國の班に列し、世界に其比を見ない長大足の發達をした。これは本來の國民性が、進取的發展のものでなければ如何に解放さるゝとも到底出來ない事である。尙今後益この眞の國民性を遺憾なく發揮した活力ある日本を造らねばならんがそれには先づ第一子供の敎育が必要である。敎育と云つても、今後の敎育は昔流の姑息な勿れ主義では可かん。例へば正直と云つても單に約束を違へぬとか、金を使ひ込まぬとか云ふ、彼の花咲爺や舌切雀の爺さん流の消極的な正直では駄目である。

宜しくこの桃太郎の噺の如き大なる意味の正直、積極的な敎育を施す可きである。

余は桃太郎の噺を通じて始めて眞の日本の國民性の如何なるものであるかを知ることが出來ると思ふ。

五、日曜學校に於けるお伽噺

偖て諸君が日曜學校で御取扱になるのは重に教訓的の噺であると思ふ、が如何なる噺にもせよ諸君は噺の材料をお取りになるに、都合のよい位置に居られる。何となれば文學上世界の寶庫とも稱すべき印度と、佛教家諸君は深い關係を持つてをられるからである。大體東西文學の根源地は印度である。卽ち印度文學が歷山大王東征の土產の一つとなつて西洋の地に傳へられたのが、今日の西洋文學の根源をなし、東に於てはそれが玄奘三藏によつて支那に傳へられ、支那から日本に傳つて日本の噺となつたのである。日本へ來たものは時代によつて種々に取扱はれ、或は放膽的のものとなり、或は小心的のものとなつたので、善くなるのも惡くなるのも皆取扱ふものゝ責任である。だからそこが又諸君の大に技倆を發揮するに都合の好い點である。今日の社會の大勢を洞察して、昔の噺を只原文に捕はれて居ては融通が利かなくなつて、うまく現代に適用する事が出來ない。

一體書くと話すとは其効力が差つて居る。前者は間接的で遠方から間接射擊をする樣なものであるが、後者は直接的で直に人間の急所を衝くものである。だから話す方が書く方よりも遙に効果がある。余は書く時には文學的にしてをるが、話す時には可成教訓になる樣にしてをる。例へばあの私の話した「褒美人形」は約束を守れ弱きものを助けよ、と云ふ所に重きををいたのである。そしてあの噺の原作はアラビヤンナイトにあるものであるが、余は其原書の其極一部分を取つて適宜に之を料理し改作して話したから、原書の通り話すよりも餘程子供にはよく解る筈であると思ふ。故に諸君は遠慮なく材料を改作料理して話されてもよろしいのである。

乙、お伽噺の取扱方

お伽噺とは如何なるものかと云ふに就ては上來其大略を述べ終つたから、今度は進

んでお伽噺の取扱方乃至話方について少々お話致します。

所謂お伽噺と云ふものは藥乃至は滋養分を含ませた菓子の樣なもので、子供の嗜好を利用して子供に教訓を施す方便に用ひらるゝものであるとすれば、其れが子供等に如何にすればよく受け入れられるかを考へなければならん。それは丁度子供のお菓子が甘くて柔いことを必要とする樣に、お伽噺も面白くて平易でなければならぬ。菓子は只口に與へるだけであるが、お伽噺には目に訴へるものと耳に訴へるものとの二種ある。卽ち目に與へる方は諸種の子供の雜誌本、寫眞、お伽繪ばなし、お伽芝居などで耳に與へる方は云ふまでもなくお噺である。

一、書　き　方

今順序として目に訴へる方からお話しするが、これは今日の場合、お伽芝居やお伽活動などを云ふ必要がないから書物のみに就いて述べませう。

偖て昔のお伽噺の書物を今日のものに比較すると實に六ヶ敷い言語が用ひてある。然し當時に於てはそれが又平易であつたのであらう。今日は餘程平易になつて居るが二十餘年前には口語體計りを用ひると異端者と云はれた程であつた。今日でも之に類した事が尠くないけれども、子供にわかり易くする爲には口語體の極く簡單な言語を用ひ。更に出來る丈け平易な文字、平易な假名遣ひをしてやらねばならぬ。一體に吾々はローマ字論者であるが、一切ローマ字を用ひたいのである。然し時代は未だそこまで進んでゐないから、今俄かにこの論は容れられそうにもないが將來ローマ字を國字として使用する時代が必ず來ると云ふことは今から斷言しておいて差支ない。

在來の假名遣では「ゐ」と發音して「へ」と書き「わ」と發音しながら「は」と書く、今日まだこれが通用してゐるから、小學校の國定教科書にも斯る假名遣を用ひて居る。それが爲めに費す子供の精力や苦心は大したもので、かゝる無意味な假名遣に苦しめられる子供こそ實に可哀さうである。

昔はへをへと讀みはをはと發音したものである。其證據には今日神官の祝詞には、へ

ゐはわなどの發音を正確に區別して居る。今日では全く發音上其區別がなくなつて居るにも係らず、古文を讀む便宜の爲めに、古文其儘の假名遣をしてゐるのである。然し、古文を讀むに便利であると云ふ理由の下に、小學校位の子供に今日も斯る假名遣を敎へると云ふことは、散髪洋服の時代になつて尙天保錢を用ひるより以上の矛盾である。だから子供に讀ませるものには、子供の發音に從つて解り易い假名を用ひなければならぬ。余は將來必ずさうなるものと思つて單行本には余の獨特の假名を使つてゐる。

要するにわかり易く書くと云ふ條件の下に、可成讀める樣に文章も複雜を避けて簡單、曖昧を避けて直裁であることが必要である。何となれば子供は總て直裁情徑行で言語も常に斷定的の然り否で事を辨じて行く。決して成人の如き曖昧な言語を使はないからである。故に漢字を用ひるにしても漢字には同じ意味で種々の字があるが、其中最も解り易い字を用ひなければならぬ。尤も時にはさう計りも行かない場合がある。余が嘗つて或子供に其理解力を試驗した時に、流石と云ふ語が其子供に解らなかつた成程子供の世界には流石と云ふ言葉はない。所が流石と云ふ二字に大切な意味があつて、これを除くと折角の文章の妙味が臺なしになると云ふことがある。斯んな場合には子供には解らなくつても其儘使用して差支へない。それは丁度吾々が外國語を讀む時に、其中に解らない字が少々あるも前後の意味から想像して讀んで行く樣に、子供も想像推察して讀むからである。こんな事は極めて違例で、可成子供のもつて居る言語を用ひねばならぬ。殊に子供のもつてをる言語に成人の言葉よりも適當なものが澤山あるにも係らず、成人の言葉を用ひるなどは最も惡いことである。

一體、日本語程六ヶ敷い言葉はない。例へば日本では人を指す代名詞が殆んど二十以上もある。おまへ、わたし、君、僕、貴君、拙者、吾輩、貴殿、小生、其方……一寸一息には擧げられないが、又夫れに相應して動詞の變化も非常に煩らはしい。之に反して西洋では自分の事なら、天子も乞食も I の一語で濟んでしまう。

斯んな風であるから、子供が言語を覺ゆるのに非常に苦しむ。是非國語の整理をしてやらなければならぬと思ふ。

尙今一つ如何に日本語が面倒であるかを實例に就て申しますと、嘗て私が獨逸の東洋語學校で日本語の教授をしてゐた時の事である。つまり辨慶と牛若丸との出合の所で「左手に拂ひ右手に受け」と云ふのを學生が辭書と首引きで下調をやつて來て、日本の武士は戰爭中に商賣をするかと云つて不思議がつてゐる。よく〳〵聞いて見ると「でも左手で支拂つて右手で受取る」と書いてあると云ふ「拂ふ」「受る」と云ふ言語に樣々な意味があるから起つた間違である。尙日本の本字と云ふものは隨分厄介なものである。外國語なら一定の少數の「アルハベット」を記憶すればどんな字も讀めるが本字は幾つをぼへても足りない。一寸使ふ丈でも五千字位はある。假名に片假名、平假名、萬葉假名(變態假名)の別があり。本字に普通使はれるの丈で草書、行書、楷書の別があり。而も其字の讀方に亦音讀と訓讀とを區別しなければならぬ。實に面倒である。子供には可成かゝる面倒を避けて同じ與へるものならば、子供が喜んで受け入れる樣に、柔く平易に書いてやらねばならぬ。近頃では讀物の力だけは餘程子供語が使はれる樣になつたが。吾々の子供時代には隨分六ヶ敷い文章を教へられたもので、生徒もこれにならつて盛んに虛飾的な文字を使つたものである。一寸散歩の記事を作るにしても一瓢はをろか一口の酒も飲んだ事のない子供の癖に、先づ「一瓢を携へて云云」とやらなければ文にならんと思つてゐた。今日でも小學校の儀式やなんかになると、まだ祝辭や答辭に盛んに社衿を着けた樣な虛禮的な文字が流行する。斯くして親や教師が無意識に正直な子供に虛僞を教へるのであるから、これらは餘程注意す可きである。

二、話方

次に耳に訴へる方法とは云ふまでもなくお話の仕方であるが、私はとても特別に話し方を研究したことはないので、何故に如何なる話が子供によくわかり子供が興味を

持つがと云ふことを知る爲であつた。卽ち書く爲めの參考に試みたのである。然るに其中に子供の感興を引くと云ふ事が、讀む時と聽く時と大に趣を異にする事を發見して、今日では全く書く爲めの參考に話すことはしないのである。

そこで先づ最初子供にわかり易くと云ふ事を主眼として、達意的に話を試みた所がこの達意的と云ふことは全然失敗に歸したのである。何故かと云ふに、わからせやうとする爲めに自然話が廻りくどくなる。話が面倒になつて筋が通らなくなつて子供を飽かせて仕舞ふからである。次に興味中心主義をとつた所が、子供に感興を起させやうと思ふには、先づ自分が其話の中へ沒入しなければならぬ。說く者が話の外に立つてゐて、子供丈けを話の中へ引き入れやうとしても駄目である。子供も自分も一つになつて話に沒入して初めて充分に子供の興味を引く事ができるのである、と云ふ事がわかつた。而して之をなすには說くと云ふ方法でなくて描くと云ふ方法、卽ち說明的でなくて、戲曲的でなければならぬ。換言すれば前者の主觀的、散文的の話よりも後者の客觀的、韻文的の話が遙かに感興の程度が高いのである。成程說く方は講義的であるから其意味を通せさせるには都合がよいだらうが、話に變化や活動がないから興味を失ふ。之に反して描く方は對話的で變化や活動を自由に表はせるから、想像の豐かな子供にはまるで事實を見る樣に話が眼前に展開してくるのである。だから子供の噺は描寫的にして自分も其話の中へ這入つてしまうことが肝心である。

それで話をする場合を大體左の三つに區別する事が出來ると思ふ。

一、家庭的――少人數に差し向ひでする場合
一、教場的――或る一定平均の年齡と智識をもつて居る子供にする場合
一、公會的――各種の階級のものが混合してる團體にする場合

更に云ひ換へて見ると、

一、家庭的――幼稚園時代の子供に家で母親などが聞かす場合
一、教場的――學校で級別けの生徒にする場合

一、公會的――種々の會などにする場合

此の三種の話の仕方を見るに、家庭的の場合は散文的、説明的である方がよくて、なまじ描寫的では却つて失敗する。差し向であるから噛んで含める時に話す方が解り易く、子供にも飽きがこないが、之を手眞似、假聲（こわいろ）でやつたら滑稽で聞かれない。これには別に技術も要らない、只解る樣に話せばよいのである。

教場的のものになると、或時は描き、或る時は説くと云ふ風に、兩方を交互に用ひたがよい。それで子供が飽いた時分には試みに質問をして見ると、子供がどれ程の智識をもつてゐるか、話をどの程度まで理解したかと云ふことも知れ、又子供の退屈を防ぐことも出來る。西洋の教科書に採用したお伽噺の教授法などによく斯ることが書いてある。

次に第一の場合でも、第二、第三の場合でも、噺中にある教訓の意味を特に説明する必要があるときに、これを如何にすればよいかと云ふに、よく噺の終りに付いて説明する人があるけれども、これは大に失敗である。是非教訓を云はなければならない場合には、寧ろ其れを最初に云ふがよい。初の間ならば子供の頭も新鮮で元氣があるからよく聞いて呉れる。これは丁度藥を先に飲まして其口なほしに菓子を與へる樣なもので。菓子の後で藥を飲ませやうとしても決して飲むものでない。だから教訓は先に云つて噺は只興味だけにして話すがよい。第三の場合は聽衆が種々混雜して居るのだから、これは全ての者に共通の興味を與へるのは困難である。又質問をして見るわけにも行かない。そこで出來得る丈け戯曲的に話さなければならん。余は斯う考へて描く樣に話をしてやると、話の筋や意味が意外によく子供にわかる。なまじか説明などをすると却つて煩雜になつてわからないと云ふことになる。

然らば如何にしたら描く樣に話が出來るかと云ふに。近來東京などでは小學校の先生達が話方の必要を認めて、盛んに寄席の講談や落語を研究してゐるが、これはさほど有効な努力でない。何となれば講談などは聽衆がお客樣だから自然聽衆に阿諛する。

從つて話す者に品位がなく、話其物も權威を失つてしまつて子供に噺をする時の參考にはならないからである。殊に落語になると其野卑で出て來る人物も裏長屋の龜公の醉ばらひ……と云つた樣な調子である。然らずとも會話體でゆくと自然、科白など使つて野卑になり易いものである。お伽噺にはお伽氣分を持つた人物を出さなければいかん。それを描くには自分が子供になれさへすればよい。子供の氣分になつて話せば、假令技術がまづくとも子供は聞いて呉れるが、成人の氣分で僕は汝等に敎へるのだと云ふ樣な考へを持つて居ては、如何に技術が巧くても駄目である。子供は偉大な直感力を持つて居るから、よく其人を觀て子供氣分の人には一種の親みを以て牽き附けられるものである。だから第一、第二、第三何れの場合でも子供に同情をもつと云ふ事が最も肝要である。

要するに話をする時には、自分が全く其時に同化して所謂話し三昧に入り、虛心平氣で傍若無人にやらねば徹底しない。子供にこの話がわかるかしらんと云ふ樣な懸念があつたり、周圍の者に氣をとられたりしたら、其底は失敗するにきまつて居る。

自分が話に興味をもつてやりさへすれば、子供も自然に其話の中に這入つてくるのだから、先づ以て自分が話中の者になると云ふことが話方の第一番の秘訣である。而してこの子供になつて話をすると云ふことには、不老と云ふ德がある幾つになつても元氣潑溂たる子供に還つて子供と共に興味ある特別の世界に遊ぶのだから誠に結構ではありませんか。

丙、お伽の價値について

本來お伽噺とはドンナものであるか、今日世間には種々の說がある、中には大なる誤解もある。其說の中にお伽噺は子供に嘘を敎へるもので子供を謬らせる、實に有害無益なものであると云ふ說や、又お伽噺は子供を大いに導くものであるから、敎訓の意味を含ませねばならぬと云ふ說がある。一方は排斥、一方は贊成で、前の說は迷

惑千萬、後の說とても最負の引倒しである。先づ前說のお伽嘶は有害なりと云ふ說か辯ら妄をしておかねばならぬが、後說の敎訓本位にも一應辯解して置かう。無論世の中の事は一利一害がある。日本人が常食としてゐる米でも食ひ過ぎると胃腸を害し、滋養ある牛乳でも、時々胃を害する事がある。之を以て直ちに米は有害である、牛乳は有害であると排斥する事は出來ない。お伽嘶に於ても其通り、一つの嘶の爲めに眩惑されて爲に妄想を養ふ事がないとも限らない。曾て私の知つてゐる醫者から、君は子供に毒を盛つてゐる。お伽嘶を聞いた子供が其嘶にカブレテ病氣になり、僕の所に厄介になつた者があるよ、と云はれた事があつた。又先年有樂座でお伽芝居があつた時、熊などが出て來て子供がヒーヒー泣き出した事があつて、斯樣な恐ろしいものを見せてはならぬと小言を云ふ人もあつた。之は一面の害のみを見て他の得の方を斥けたもので、なる程熊などを見て怖がる者も無いではないが、そんな事を云ひ立てると第一に上野の動物園を閉鎖せなければならぬ。いや上野ばかりでない、世界の動物園をも閉鎖してしまはねばならぬ事になる。此は一二の害を認めて、他の多數の益を認めない所から起る說で、元より採るに足らぬ說である。私が或る學校に行つた所、敎育界に於てかねて有名な其學校から、お伽嘶には嘘が多いがそれでよいかと問はれたので私は恐入つた。そこで私は有名な宗敎家から宗敎談を承つたが、其說かれた經の中に嘘はないでせうかとこちらからも反問してやつた、經文の嘘は皆譬喩で、それによつて經の價値が出て來る。其處に深い眞理が現はれて來るのである。故にお經の中の譬喩を咎めないならば、お伽嘶も亦通俗のお經であるから、お伽嘶の嘘は少しも心配はないのである。此校長は學者であつたが、お伽嘶の事に就ては、全く門外漢であつたから、こんな迂遠な事を云つたのだが、要するに緣なき衆生は度し難しで分らぬ者はいくら論じた處で無駄な話である。お伽嘶の如きは嘘から出た眞で、此は尊む可き嘘である。一體嘘には二樣ある、嘘らしき嘘と、眞らしき嘘とである。此眞らしき嘘は人を欺くもので實に善くないが、嘘らしき嘘は嘘も方便で非常に力になるもので

ある。私が先日水道橋で電車を降りると一匹の猿が出て來た。そして私におぢさん何處へ行くと尋ねるから、私は是から明治會館へ行かうと思ふと答へた。すると猿は私も一所に行度いから連れて行つて呉れと云ふ。そこで私はお前は行けないよ、そこは人間でなければ入れないからと云つたら、猿はそれなら何處かへ行つて毛を三本貰つて來やうと云つた。と斯樣な嘘らしき嘘は笑ひになるものであるが、其嘘らしき嘘の中に、眞を含ましたものがお伽嘶である。眞らしき嘘、是は實際私共が行つてゐる。子供には嘘を言つてならぬと言ひ乍ら、實は自分で嘘を言つてゐる。今日は帝劇へ行かうと家内と相談して先づ家内を出して子供には是から醫者へ行つて來るからと言つて、夫婦して芝居見物をやる。客來の時には忙がしい折など三四分でよろしいから一寸御面會が願ひ度ひと申して來る人もあるが、面倒臭ひと云ふので、留守を使ふ。

只今旅行して居ますと云つて斷つてしまふ。之を聞いた子供は、お父さんは家に居ながら旅行だと云つた。はゝ二階に居られる時は旅行なんだな。と斯ふ思つて、次に折角訪ねて來た客が、門口で子供に會つて、お父さんは御家ですか、と尋ねても、お父うさんは旅行だよ。と云つて歸へしてしまふと云ふ事がある。此嘘を言ふのは、私達ばかりではない。天下の政治家でも平氣で言つてゐるのである。そこで何の爲めに斯樣な嘘らしい嘘を教へるかと言ふと、それは相手が子供であるからである。一寸の虫にも五分の魂で子供は頭に鋭敏な機能を有つてゐる。過去には乏しいが大なる未來を有つてゐる子供は、元より經驗からと判斷を下す力がないから、多く刹那的直覺で判斷する。隨つて大人よりは想像力が富んで居る。丁度吾々の祖先が未だ文物の進んでゐない時代は毎日日が出るから入るまで、別にこれだと云ふ用事も無いが、心はおのづと働くから、目前に在る自然物に對して、種々直覺的判斷をしたり、又幼稚な想像をする。どうも不思議だ、俺達が起きると、いつも同じやうに山の上から眞圓い入道が出て來る。又暗くなつて來ると、前より少し小さい奴が出て來て、前と同じやうに入つて行く。前にある奴は何時も同じ大きさであるが、後のは段々痩せて行つて、遂に

は消えてしまふ。消えて無くなつてしまつたかと思ふと、又消えた方から段々元に還つて前の様に圓くなつて來る、一體彼奴は何だらう。思ふに前の奴は男で亭主、後のは其女房だな、二人の仲がよくないから決して並んでは出て來ない。そして女房が段々痩せるのだ。ひどくいぢめられる故であらうか流石に又なつかしいから消えても亦出て來るのだ。と之は南洋神話の一つである。又闇夜天空にキラ〳〵光つてゐる星を見て、昔は頭の上に天がヒツツイてゐたのを、これは窮窟だと云ふので一人の大强力者があつて、天空を上へ差し上げた、其時に出來た指の穴が、今キラ〳〵光つてゐるのだと云つてゐる。實に馬鹿らしい話であるがやはり同じ地方の神話の一である。之は何處にもある話で、日本では日の神として天照皇大神を、月の神として月讀尊を祭つてゐる。しかし之れは他と反對に月が男性の神となつてゐる。さて人智が進んで太陽とはその様なものではない。太陽系の中心をなすもので、地球はそれに屬する遊星であるとか、月は地球の衛星であるとか云ふ事が別つて來た。それはずつと後知識の進んでからの事である。一茶の句に、

明月を取つてくれろと泣く子哉

と云ふのがある。子供の時は月を、のゝ様と云ふ、其のゝさまも子供の目には、つひ手に屆くやうに思ふ。そこでゴム毬や金盥の様に思つて、それを取づて呉れ〳〵と云ふ。而も此子供の要求は決して冗談ではない眞面目なのである。それに此處から月まで距離が何程あつて、とても手が屆かないぞと科學を説明しても解らないから、他の方法によつて説いて聞かせる。これがお伽噺になるのである。

丁度食物で云つて見ると之は滋養だからと云つて、味もないものを食べさす事は出來ぬ。味をつけて與へねばならぬ。又大人が食べるからと云つて固いものや苦いものを、其儘子供に與へたとて、子供はそれを吐き出す計りだ。それにはよく柔かくして甘い味を附けて與へれば、子供は喜んで食べるであらう。話も丁度其の通りで、味を附けねばならぬ。其味を附けると云ふのは、子供の特徴である想像を土臺とした、所

謂嘘から來たものを根柢として、眞の道理を話すと云ふ事である。かうしてそれを能く消化さすやうにしたものが、卽ちお伽噺なのである。故に文學上から申すと、最も古くからあるもので今に形を保存されてゐるのがお伽噺で今尙子供に喜ばれてゐる。此お伽噺が子供に今も喜ばれてゐると云ふは、今尙その子供と云ふものが原始時代の有樣を繰り返してゐる譯である。世の中がもつと開けて行つたら、生れたての子供がシルクハットで夜會に出たり、髭をひねつて政治を論ずるか知れぬが、兎に角今日までは皆如何なる文明國と雖ども、子供はやはり子供で相變らず原始時代を繰り返して居る以上、その原始時代の文學なるお伽噺の生命あることは又必然の事であらう。

文學者の立場から云へば、お伽噺は子供の爲めに出來た文學である。必しも教訓と云ふものを含まずとも唯興味を與へさへすれば宜い。無味乾燥のものでは、文學として價値が無いのである。子供が興味は引かれて來る。それを利用するのは大人の方便で、卽ちお伽噺を教訓の方面に使用する事になつたのである。但し教訓の中にも二通りあると思ふ。普通は勸善懲惡の如く思ふが、決してそれのみではない。何等その樣な教訓を與へずとも、或る高尙な教育が受けられる、文明人の缺く可からざる趣味性が之に依つて養成され又慈善と云ふ事を教へられずとも、動物植物に親しむと云ふ事が、已に餘程よい教訓となるのである。故にお伽噺は空想であるからとて、別に心配する必要はない。或處に不思議な長靴があつて、一度足を延ばすと、三千里を飛んで行くとか、或は龜の甲に乘つて海底深く沈み、龍宮に行つて御馳走になつたとか云ふ話も、元より空想の大なるものであるが、それが實際行はれるものではないと云ふ事だ。子供が筆を取るに及んで　然と解つて來るのである。が之等の話を聞いて空を飛べたらさぞ愉快だらう、又海の深底に入つたら變つた珍らしいものがあるだらう、それを見度いなど云ふ思想が大人になつても殘つてどうして空を飛んで見度い、海の底も調べて見度いとおもう。そこで其方法を考へ出す。然し長靴や龜の甲では、とてもこれは出來ないから他に實行の方法を研究する。それがやがて今日の飛行機となり、又潛航

艇ともなるのである。故に空想は實現の母である。空想を無闇に斥ける事は出來ない。

私共少年時代には狸が大入道になるとか云つて、よく嚇されたもので、それで狐狸の人を騙す事もあり得る事と思つてゐた。私は少年時代は徒ら者で常に狐にやつてしまふぞ、と言はれたものである。或晩亂暴した結果同じ様な小言を聞いて今度こそ睡つてゐる間に狐の處へやつてしまふ、と云はれたので其晩仲々睡られなかつたが、疲れて遂々睡つてしまつた、明くる朝其考へが殘つてゐて、やはり自分の家に居るやうだが、もう化されてゐるのではないか、父や母も事によつたら、尾を有つてゐるかも知れんぞ、學校に行つて先生や生徒が皆狐の化けてゐるのではないかしらん、と考へて半信半疑で居た事もある。又幽靈が出ると嚇かされて、獨りで便所へ行けないから、下女に一所に行つてもらつた事もある。今日では平氣で獨りで行けるやうになつたが。

さて話が脱線してしまつたが、嘘も眞の嘘であれば、決して心配するに及ばない。それが譬喩であると分ればよいので其處に價値が現はれて來るのである。しかし頭から之は嘘だと云つてはいけない、故に或る點までは子供を騙すので、卽ち眞らしく話さねばならぬ、中には嘘であると云ふ事を、自覺して先生それは嘘でしやう、と問ふ子供があるが、あつてもそれに關せず嘘を話してよい。話を聞かなければ何もならぬ、如何なる妙藥でも飲まなければ其効果はないと同樣である。或る幼稚園の先生が、「私がお話しても生徒が面白がつて聞かない、一體どの樣な風に話すればよいか」と問ふから「貴女は何の話をするか」と尋ねた。「あなたの御書きになつたものを話してゐる」「それでは貴女はどの樣に話をするか一つ貴女のお話時間に御聞きしませう」といふ事になつて其先生のお話を聞いて見ると、昔々浦島太郎と云ふ人がありましたさ……、と云ふ調子で話の間にどさどさが入る。之は昔の形にある話である。それで、書いてあるものは仕方がないが、それを話すのは、私は眞實は知りませんが、何々であつたと云ふ事ですと云ふ樣でした、どうも聞手が身に染みない。そこで私は其先生

に「貴女のお話に何んであつたとき。のあのとさが惡い。話は他人のものでも自分で作つた如く、自分で見た如くに話さなければならぬ。自分が浦島太郎が少くとも友達である樣に話しても差支ない。さうすると生徒は引きつけられて、具體的に話を見る事が出來ると」云つたのである。之は話方に就て申上げたのである。

此通り、お伽噺は嘘の衣を着た眞のものであるが、同じ譬喩のものでも或る自然物を應用する場合に、反對矛盾の扱ひ方をすると、相手の子供を誤らす事と思ふ。卽ち或る動物は慓悍である、或る動物は矛盾である、と云ふ動物に種々の性質がある。

それを話の次立の時に應用する場合、彼等の皮相のみ見て眞相を誤まると、他日子供の智育の側に、多少害を與へやせぬかと思ふ。之はかち〳〵山の話に見る事が出來ると思ふ。イソップ物語等の西洋の話には、自然物の應用が決して矛盾した形になつて居らぬやうに思はれる。暴君には獅子を出し、小さかしいものには猿等を出してゐる。處がかちかち山の話には矛盾がある。狸の如きものに恐ろしい慘虐性を帶びさせ、兎の如き啞の樣な弱い者に、智ある强い動作を與へてゐる。之は我國の昔の人が、動植物に就ての研究の足りなかつたものと見る事が出來る。之れは一般東洋人の弊で唯皮相のみを見て、それが優しければ心まで善良な者の如く考へるのは常である。芝居に於ても、惡黨は赤面して鬚を生やしてゐるし、善人は色も白く品がよく出來てゐる。しかし人間の實社會を見ると、赤面の人に善人もあるし、欺僞師に色の白い紳士の如く見ゆる人もある。顏を看板として、其人の心まで分るなら非常に都合がよい、電車に乘つて赤面が居たら、之は危險だと云ふので、直ぐ懷を押へると云ふ事が出來る。處が實社會は前述の如く、顏だけで心を知る事は困難である。又かち〳〵山の話で見ると、第一かち〳〵山と云ふ題が、今日の子供に解釋し兼る事と思ふ。火打石から火が出ると云ふ事は、未開の地へ行かなければ知る事は出來ぬ。それにかち〳〵山と云ふ、之を現代に改めると、燧石の代りにマッチに依て火を付ける事となるから、シュッ〳〵山とでも改めねばなるまい。先づ題からして不都合だが、内容も甚だ不都合で

ある。爺さんが狸を捕へて狸汁を製らへて食はうと、それを婆さんに命じて置いた。處が捕へられた狸はどうしても助からうと考へた。そこで吊されながら婆さんに御手傳ひしようと云ひ込んだ。婆さんは骨を惜んで狸の云ふがまゝに、繩を解いてかゝると、忽ちに狸の爲に殺されてしまつた。狸は狸汁の代りに婆汁を製り、爺さんの歸りを持つて之を食はした。此話で婆さんを殺したと云ふ事は隨分慘酷な話であるが、其上婆さんの汁を爺さんが食べた。と云ふ事に於ては實に言語同斷である。長年連れ添うて銀婚式も終んで居る位の女房の肉と、狸の肉とを食べ分けられなかつたなぞは、實に水臭い事である。又婆さんが殺されたのも自業自得である。自分に責任あるものは、終りまで行り遂げる可きである。それに自分が骨を惜んだ不覺から禍を招いたのも自業自得である。此處に亭主があつて、自分のヅボンに綻びがあつたのを、妻君に縫へと命じて置いたとする。妻君は亭主の命であるから、自分で縫つて置く可きものを、無性をして女中に縫はしておいたっ翌日亭主はそのヅボンを穿いて外出して、電車に乘ると尻の所でチクリ、はてなとヅボンを査べると驚いた。針が一本出て來た。之は其妻君が自分の責任と云ふものを尊重せない所以で、亭主から誰れが縫つたと、御小言を頂戴しても、私がしませんでしたからと云ふ言ひ分は立たぬ。私は狸の爲めに辯護するのではないが、生あるものは死を恐れる。それが捕へられて、然も今にも殺されんとして吊下げられてる者にとつては、生を欲する事は必然である、狸は吊されて頭が下になつてゐるので、智慧を絞るのに都合がよい、身體中のものが皆頭に集つて來たので、其處に名案が湧いて來て、婆さんを詐さうとかゝつたのである。之が巧く當つて、狸としては成功したのであつた、婆汁を食はされた爺さんは、憤怒して前に狸を捕へ得た時より以上の勇氣を以て、狸に向つて行きさうなものだのに、其勇氣が出る所ではない。阿容々々泣いてゐる。其處へ兎が來た。爺さんは無性にも其兎に仇を討つて呉れと賴む。之は作者の誤つてゐる所で、兎はそんなに利巧な動物ではない。龜と競走して負けた兎で、又大黑樣に助けられた卑怯な兎である。又長い耳を

有つて遠くから敵の足音を聞くやうに出來て居り、逃げる爲めに後足が長くなつて、其上に保護色を有する、極く弱い動物なのである。故に西洋の話には、弱い、氣鈍な者に使はれてある。然るに、日本では反對に兎は強い者に使はれてゐるから、子供は兎を強い者だと思ふかも知れない。こんな事なら犬の代りに盜人用心に飼つて置かうとなる。飛んでもない間違ではないか。然も其兎が、非常な慘酷な事を行つてゐる。先づ山で火を狸の脊につけ、次に藥を塗りつけたり、さては狸を土舟に乘せて打ち沈めたと云ふ具合で、仲々面白く出來てゐるが、此話に依て子供が興味を感じたとすれば、子供は眞似する事が上手であるから、直ぐその眞似をして、猫をつかまへて脊にマッチで火を付けたり、或は溝の板を外しておいて、郵便脚夫が其處に落込んだのを見てはやしたりする樣になる。勸善懲惡と云ふものゝ其力はかへつて少く、其副產物の惡戲を敎へる事なきにしもあらずである。と云つて、此話を一概にけなす事は出來ぬ。それの出來た時代を考察せねばならぬ。此かち〳〵山に依て其時代を見ると、惡事をしたものには、非常な極刑が與へられた事を證明してゐる。放火をすれば烙刑なり、又磔刑もあり鋸挽きもあつた。今聞くと想像し難い程慘忍なる處刑があつたので、其時代には此話は今日私共が感ずるやうに感じなかつたであらうが、今日から見ると、可成危險性を帶びてゐる。一體譬喩談で嘘を敎へると云ふ事は何處の國でもあるが、其話を通して其時代の社會を觀察する事を得るのである。明治大正になつて澤山出來てゐる話で其時代を窺ふ事を得。又封建時代に出來たと思ふ話に於て妙に感ずるのがある。武士道と云ふ事は今尙皷吹されてゐるが、何から起つたかといふと藤原氏の文化政治の文弱時代の反動として起つた。武門の武張つた敎育から起つたのであらう。それ以前の平安朝頃の社會は如何、今日から想見すると近世の西洋と異ならなかつた樣である。情本位とも云ふべきで男女の關係が今日の如く喧ましく言はなかつた。

それは男女相方理解があつた樣である。伊勢物語でも讀むと當時の女は仲々偉かつたので、其爲め武門が押へて、男尊女卑としたのかも知れぬ。要するに其時代は、男女

の間が今日の如く窮窟ではなかつた様である。西洋の話に於て見ると、若い男女が或る事件の成功の後、常に結婚して目出度しとなつてゐる。我日本のお伽噺では若い男女は出て來ない、爺と婆とである。之なら何處で話しても問題はない。然るに何ぞ知らんもつと古い室町時代のお伽草紙等によると若い男女が切りに出てゐる。竹取物語では美しい婦人を中心として、それに若い男を配して、種々の手段で其婦人を獲んとした、男女關係が出てゐる。又文正草紙には、或る田舍大盡に一人の娘があつて、之は鹿島明神から授かつた子であるから、村の若者なぞがいろ〳〵騷いでも、それには決して許さなかつた。所が或る時都方から、やんごとなき方が小間物商になつて其村に入り込み、面白可笑しき歌を唄つて、此大盡の邸に近よつた、田舍に珍らしいので、此男は大層もてゝ、暫く此處に逗留する事になつた。其間に段々奥の手を出して、遂に其娘と情を通じて一緒に逃げたと云ふ、之は立派な處女誘拐罪であらう。が此男は後にやんごとなき方である事が分つて、兩親も非常に喜んだ。喜んだばかりでなく、妹も次いで都に召され、兩親も今で云ふ宮中顧問官位の地位に登つて、共に目出度しで終つてゐる。之は非教訓的の樣であるが、その時代には何とも思はれず、お伽噺として喜ばれたのであらう。實に此話の如きは今日から見ると西洋より優れた情話である。又斯樣な話がある。或る所に生れ乍ら鉢をかぶつた女があつた、顔がどうしても分らぬので、片輪と云はれてゐた。それがつらさに親元を離れて、水仕奉仕に出る事になつた。奉公してゐる家に三人の若旦那があつたが、長男も次男も立派な妻を迎へる事になつたが、三男はその鉢かぶりを妻にし度いと云ふが親は承知せぬ。そこで餘り喧ましくなつて來たので、三男はその女と駈け落をしてしまつた。後から追手が行つた處が、鉢かむりは急いで逃げやうとし、遂に躓き倒れると頭にかぶつて居た鉢が破れた。鉢が破れると其中から美事な寶が出て、其上其娘は頗るの美人であつた。此處で其娘に其鉢かむりの事を尋ねると、私は母が觀音樣へ願をかけて出來た身である云々、と言つてゐる間に追手が來て、二人を連れて歸つた。家に歸つていろ〳〵

試して見た所が、歌も美事、琴も上手、何事にも通達してゐるので、兄達は指を咦へて引き下つたと云ふので終つてゐる。此話の中に如何なる教訓が含まれてゐるか、筋から云つたら今日の三面雜報にある話である。此話とよく似たのがグリムのお伽嘶にもある。王様の娘が毬をもつて遊んでゐたら、誤つて池へ落してしまつた。其毬を池の蛙が拾つて、自分の妻になるなら返して上げやうと云ふ。娘は約束してしまつた。そこで恐る〳〵蛙を迎へて見ると、何ぞ計らん或る國の王子であつたのが、魔法の爲めに蛙にされてゐたので、王女の約束を履行した爲め、さすがの魔法も解けて王子は元の身となつて、王女と結婚する事になつたのである。之から偕老同穴と云つたのかも知れぬ。かゝる話は西洋に於ては平氣で用ひられてゐるが、今日の日本ではかゝる話はそのまゝ教訓的に用ふる事は出來ぬ。これ皆時代と風俗との關係である。

さて全般に渉つて、少年少女の氣分を高尚にし、趣味を養成すると云ふ廣い意味のお伽嘶になると我邦には殆ど乏しい。浦島太郎なども優美ではあるが、内容が豐でない。只世界に誇り得べきものは僅かに桃太郎だけであらう。其私としての理由は、最も大きな所に効果を求めた話と云へやう。此話は封建時代のものであるとか、或人は和寇時代の産物であるとか云ふが、是等の説は牽强附會である。又はるかに上古の古事記から出るとも云ふが、之も想像に過ぎぬ。私は殘念ながらむしろ舶來ものであらうと思ふ位だ。或は印度かも知れぬ。それは或一人の者が若干の動物に善根を施した其爲めに彼の事業は援けられて成功したと云ふ事を、印度の話で見た事がある。之等の話が日本に來て日本的の動物が之に代つて製られたのではあるまいか。今の桃太郎よりもつと複雜した事もあつたが、全く日本化してしまつたのかも知れない。兎角此桃太郎の中には勸善懲惡はない。此處を注意せねばならぬと思ふ。勸善懲惡こそなけれ此話を聞いた子供は、初めから積極的に愉快を感ずる。それは話の初めから川へ行くと云ふ話で、婆さんも流れて來た大きな桃を直ぐ手を出して取ると言ふ、元氣ある婆さんである。之を一方から考へて慾があるとし慾を戒めると云ふ事は考へもので、

與へられたものならば、進んで取るも差支なからう。それから後桃から出た子を我子として育て上げたと云ふ事は、非常によいのである。或る時代の者で桃を食べた者は若くなつて子が出來ると云ふ事を語つてゐると云ふ說がある。若くなくては子が出來ぬのは眞理だが、之を子供の時から敎へる必要はない。やはり原案通り、桃の中から飛出す方が可い。次に親は桃太郎の鬼ヶ島征伐を止めず、其事業に應援して吉備團子を製つたりして、助けてやると云ふのは、老人夫婦の元氣のある所を表はしてゐる。又犬等が臭を嗅ぎつけて出てくる。桃太郎は一つ與へる。與へられた犬猿等は報恩的に鬼ヶ島に行つて、非常な戰功を立て寶物を取つて還ると云ふ。此話が關西から九州では鬼ヶ島征伐になつてゐるが、かくの如く自己の仕度いと思ふ事に就て少しも遠慮せず其目的に向つて進んで行き、遂に成功したと云ふ。如何にも愉快な話である。

之は子供の興味を利用した敎訓で又一方敎訓に止まらず、廣い意味での衛生を巧みに說いてある。人を見て法を說けと云ふが、それでなければならぬ。說き方は前にも申上げた樣に興味が根柢でなければ子供が受けぬ。子供が受け入れねば幾ら話したとて藥にはならぬ。達意より感興が第一である。多くの人は之を忘れてゐる。營養分だからとて、肉を其まゝ成熟した者と同樣に、幼稚な子供に與へる事は出來ぬ。それより咀嚼して與へるべしである。話も先づ優しく興味を湧かすやうにする。大人自身の興味では子供には湧かぬ。大人も子供心になつて話さなければならぬ。此話方に就て種々な方法を書いたものがあるが、私は自分が子供になると云ふ事が、大なる秘訣であらうと思ふ。子供に物を與へる時も、先づ自分が子供になつて口を開け、子供が口を開けたら、それへ食物を入れてやり後から能く嚙み〳〵するのだよ、と敎へてやる如くに。又鳩ポッポでも自分がやつて始めて子供に興味が湧くのである。相手が子供である。自分も子供であると云ふ考へで話をすると、子供と共鳴する處があつて生きて來る。又多人數の場合と、少人數の場合と、自ら異なるが、如何なる場合でも、自分が子供心になると云ふ事を忘れてはならぬ。幾ら技巧を勞したとて、それが子供に緣

遠い事柄では何の役にも立たぬのである。今の話は斯様であるから、斯様にせねばならぬと云ふ例があるが、之は多く失敗する。それは一時話が切れると、子供はハッとして思ひつく時なのである。よく注意せねばならぬ。以上は私の經驗から申し上げたのである。

お話の理論及び實際

天野雉彦

私はお話の實際家を以て任じてゐる者ですから、理論を解くには短かい。ついては今日の話も纒つた一つの體系をなしてゐると云うやうなことは思ひも寄りません。

然し乍ら私が至つて短かい經驗を根據とし、なほ先輩諸氏より學び得たるものを補ひ合はせて、私はかく信ず寧ろ私はかく話すと云ふ事を卒直に申し上げて見たいと存じます。それが何等かの御參考になれば望外の幸と存じます。

私の取扱つてゐる話の範圍はかなり廣い、演說もどきの通俗講演から講話、講演、世話に碎けた講談——私の自ら趣味講演と名乘つてゐる處の——それにお伽噺、しかし今日は御注文によつてお伽噺に限ります。尤も何にしても出る處が一つですから、

なにがしか混線する處もあらふかと存じます。私は先づお伽嘶は今日どふ云ふ社會的位置を占めてゐるか、又如何様に考へるが至當であるか、つまり

『お伽嘶の使命』

とでも云つたことを一言陳べさせてもらひたいと思ひます。隨分と人の耳目を聳動した社會的出來事は、鈴辨事件でありませう。此事件がかなり重大な社會的意味をもつと云ふことは、犯罪者山田憲が政府の重用した官吏であることと、而も此事件が國民の生活に直接の關係ある米に關係があると云ふ事などでせう。中にも山田が最高學府の出身である、教育と云ふものには不足のない教育をうけてゐる、その教育ある人が、かくの如く殘忍な、かくの如く蠻的な犯罪を敢てする、教育と云ふものも決してあてにならぬものである、と教育と云ふものに對して一種の不信任を授けましたことです。ある有名な教育家の先生は全く是れは明治教育の破産であると迄申されました。尤も此責任は教育及び教育家のみの負ふべきものではない。腐つた社會の表面に吹き出した一種の腫物のようなものですから、社會全體が其責任を回避する譯には行きません。

昔ある詩文を教うる塾で、塾生が盗をしたことがあります。すると或一人が、

『詩を作るものが盗をするとは情けないことだ』

と嘆きますと「先生は、お前はさう考へるから腹が立つ、盗人でも詩を作ると思つたらどうだ」と云つたと云ふ話があります。それをもじつて某博士は學士が殺人をする世の中だと思はずに、人殺でも大學を卒業することの出來る有難い世の中だと思へばよいではないかと云つたとやら、さう冷やかに白眼し去るのもよいかも知れません。けれども是迄は教育があまりに科學に傾きすぎた。理窟ずめであつた。感情の教錬を怠つた。趣味の涵養を粗末にした。智育に過ぎて情育を等閑にしました。その咎がかゝる結論に達したのだと思はないわけには行きますまい。山田も渡邊も極めて運動好で所謂運動家であつたさうです。身體を鍛錬する運動は誠に結構です。それに傾いて他

の釣合を考へぬと云ふことはあまり結構なことではありません。山田は農大に居た時は豚を殺す名人だつたさうです。隨分豚を撲殺したらしい。鈴辨を殺すのは豚を殺す位に考へたかも知れません。薫染の力がいかに偉大なものであるかはこれでも知れます。今日盛んに起つてゐる勞働紛議にしてからが、勞働者に物質を與へればそれで永久の解決がつくのでせうか。權利の主張ばかり發達して、義務の念の薄らいで行くことが果して結構なことでありませふか。酒と賭博と女とより外に行く道を知らぬ彼等の趣味の向上を計る必要はないでありませふか。所謂文化的教養をする必要は寧ろ物質を與うる以上より多くその根本を解決する道ではありますまいか。私は船乘りの述懷を聞いたことがあります。船に乘ると喧嘩がしたくなるさうです。毎日堅い板の上を堅い靴を穿いて歩いてゐると、神經がいやにたかぶつてどんがつて來る。ついつまらないことでも腹が立つてつい喧嘩がしたくなる。それが土を踏むと人の心が柔かになる。土を踏んでゐる人は仕合せですと。今日工業化して行く日本、日々機關の軋る音に耳を聾して終日汗みづくになつて働いてゐる人のことを考へて見ると、船乘ばかりの問題ではありません。

私は今騒いでゐる當面の大人の上のみを云ふのではありません。此混濁せる空氣、此行きつまつた陰慘な空氣の中に育つて行く、少年少女の行末を考へて見ると、戦慄せずにはゐられません。

都會地、工場地に住つてゐる子供が、徒らに人ずれがして、而も温情を缺いて居ることは注意すべきことではありますまいか。彼等には温情を味ふ餘裕がない。彼等はその嬰兒の時代に、慈母のふところで、ゆるやかな、ねんねこ歌を聞く特權さへうばはれてゐます。何ぞいはんや、親しい燈下や煖かい爐邊でなつかしい父母の口から滋味に富んだお伽噺を聞かして貰ふことが考へられませうか。それは硬いせんべい蒲團の中で彼等が夢にも見能はぬことです。それに比ぶれば農村や漁村の子供は仕合せです。彼等は自然美の中に育つてゐる。一寸考へればいかにも幸福のやうにも考へられ

ますが實はさうではありません。彼等は此好風致を好風致と自然美を自然美とうけとるにはあまりに頭が干からびてゐます。あまりに情が荒んでゐます。あまりに頭が粗硬に出來てゐる。彼等をゆとりのある、うるほひのあるものにしてやらねば、その幸福を幸福と美を美とうけとることは不可能です。豚の前に眞珠が何の感興を引かぬのと同じことです。つまる處情育がかけてゐるのは今の代の都鄙おしなべてのことでせう。家庭からは追はれ、學校からは繼子扱にされてゐるお伽噺、而も彼等の情育の一手段としての尤も重要なるお伽噺、學校の外に立ち或は内にあつて、此社會の缺陷を補ふところの働をもつ尤も有力者である處のお伽噺が、識者によつて多少考へられて來たと云ふことは無意味ではありません。かふ考へて見ますと、お伽噺の使命もかなり重大なものではありませんか。

『話すお伽噺』

お伽噺に二つある。子供の方から申しますと本で讀むのと、直接に聞くのと、話す方から申しますと、筆でかくのと口で話すのと、文字と云ふ記號により目から入れるのと、口から顔から身體全部から六感全部を通じて入れるのと二つあるわけです。話は話ですから舌で言ふのでなくてはならぬ、今日の話もその話し方であるは申す迄もありません、話したことを活字に現はすと全く精采が拔けてしまひます。死んでしまふそこで文章は文章で別にそれを補ふ處の方法があります。話し方の方法などは書物で讀むだ處で何となくかゆい處へ手が屆きません、此話にしても活字にしては何だかつともつまらぬものになります。話は巧妙なら巧妙なほど文字にはあらはしにくい、その意味に於て文章と話とは非常に差のあることを先づ辨へねばなりません。

本で讀んだ時非常に面白く思つたから話にして見ると一向につまらぬものになることが多い。ですからお話は百の理論も、一の實際には如きません。實際をやつておつてあれはかふ、これはかふと話した方が却つて有効なかも知れません、今度はそれが逆になつてをります。

先づお伽噺を聞かせるのは一體どれ位の人數が丁度よいか、やれさへすれば一萬人でも二萬人でもきかすべきかと申しますと、神佛でない限り人間の聲には限があります、其邊から極めてかゝらねばなりません、それが話のやり方に大きに關係をもつからです、今は大會と云つて大人數を誇る傾向があります、たゞワツワツと集つた丈で何が何だかさつぱり分らぬうちに終ることもあるやうです。大きに集つたから大會には違ひないからそれもよいかも知れません、此等の目的に對して集るものが、かくの如くの大數であると云ふ一種の示威運動にはなるかも知れません。しかしお伽噺の時はそう大衆を要しません、寧ろそれを忌みます。お伽噺はもともと家庭で爐をかこんで、あかい燈火の下で、或は寢床の中で母にそひ乳をせられ乍らお爺さんなり、お媼さんなりの口からゆるゆる、しとしと話されたものですから、現今大勢を集めて聞かせるやうになつても、その本來のゆとりのある、のんびりした氣分を忘れてはならないと思ひます、話はあまり多人數では到底情味を湛はすことは出來ません、聽衆の心情の中へ油をとかし込むやうに話者の心情を通はせるには多人數では到底駄目ですせい〳〵五百人位がとまりかと存じます。大人を相手に講壇から大法螺を吹き大法雨を雨降らすような話と、小人數を相手にお座敷でしとしと話す話とは自らその趣を異にするものですから、細かに云へば話術の方式もその點から定めてかゝらねば深切な話は出來ぬ筈です。

そこで日本在來の講談、落語等のことを一寸振りかへつて見たいと思ひます。新らしい話家の先生の中には在來の講談、落語、義太夫等、寄席に出てゐる諸先生を極めて輕蔑して齒しない人が多いやうです。いかにも彼等にも卑めらるべき多くのものを持つてゐるには相違ないが彼等の藝術には尊敬すべき敬重すべき多くのよいものを澤山もつてゐることを忘れてはならないと存じます。自體、日本語を用ゐて、日本人の情緒を動かす話し振は、講談、落語、義太夫位、研究せられたものはありません。殊に講談の如きは是れに似寄りのものさへ世界にない。日本特有の藝術と云ふではありま

せんか。新しうお話を研究する人は是れ程尊い日本の寶のあることを忘れて隣ばかりをさがすのは、長者の家に産れて貧里に迷ふとでも申しませうか。が、然し乍ら此講談にしろ說教にしろ、乃至落語にしてからが總て座談であります。四疊半的である。殊に講釋は釋臺と云ふ机に寄りかゝつて前曲みになつて話をします。ですから舊講談の名人は多く猫を脊負つてゐられます。今日の話は多く立談となりました。場所が洋館でしかも四五百の聽衆が椅子に腰をかけて聞いてゐる。辯士は卓を前において反身になつてやつてゐます。ですから此猫脊式が反身式に變りました。かく猫脊式が反身式に變つた上は表情、態度も自ら大きくなつて、西洋流をとり入れることになりました。そこで話の方式にも新らしいものが生れて來ることになります。在來の座談の缺點をすて、その長所に學び而も新らしい派手な動的な方式をとり入れて茲に渾然融和した處の大正の新話術を創造するわけです。茲にも改造が手を擴げてまつてゐます。

東西文明の融合統一が端を現はしてゐる譯です。

茲に今一言添へておきたいことは、お伽噺も一の藝である、藝であるからには演者が藝を演じてゐるといふ氣分を忘れてはならぬ。少くとも藝術にしなくてはならぬといふ努力が現はれてゐなくてはならないと思ひます。こんなことを云ふと嚴肅な諸先生に叱られませう。お伽噺家は藝人ではない。藝をやつてゐれば藝人に見ちがへられるではないか。我等は特別の選ばれたる人である。苟も藝人輩とすぐ肩肱いからす人がある。藝人が何故惡いでせう。藝がそんなに罪惡でせうか。さうではないでせう。藝が惡いのでも藝人が惡いのでもないのでせう。惡い藝人卑しい藝が惡いのではありますまいか。所詮話をするのは畫家の繪をかくと、樂師の樂を奏すると、彫刻家の彫刻に對するのといさゝかも違ひはない。又あつてはならぬと思ひます。藝術家の作物に達する態度と同じものがなくてはならぬ。藝に對する貴下の眞摯な態度、眞劍な態度があつてこそ貴下の話にも生命が流れませう。甚だ高慢なことを云ひ過ぎて相濟みません。さていよ／＼本題にとりかゝりませう。私は單刀直入、本城を斬つてお話の

秘訣を申しのべます。今流の教へ方は生花にしろ料理にしろ古とちがつて一番先に秘傳を教へます。卷物を與へます。これが歸着點で而もこれが出發點だ。話の骨は一言で盡せると思ひます。曰く同化。

『同　化　論』

話は同化である。話す人が時處位の三に同化する。聞き手に同化し、場所に同化し、場合に同化し、而も話に同化し、話す人が聽衆を忘れ、時を忘れ、處を忘れ、その話してゐると云ふことさへ忘れ、聞き人をして、話の中に景と情とにとけ込んであるがまゝに見るがまゝに、その境に導き、而もその談られたことが印象となつて、深く心の底へ彫りつけられるのが話の秘訣であると思ひます。話の上手下手、妙不妙はその引きつけられた程度の深淺、厚薄の差であります。老子が『帶をして帶を忘るゝか帶の適』と云つたやうに、話者、聽者、話中の消息、三位一體となつて、話中の人物の感情の中に融け合つたやうに話すことを得る人は初めて、僅かに話の堂奥を窺ひ得た人と云ふことが出來ませう。

『如何にして聽衆に同化すべきか』

聽衆に同化するには、『になれ』『を知れ』の二句を吟味參究することである。『になれ』とは聽き手の位置に自分をおくことであります。淀川で鯉を捕る人が、鯉の氣分になつて水中に潜み、鯉になりきつて鯉を捕へる、これが淀の抱鯉と云ふものゝ本に見えてゐたやうです、鯉にならねば鯉はとれませぬ。聽衆の懷に飛び込まねば聽衆はとらへることは出來ませぬ。而しその『鯉になる』には『鯉を知る』ことから初めねばなりません。お伽噺の對象は子供ですから、まづ子供にならなくてはなりません子供になつて子供と遊ぶ氣分になれぬ人はてんでお伽噺は初めぬ方がよいと思ひます大人が子供になると云ふことは子供を大人にすると云ふと同じく六つかしいことに違ひありません。しかし同じ困難でも又樂な處がある筈だ、とにかくどの大人でも子供の大きくなつたものですから、一度通つて來た道を振りかへつてそれを思ひ出せばよ

いではないか。そんな樂なことはないと云ふ人があるならばそれは理窟にはせて實際を知らぬ人と申さねばなりません。何處の姑だつて嫁でなかつた人はありますまい。しかし姑になると嫁の時代の事を忘れてしまつて嫁をいびります。何處の古兵だつて新兵の峠を越さないものはない筈です。さて古兵となつて見ると自分のいぢめられた昔を忘れて、新兵を虐めて見たいものです。大人は赤子の心を失はず、子供になるといふことは餘程の偉人でなくては出來ぬことです。ついてはお伽噺の修業者は話以外に於て己に聖賢と等しかるべき修養を要するわけです。子供になり切ると云ふことは自分の大人であることをともかく一時忘れることでせう。學あるもの學を忘れ、位置あるもの位置を忘れ、鬚を忘れ、白髮を忘れて子供になる。『よくまあゝんなことが、出來たものだ』と人に云はれることを懸念するやうではお伽噺は出來ません。人は何と笑はば笑へ、自分は只此當面の子供が可愛いのだ。此仕事が尊いのだ。この事の爲には身命をも惜まぬぞといふ大自覺大慈悲があるのでないと駄目でせう。久留米の日吉校で『何か御校の特色はありませんか』と尋ねると、別に何もありませんが、只『どうくわくわい、と云ふ會があります』、『ははあ、どんなことをしますか』『教師がその會の定日に集つて、兒童の唱歌をやつたり遊戯をやつたりして極めて無邪氣に遊び暮らす其主旨はともすれば干からび勝の、凝り固りがちの教師が若がへつて爽快な氣分になつて若い柔軟な心になつて半日を過ごすと云ふ事が、どの位兒童教育上有効の結果を得ることであらうかと思ひ付きまして、やつてをるのでございます』『ではどうくわ會とはどうかきます』『さあ道化るから道化でもよい、又兒童に同化するから同化でもよいが、やつぱり子供に化すると云ふので童化會とかいてゐます』私は尊い用意だと尊敬しました。大人はよく子供と角力をとつて遊んでやることがある。大の男が子供にわざに投げられて喜んでゐる。お伽噺はてつきりあの氣持でやることです。鯉になるには鯉を知らねばなりません。子供になるには子供を知らねばなりません。

お伽噺の先生は眞摯なる兒童の研究者でなくてはなりません。

一概に子供と申しましても一般の場合と特殊の場合があります。都會の子か農村の子か、海邊の子か山家の子か、關東の子か關西の子か、良家の子か貧家の子か、而も同じ子であつても時によつて氣分が違ひます。朝と晝と夕と夜中と食前か食後か、授業中か授業後か、而も同じ子でも入れ物によつて心が違ふ。劇場か學校か寺院か家庭か、人の家か自分の家か內か外か森の中か神社の側か、その處によつて一々心理狀態に變化あることをよくよく辨へねばなりません。まづ第一に、

『子供の言葉』

お伽噺の先生は子供語の研究をおろそかにしてはいけません。澤柳博士の小學校から子供語彙が發表せられました。子供の言葉は至つて數が少い。その範圍內で話しませんと子供には理解されません。かりにも專門語や學術語や漢語を用ゐてはなりません。あの田舍の學校の父兄が『校長さんや村長さんは、膝組で話すと話がよくわかるが、どう云ふものかあの演說の壇の上へ上がられると、何を云ふかさつぱりわけが分らなくなる』と云つて笑はせた事があります。子供には『御免なさい』と云ふより『めんちやい』と云つた方が早わかりがして而も親しい感じがします。尤もこれは東京の子に限ります。子供の話は子供の國の言葉を用ゐなくてはなりません。これについて思ひ出すのは、地方へ行つて一二年位の子供にはお話がし難いことが多い。これは彼等が話を聞くになれてゐないばかりからではありません。私の使ふ東京語には親みがないからです。一二年はまだ家庭に近い地方語を多く使ふそこでどうもしつくりと彼等の心を捉へることが出來ません。そんなら子供には片言や方言を用ゐてよいかと云ふと、それはいけません。話をわからすと云ふことにのみ注意して、他の重大のお話の使命を忘れてはなりません。お伽噺は單なるお話の目的の外に國語教授と云ふ重大な使命をもつてをります。それ故どうしてもお話は標準語もしくは標準語に近い言葉で談つてほしい。野卑な言葉や方言は避けなくてはならないと思ひます。話の中へ出て來る田舍者を現はす、田舍言葉ですら一寸その臭さへ生

せばよろしい。必ずしも圓朝が塩原を談るやうに『やんすがんすの二上り調子』を用ふる必要はありません、殊に話中の人物が上方者だから上方言葉でやる。越後人なら越後言葉と話し分けるは藝としては面白いかもしれませんがお伽噺には必要はありません、只軍人を現はすに九州辯、商人の大阪辯位は一寸にほはせると面白いと思ひます。言葉の選擇推敲は尤も苦心の存する點で古い歴史物や、講談の材料を子供に分るやうに談すには、いかに云つたら子供に理解されるかと、古い言葉や固い言葉を言ひくだくのが中々六ケしいことです。それ故一つの話を立派に仕上げる迄一つ話を面白やらねば物にならぬと云ふのはそのことでありませう。たとへば同じ『投げつける』と云ふことを、『ぼつた』がよいか『ぼをりつけた』がよいか、色々推敲の末『ぶつつけた』と云ふので一番すわります。動きませぬ。此動かぬ處を見付けることが大事です。

『子供はどんな話を喜ぶか』

と申しますと子供は、子供が主人公である話を歡迎いたします。子供が一番よく知つてゐるものはやつぱり子供でせう、誰でも自己の生活に尤も近いものを喜ぶ一番理解し易いから、理解しなくては同情も起らない興味も湧かない子供に對して最も共鳴するものは子供です、ですから子供の喧嘩の仲裁に大人が出たらきつとよい結果を見ません、子供の喧嘩は子供にさせるに限ります。元來子供の頭は單純ですから頗る簡單にさばきをつける、それで子供も滿足するなまじつか大人のひねくれた頭で、かふもあらふかあゝもあらふかと取越苦勞してさばくから子供の自然とは極めて遠い裁判をする、日曜學校の世話もなるべく子供にやらせるがよい第一手がはぶけて、却つてよい成績を上げます。

話の主人公が子供であると、すぐその主人公になりきつてしまひます。次にお爺さんお婆さんが子供に近い、日本の話には殊に爺婆の出る話の多いようです、これは家族制度の國風の然らしむる處でせう。隨つてお話の中へ出る動植物も子供の好むものであつてほしい犬猿雉などは、古の日本人の生活に近かつたものと見へます。

子供は不思議を好みます、怪異を好みます、出來ぬことをやつて見たがる恐いもの見たしでこわい話を聞きたがります。これは彼等をたへず成長させようとする生命が内から刺戟するから、はけもせぬ大人の下駄をはいて見たがるように、出來もしない大きいことをやつて見たがるものです、實際子供はナポレオン以上です彼等の前には不能はない、何でも出來るものと思つてゐます。その神秘心力の尊とさが單純さになつて現はれてゐます。

子供は小さい弱い善いものに同情いたします、小さい弱い善いものが、大きい強いものに勝つた時ほど滿足を覺ることはありません。これは彼等自身が小さい弱いものであるからでせう、子供は人情話を喜びませぬ。彼等の心情がそこ迄いつてゐないそれほどの複雜さをもつてゐません、快活な花やかなあかるい話を喜びます、暗いじめじめした陰氣な話を嫌ひます、大人が自分の感じた話を以て子供を感じさせやうと努力して失敗することの多いのは子供の心理を知らぬから起ることです。子供は野蠻人と同じ戰さ話を喜びます。爭鬪を喜びます。人類が今日迄やつて來たことを人間一代の丙にくりかへす。即ち兒童の發達階級の中に丁度野蠻時代に當るからそれを喜ぶのでせう。一つは變動が多いから喜ぶのでせう。子供には子供の用ふる

『語　法』

があります。子供に一番喜ばれるのは擬人法であります。全體子供は不思議な魔術師で、彼の前に横はる凡てのものは石でも豆でも皆活きて話をいたします。お伽噺全體の生命がそれです。子供はものを大袈裟に云ふ傾向があります。即ち自然の誇張法の用ひ人である『かあさん〳〵大變だよ』と息せききつて歸つて云ふ『何だい』『犬がゐたよ』此大山鳴動して鼠一匹式のやり口は子供に歡迎されます。子供は反覆を喜びます。子供はだん〳〵大きくなつたり、だん〳〵小さくなつたりする漸層法をも喜びます。子供は抽象的なことは理解し難い。それ故なにごとも具體的にいたします。子供は遠い處のものも近く話してやる。子供には時の觀念がうすい。今朝も昨日も十

日前も一年前も『きのふ』だ。明日も明年も明後年も『あした』だ。それ故遠い時代の話も現代の話も現代にして話します。その一部分を擧げて全體を表はすと云ふ偶擧法と云ふのも話には忘れてならぬ修辭です。これは話術全體がその精神で行かなければならぬと申してもよろしい。俳句、川柳の見付け處で、ある事件、ある事柄の要點、眞髓をとらへ示して其全體を想像せしめる。

お伽噺を話す人は詩人でなくてはならぬ少くとも詩を理解する人でなくてはならぬ

次に話す人が話に同化すると云ふことが大切なことであります。或る話術の大家が云つたことがあります『自分は書を讀んでも、人の話をきいた時でも涙の出ないやうな話はとつて材料にしない』と云つたことがあります。これは無論大人の話でありますが、子供の場合はなほさら大切であります。人はお伽噺が、どうせ子供だましだなどゝ考へてかゝるから、てんで失敗するのです。對手が頑是ないもの丈に此方に鍛練がいります。自分が全身全力をこめ、全生命をうち込み甲斐のある話を捕へて、一生の修業の中に完全な珠にすると云ふ意氣込でかゝらねばなりません。たゞ一寸人がやつて面白かつたからやつて見ると云ふが如き一寸の出來心でやると云ふ浮薄な考へでは、話に同化など思ひもよりません。そのよい材料を見つけても、それを縱から横から十二分に錬り上げるにはなにがしかの時間を要します。話の大家が百回板にかけた(練習)ものでないと高座(演題)にかけぬと云ふのは、そこの處でせう。もうこれで大丈夫だと云ふ自信をもつて後、壇に立ちますと態度自ら從容として、いかにも泰山ゆるがざるのゆとりが見ます。未だ語らざるに、もう人を引きつける力があります。

これ語らずして已に語つてをるのであります。これを落ち付と云ふ。蓋し自分は確實なる力を握つてゐるぞ、而もその珠たるやもと〳〵珠玉であるものを尙百錬千磨の後にこしらへ上げた。而も此れを以てそれにて屢々戰場に臨み常に凱歌を奏したものだと云ふ自信があると、その不動の心性から一種の光を放射した、未だ語らざるに早く已に聽衆の心を壓するものと見へます。

由來十の話をするには、七の力で話してゐると三の餘裕が出來ます。然るに大抵十の話は十の力で話します。餘裕も何もあつたものではありません。中には十の話を十二の力で話す。車力が坂へ荷車を引き上げるやうに汗水たらしてやつてゐます。外の見る目も氣の毒です。これでは話に引づられてゐるのです。錬磨の結果十の話を七でやる五でやる三でやる。すると殘の三なり五なり七なりが餘裕となつて現はれます。

話を樂にして樂にきける。而しそれ丈でとゞまると唯の話家になつてしまふ。

話が流れてしまふ。生命がぬけてしまひます。理想の話家はその中一箇所自分の力ではどうすることも出來ぬ一點があつて、其所へ來ると全身全力をこめてやります。

聽衆と共に仰ぐ此時話の恐ろしい力が現はれます。聽衆と共に達せんと努力する話も此處迄來ると宗教的になります。

いかなる話でも話の中核を貫いて一個の哲學が流れてゐなくてはなりません。お伽噺だからよいと云ふわけはないお伽噺なら猶更でもそれが子供に分つても分らぬでもよい又分らせやうとことさらに努力する必要はない。只それをもつてゐれば、その何者を通じて、彼等の心へ尊いものを流し込むことが出來る。それは決して露骨であつてはいけません。お伽噺は此救世の大使命を感得したものゝみの舞臺でなくてはなりません。只一時の物數奇や小機用でやるのではいけません。尤もそんなのはすぐ枯れます。自體、根がないのですから。さて同化を消極的に申しますと、

『同化に都合惡しき一切の狀態』

をとり去ると云ふことになります。

話す工夫よりも聞かせる工夫、話の功率を高くするには此處に尤も周密な注意を要します。かう云ふことは何事も科學的に出來上つてゐる。西洋の方が一日の長である日本の在來のやり方は極めて此點に大ざつぱのやうでした。先づ『會場』そのものから考へてかゝらねばなりません。學校にしろ寺にしろ兒童の教養上尤も都合のよい會場を撰ぶことが肝要でせう。次に會場の作り方が大事です。『演壇』は高いがよいか低

いがよいか、これは聽手が座つてゐるか腰かけてゐるかを定めねばなりません。要は最後にゐる兒童に少くとも演者の前半身が見ゐるを以て程度としたい。あまり高いと高い處から話が降つて來るやうで、訓示にはよいがお話の氣分はこはします。『卓』はあるのがよいか、ないがよいかと云ふに、卓はない方がよいと云ふのが新派です。その理由はかふだ。卓があると自然によりかゝりたくなる。姿勢が惡くなる。卓があると腰から下が粗末になる。元來お伽噺は全身を堂々と露出して語るべきものです。

ついては少くも初心の人には此方が修業になると云ふのです。卓がないと大道演說のやうだと云つて嫌ふ人もあります。すると反對論者はお伽噺は元來樹下石上、爐邊でも行き當りばつたりやる性質のものですから一々卓を持つてあるくわけに行かない、やはり卓は用ゐぬがよいと云ふ。然し乍ら今日何處の會場へ行つても卓があります。わざ〳〵除けて貰つてやるのも何だかきざです。常識的に考へて元來あるのが正で、無い場合が奇ですから、あれば殊にとりのける必要はない。卓のある時は卓の横に出てとやはる云ふの折衷說であります。其時はなるべく卓の左へ出たい。此の卓の有無は態度が變つてきます。例令へば話の中に語勢を強める時に卓がないと『ポン』と卓をたゝく處を、右の掌で左の掌を打つ、或は脚で壇を『ポン』とやると云ふやうなことになる。或は身體全體で話すと云ふことからブラ〳〵演壇を歩き廻つたり、無闇に演壇で獨芝居を演ずると云ふことに流れて、お話の品位を毀ける恐れがあります。此點は特に注意すべきことです。卓には必ず机掛を要する。それは十分足がかくれる程度でなくてはならない。出來得べくば大きくし富士山型に裾を引いたのがよい。ちと浪花節式になるが、其浪花節がかうやり出したのも餘程苦心の末になつたものですから。

卓の上には一物もないがよい。『水さし』もないがよい。元來三十分か四十分のお伽噺の間に水を飲まねばやれぬと云ふが如き不鍛錬ではならぬ。水は絶對にのまぬがよい。これは全くなれですぐ實行が出來ます。『水をのむより息をのめ』と云ふのはよい言葉だ。義太夫語でも落語でも必ず熱湯を蓋のある茶碗に入れておく。時あつて飲む

が、あれはのむのではない蒸氣を吸入するのださうです。

卓の上に『生花』はおかぬがよろしい。其爲一部の兒童に顏が見へぬことがある。又生花の脊の高いので、辯士の脊を盜まれることもあり、それなら生花はないがよいかと云ふと、それはあつたがよい聽者によい感じを與へ、なんとなく話そのものゝ情趣をも添へるからあつて差支ない。あるなら必ず別の卓にして而も辯士を消さぬ程度がよい。而し小さい盆栽か草花位を卓上におくのは差支ありません。

『背景』はよほど考へねばなりません、幕にしても壁にしても、あまりけばけばしかつたり、陰氣であつたりしてはいけない。情味を帶びた色彩がよい。お佛壇を脊負つてやる時は、必す扉をとぢることを忘れてはなりませぬ。

演壇の後及左右から出入するような設備は絶對にいかぬ。兒童の注意を亂して同化を妨げること夥しい。風が吹き込んで、演題の紙や幕を動かすのもよくありません。要は演者の立つた演壇の後方左右は尤も神聖にして一塵もあがらず、一毛も動かざる底のものであらねばなりません。

次に尤も重要なるは『聽衆のならべ方』であります。話者と聽衆との位置は、同化に尤も重大な關係をもつてゐます。兒童と演者とは極めて接近したがよろしい。これが他の話とお伽噺との異る點で、爐邊から起つた、樹下から起つた本來の立場から來るのです。お伽噺には何等嚴めしい態度はいらぬ。先生よりももつと親しい、お叔父さんの態度であらねばならぬから一番困るのは學校などで三大節か卒業式かの儀式のあとで、演壇を其まゝにして話させられることです。聽衆と一町も隔つて居ては向海岸の人に話をするやうでどうしてもぴつたり一つになることは出來ない。儀式は又その間の長い程成功する。鳥居から宮殿迄の距離があればあるほど莊嚴を增す理合ですから、お伽は丁度その反對です。兒童は演者を要として、扇形に並べるがよい。一番幼年を一番演者に近けておくがよい。演者に近いものが話にも近い。其方が管理にも樂です。並び方は亂雜なよりは整頓した方がよいのは申す迄もありませんが、あまり四

角四面になり過ぎて窮屈を感じさせぬやう、そこの呼吸が六つかしい。腰掛けるより座らせた方が落付いて聞くようです。これは日本の家庭が座つてゐる關係からでせう要はお伽氣分は官僚式では出てこぬ。何處までも聽衆本位、兒童本位でなくてはならぬ。ついては嚴めしい教師の顏や有志者の顏が兒童の目にちらつくやうな並べ方は氣分を害します。宜敷お伽の時は偉いお方は兒童の後方へ退却してもらはねばなりません。それを敢てするほどの見識がなくてはお伽は開かぬがよい。

今度は演者の『服裝容貌』であります。深刻に云ふと何の話でも容貌風采が大切だ。中にもお伽噺にはどうしてもはまらぬ顏の持主があります。そんな人はその人の天分がお伽にないのだから、宜敷初めから敬意を表してやらぬがよい。髯はない方がよい眉は濃いがよろしい。ある大家の先生が、眉の薄いのを氣にせられ或る廣いげば〳〵しい會場で、眉を引いて出られたのを見て、私は其用意の周到に恐れ入りました。色は黑いよりも白い方がよい。けれどもまさか白粉をぬつて出るわけにも行きますまい。けれども或はこんなことを八釜しく云つて白粉をつける時が將來來ないとも限りません。愛嬌のある顏はよい。子供の好む顏の持主は十倍得です。そんなことはなほすことの出來ない部分ですから深く申しますまい。然し非常に大切なことであることは考へねばならぬ。宜しくお伽噺を初める前に鏡と相談してかゝる必要があります呵々。

次に服裝は輕快に見へたのがよい。其點はどうも洋服がよいようです。處がこれも背景との調和を考へなくてはなりません。お寺やお宮などで洋服をきて出るとどうも場所に調和せぬ。やつぱり和服がよろしいようです。

顏はあかるい顏がよい。それは健康でなくてはいけぬ。腹はすいた時よりも滿腹の時がいけないやうです。腹八分目が一番よい。食後四十分位はたつた後がよい。

睡眠不足は一番いけません。話は氣分一つのものですから、殊にお伽噺は、

『同化に尤もよい機會』

は登壇の瞬間です。噺の成功不成功は實に係つて此最初の五分間にあります。ナポ

レオンは戰爭は最後の五分間と申しましたが、講演は實に最初の五分間でせう。先づ紹介せられて壇に立つ、此紹介が六つかしい非常に巧拙がある。これも一つの技術です。要は短かい言葉で十分演者に箔をつけ噺をして十分期待せしめるやう。其瞬間此先生は面白い先生だと云ふ感じを與へねばなりません。北條早雲は三略を講せしめて『主將の法は英雄の心を攬るに在り』と云ふ處で『止めよ』と云つたと申します。

此いかにして聽衆の心を攬るべきかが苦心の存する處でせう。

先づ演壇へ登つた時はニコ〳〵のニコでよいとある大家が云つた。話者は其場を見るの明がなくてはなりません。奈翁の所謂戰眼の一撃聽衆の樣子を一目でぐつとさとるの洞眼がいります。疲れてゐるか元氣か、これには前の話がうけたか、うけぬか長いか短いかそんなこともよく知つてゐなくてはなりません。拍手の音でも分る。だれてゐるか活氣があるか話がすんで『まあよかつた』と云ふ災難遁れの拍手とほんとうに面白かつたと云ふ拍手とはその音が違ふ。そんな處でもよく悟らねばなりませぬ。

機に應じ變に臨みて、すぐ本題へかゝるか或はまくらを入れる。これは話術の專門語で本題に關係あるか或はない小話を一つ二つする。これは二つの意味で豫備になります。此人は面白い話をするお叔父さんだと兒童をつり込む。或は本話を了解せしめるに都合のよい背景(バック)をつくる事にもなる。このことをある人は釣魚にたとへた。香餌をつけて川に流す。すると魚が(聽衆)これはうまいものだと、バックリとやらかす。すると針へ引つかゝる、ひつかゝつたら、あちらへ引ぱり、こちらへ引つぱりして、とう〳〵魚籠の中へ入れてしまふ。小話はつまりその餌です。しかしその餌も上手にやらないと、こすい魚は餌ばかりとつて、つゝついて針に引つかりません。

小話は本話の爲の手引でありますから、こゝへ力を入れ過ぎて、本話を粗末にするやうなことがあつてはなりません。それでは本末轉倒です。

聽衆の疲れた時倦んだ時、あいた時(騷ぐ時)それに應ずる色々の方法、手品もありますがこれは略します。

さて是から話の秘訣の秘訣、

『表　情　論』

に入ります。同化の極致は話者が、話中の人物、事件をあるがまゝに、さながら其場所に居て其事件の渦中に投じて、主人公と共に等しく泣き等しく笑ふの境に聽者を導く卽ち聽者をして醉はしめることにありますから、其第一の秘訣は其場所なり事件なり人物なりの平面描寫でなく立體描寫をすると云ふことに存します。その事件人物を繪にして見せる。しかも動く繪にして見せるのです。

人物を浮き出させる。場所をうき出させる。事件をうき出させる。第一の要件は對話を用ふることである。くだ〳〵と筋、「抽象」で運ぶ處を一超直入「具象」對話で行く會話の上手下手が話の上手下手であります。而して今一つ奥をいへば對話などして叙事で人を引きつける迄に進むのが話術の上手であることは申す迄もありません。それは大人の場合、子供はどこ迄も動的でなくてはなりません。對話の入門は左右と云ふことを心得ることです。甲が右向になつて話をしてゐると、乙が左向になつてこれをうける、これは上半身全部を右向左向するのもよいが、なるべくなら顔丈出來うべくは眼丈でもよい。左右にして二人或は三人を現はす。

話者の左の方が尊位で右の方が卑位であることは劇の上手下手から來てゐる自然の約束であることを心得ておかねばなりませぬ。

次に話の自と他と云ふことを心得ねばなりません。話者自身の言葉、批評、感想をのべる場合、卽ち主觀が自話中の人物の言動、卽ち客觀が他、此の自と他とが混同しないやうに演出が十分出來る迄に工夫洗錬しなくてはなりません。

人物を表すには、老なら老人、武士なる武士、其態度に於けるいちじるしい特徴卽ち癖の一點を摸すれば聽衆は其全體を想像するものであります。上手になればなるほど、小さく動いて相手には大きく感せしめる。

此工夫は在來の話家俳優などは誠に慘憺たる苦心を重ねたものであります。烟管の

持ち方、手拭のつかみ方で、これは町人これは百姓、職人か力士かそれ〴〵自分の性格を表象した。小さんの話に武士と町人との區別は肩でする、肩を聳やかせば武士、下ろせば町人、直線は武士、曲線は町人、然し態度々々と云ふものゝ形の末ではない畢竟心持の外に現はれたものでありますから、武士は武士であるといふ考になると、自ら肩があがつて來ます。此點はよく考へて其本末を轉倒せぬやうにせねばなりません。このことを腹と云ふ。武士なり商人なり、偉人なり豪傑なりの心を腹で摸する。その心になる、泣くのも感動するのも、其内部の心の持ちやう一つが外部に自ら現はれて出る。敢て殊更に形をしない。これを腹藝と申します。

お伽噺には子供が出る場合が多いから此子供の癖、あんな時にはかうするもの、かゝる場合にはかくするものとのことを、よく觀察して、よく腦の中の引出しに貯蓄しておいて必要に應じて是れをとり出すことが尤も肝腎でせう。此點はお噺の先生の獨壇上で、古い話家の覗ひ知らぬ點です、古い話家の現はす子供はもう舊い型で、これを高座にやるのは時代錯誤です。私はお伽劇に多少の關係をもつておりましたが日本の芝居の子供の言葉を現代的に自然に表出し得たのはお伽芝居の力だと云ふことを明言し得ると信じます。現代お伽噺の諸大家は多く子供を摸することの名人です。

此人々は幼稚園の園長さんであるわけがよくわかるでせう。小波先生は幼稚園はないが家庭が幼稚園ほどにお子達が多い。

對話は對話ですから態度ばかりでは人は現はれない。それにともなふ聲色が大切です。

『聲色論』

聲色と云つても雁次郎だの延若だのゝ、白を摸する聲色のことではないは申迄もない。話に聲色を使つては話のぶちこわしだと非常に恐れる人があるが、それは必ず聲色の出來ぬ人に多いから、面白い聲には色合があるから、其色合で老人なり若いものなり男なり女なりを現はして行く事がいけないと云ふなら、初めから話は成立しません

よく専門家の方であの人はめす(女)おす(男)の區別さへないと云ふのもきくことがある。それです聲を寫すからと云つて、老人なら老人そのまゝの聲、女ならば女そのまゝの聲をせよと云ふのではない。老人の聲の特徴、低い緩い弱いばら〳〵の聲の調子の一部を寫せば、もう老人とうけられる。女だからとて女の聲を出すではない。男の地聲でかまはぬから、女の調子一オクターブ下げた女の調子をすればよいわけです。

それに性の別、年齢身分職業によつて言葉には言葉の種類がある。殊に日本にそれがあり過る。小供でなくては母でなくては娘でなくては使はない言葉、語法がある。それを心得て娘を現はすに娘の國の言葉を用うれば娘は出て來る。假令へば『ないことよ』『あつてよ』『よくつてよ』など云ふ言葉は娘に限つて、お婆さんには使はされない、單に二人稱の用ゐ方でも、『お前』とか『ねゑあなた』とか『おい』とか『オイ君』とか『もし〳〵』とかは誰が誰に云つて居るかはすぐ區別がつきます。此邊の研究をおろそかにしてはなりません。なほ言葉には氣分がある。病つたものか、疲れたものか、よつぱらつた時、興奮した時、失望した時、うれしい時、皆それ〴〵に調和する處のうれしいやうな勇ましいやうな或は樂しいやうな言ひまはしがいります。それが音聲の表情です、それ故話をするものは此音聲の修練が何よりも肝腎で、音聲が藝術的、音樂的でない人は話術家として第一の資格が缺けたものです。一聲二節と昔から申します。又此處に心得べき事は病人が長い話をする場合に初めから終りまで、病人の調子で押通すと云ふ事は演るものも困るし聞くものも參つてしまふ。それ故、初めとしまいとでその趣を忍ばせて、中は普通の音聲で普通に話して行く呼吸が極めて肝腎です要は病人だなど云ふヒントを話のあと先で一寸にほはすれば聽衆は滿足します。

さて今少し細かく立入つて態度のことを話して見ませう。

『手』のおき處には困るものです、話す〳〵手先でいろ〳〵のいたづらをする。

假令へば洋服のボタンをはめたり外したりするあんな癖は一切さけねばなりません

又片手をポケットの中や袴の下に入れるなど無作法に見へる事をしてはいけない。

卓子にこま犬のやうに前手をついてよりかゝるのも、降參したように見わるし、さればとて腕を組むのも何となく嘩嘩腰に見わるし、尾崎愕堂さんのやうに左手を卓子につき右手を脊に廻して、グッと反身になるのもキザだし、いやとんと困つたものです。工風を要します。西洋の表情法に手で形をする時は必ず一應耳の高さに上げておいてそれから何でもやれと云ふことがありますが、これは所作を大きく見せるに必要なことでせう。手を上げるのは遲くてもよいが、下ろす時にはスッと早く下ろさねばいけないといふ注意もあります。

『指』を使ふは注意を集中するに尤も効力のあるものです。握ると强く見わ、開くと弱く見わ手を上げて掌を見せると陽氣に見へ手を下げて甲を見せると陰氣になる幽靈の畫などを見るがよろしい。

『足』は足(そく)に立つと力が入らぬ。割つて休めの姿勢式などがよいようだ。腰から下はあまり動かさぬがよい。腰が据つてゐると上品に見へるものです。

『目』は話の全使命を制する、話は目で談るべきもの、話下手は『あの人はまだ目が遊んでゐる』と云はれます。目はその人の精神が流れて出る穴、話者の心を聽者の心に傳へるのも話者の目から聽者の目に注ぎ込む。喜怒哀樂一切の心が一番よく現はれるのは眼である。盲者の話は此大事な部分を缺いてゐるから十分に行きません。それ故お伽噺の先生は眼鏡をかけてはいけません。眼鏡を用うる人に名人はないさうです。

『眉』の動かし方が大事です。卽ち眉の表情、一寸の氣のつかぬことですが眉はなかなかよく物を言ひます。雲右衞門なども眉の表情が巧妙であつたやうです。次に

『話に活をいれること』

これを忘れてはなりません。話に氣合をいれる聽衆の心を覺醒させることが肝要です。何でも停滯すると腐る。たゞず注射して潑溂たる活氣を與へる。大喝一聲大雷雨を下して氣分を一新する工夫を常に忘れてはならぬ。此變化、波瀾抑揚の單調を破る

工夫にかげると、上手な催眠術師にはなれるが話上手にはなれません。

『話を上手に預ける』工夫が大事です。話の中にふいと問を出す。すると受動的のみになつた聽手がハツト氣をとりなほして發動的になる其疑問が必ずしも、その問を要求するのではない。『皆さんどう考へますか』など云ふ問は『どうだらうかな』と聽衆に考へさせればそれでよい、必ずしも答を要しない。話が人事でない。自分も關係してゐると云ふ狀態に導くと、頗る場面を緊張せしめる功が多い。

これは又話の間と云ふことになる。『雨がザアツと降つて來た』とジツと聽衆の顏を見てする。すると聽衆は樣々に想像してゐる。人を感動さする話は此間のある話ぶり只のべつたらに、速射砲的に、立板に水式に話された話は、考へる思ふ暇もなく通過してしまふから印象が深くない。此間もあまり長いと間が拔ける。

『擬聲』、模聲と云ふものが頗る話を活かし、その場その時を浮かすに都合のよいものであります。鳥の聲、鐘の音、汽車だの汽船だの、飛行機だの自動車だの、而してその模聲も、どこか其趣が浮べばよい、たとへば大砲の音を寫すにしてからが、本當の音が寫されるものではない、けれども『ドウン』と云へば大砲の音に聞ゐる、これは遠くで聞いた時の聲を寫したのだから、大砲の音の何處かにふれてゐる、僞りではない眞實ですから、聽衆は大砲の音のした如く感じます。

次に話の中に、

『笑』

を入れることが、話をして活氣を帶ばしめて、聽衆をあかしめない用意であります

笑のない話は徹底しません、笑のない話は長續きがしません、笑のない話は面白くない。

話の中の笑は白兵戰に於ける地區地物の如き作用をします、進んで突擊を初めると敵は眞劍になつて一齊射擊を浴せかける、そこで一寸地物に身をかくす、敵が氣をゆるめてゐる瞬間更に突貫する。かくの如くする內難なく本城へ斬り込むことが出來ま

す。話が續くが眞劍になりすぎると聽衆の頭が硬化します。そこで一寸笑を配劑してその凝固をとります。話者から云ふと其間に息をいたします。節物とか語物とは違つて舌一枚で何の助けをからぬ白兵戰。笑と云ふ味方をかりて來て、聽衆がドッと笑つてゐる間に休息するより外に道はありません。

笑はす呼吸はなかなか六つかしい。女、子供、野蠻人と云ふものはよく笑ふものである。只徒らに笑はせさへすればよいのではない。笑ひの中にも嘲笑もあれば苦笑も生の態度や語氣がへんてこであるのを笑ふのを、眞にうけて笑ふのだと調子に乘つてやる人がありますが、苦々しいことです。恥づべきことです。

聽衆を笑はせようと思へば、つとめて話者は眞面目でなくてはなりません、話者から笑つてかゝると、不成功に終ります。

それに引かへて『泣』かするには話者自身が泣かねばなりません。泣聲をしたり、泣眞似をしたのでは、笑ひこそすれ泣きはしません。全體泣くといふことは感極まつて泣くのでありますから、聊も其間に虛僞はない。自分は泣く心の狀態にならなくてはなりませぬ。藝の至れる人は自分は泣かずにゐて人を泣かすといふけれども、それは泣くことと涙を出すことを一樣に見てゐるのである、泣くには必ずしも涙を出すことを要としない。

あまり泣かし過ぎて得意になるのも考へものです。旅の女工に鄕里の父母の話をすれば必ず泣く、泣かした處でよい結果はありません。子供に繼母に虐待される處などを語つて安價な涙をしぼらせる人もあるが不心得の至りです。浪花節は高潮に達した處で歌ひます。そこでよい氣持にはなれますがなけません。講談は感極つて默しますその時ホロホロと泣けます。此點は浪花節の到底講談に及ばざる處であります。

次に

『話の結び』

について一言したいと思ひます。話は結びが大事、その手ぎわの如何によつて、全體が活き死にがある。畫龍の點睛と云ふのは此處です。結びがだらだらとして、もうすんだかと思ひ、興味は已に去つてゐるのに、まだやつてゐる人があります。所謂往生際の惡いのは極めて拙なことです。結びが器用に水際たつてゐると全體が引つ立ちます。終りに教訓などくどくど云ふ爲に全體の氣分をすつかりうちこわすことがあります。心得べきことです。元來教訓を話の中に入れるのはあまり結構なことではありません。話全體が教訓になればそれでよろしい。實は教訓にならなくてもよい。教訓ばかりが話の使命ではありません。私はあまりにお伽噺を教訓の道具に使ひ過ぎる今の傾向に反感をいだくものです。

今の先生方がお伽噺の先生を紹介する時に、必ず云ふ常套語は此先生の話は面白くて爲になる話云々、と云ふ爲になると云ふのは、教訓になると云ふ意味でせう。中には御丁寧に、「たゞ面白かつたではいけない、お話の中の肝賢な處をとらねばなりません」、といふやうなことを駄目る人があります。お話と云ふものはそんな目的のものではない、面白ければそれで目的は達してゐる。單に面白いと云ふ中にも兒童の種々の心性が錬られ鍛はれ、色々の心情が培はれ、育まれ心の中にひそんでゐる尊い靈性迄が刺戟されれば、それで目的は達せられてゐるのです。所謂もう爲になりすぎてゐるのです、所謂爲になると云ふ意義がその爲なら文句にはないが、なべての人の爲は教訓になると云ふ意義らしい。さればと云つて兒童が喜びさへすれば、どんなことを話してもよいと云ふ意味ではありません。苟くも兒童の前へ立つ時は、何人でも何事でも教育といふ考は忘れることは出來ません。ついてはお伽噺は教育的であると云ふ條件をはづれることは出來ません。而し乍ら必ずしも教訓的であることを要しません。教育的といふことゝ教訓的と云ふことには差があることを考へねばなりません。現代教育の弊はあまりに打算的、功利的、何でも今これ丈のことをしたら、これ丈の結果が見ゐた。かう此處をおしたから、かうこゝに現はれて來た。何でも早く表に現はし

たい。そして功をほこりたいと云ふ處にあるらしい。ついては兒童のお八つである處の兒童の文學小說である處のお伽噺にさへ、卽功萬能を望むらしい。自體、敎育と云ふものはしかく功を急ぐべきものではない。もつとのんびりした、ふつくらした中に行はるべきものです。

そんなら敎訓は絕對に入れてわるいかと云ふにさうではありません。入れるなら入れ處がある。初めに入れるか、話の中の人に云はせるか、なんでも直接でないのがよいようです。言はずにすめば言はぬもよい、一等嫌ふのは最後に入れることでせう。甘いお菓子をいたゞいてせつかくよい氣持になつてゐる處へ、苦い水をのませるのは惡いことです、罪なことです。元來話は結びに限らず、初心の陷り易い弊は、說明し過ぎる處にあります。これではことをこわします。話は八分にして、あとの二分はぼかす、そこが餘韻のある處です。

中には云つてならぬことを先へ言ふたゝめに、話の面白味がなくなることがありま

す。是れを話の底を割ると申します。話は元來ベルグソンの所謂、期待、滿足、印象と云ふ順序に行くべきもので、說明し過ぎるか　或はその順序を破つた爲に　折角の期待を破つてしまふ場合がある。惜しいことです。又話はあまり聞かすべき要點の多い、繪で申しますと二重看點の繪、あまりに目的を多くもつてゐる私は失敗に終ります。目的は單純であるほど尊い、どこにかく簡潔で直裁で明瞭であるのがお伽噺の肝要でせう。ついては結びも惜まれて散るのが花、時としては云はぬが花、ゆめにものび過ぎて泥によごれた柳かな。飽きられて止めるのは禁物飽きられても止めぬのは尙々禁物。最後に、いかにせば、

『話　の　上　達』

するかと云ふことを話しませう。話の上手になる秘訣は三多にある。

多く聞き、多く見、多く演ずる、

話は多く聞くに限る、それこそ講談も御座れ、落語もござれ、義太夫も演說も說敎

も、苟くも人の口を以て思想感情を傳へる一切のものは聞いて參考にする。殊に尤もお伽噺にあつては、お伽噺の大家の話をきく、きいて〳〵まき込む。きくに二つの用意がある。一は材料をとる、一はその呼吸をとる。尤も此後者が大切で聞いてよく呼吸をのみ込んで、口の奥底へねりつけておくことです。それがすぐ役にはたゝぬが、此心の奥の院の燈明が光を増すにつれて話術は進んで行きます。多く見るとは讀書、見聞、其他鋭い目を以て社會萬般のことを見てこれを材料にする。それをノートに書きとめて他日の用意にすることです。

次に多くやる。蔭でやつたのでは何の役にもたゝぬ。一人でも二人でも苟くも人が居れば、人の前に立つてやる。

或る話術の大家が初めは決して色々の規則や話術にとらはれてはいけぬ。なるべく大聲に、なるべく短時間に、なるべく多くの言葉を使ふことを稽古するがよいと申されましたが味ふべき言葉です。初めは放膽に漸次小心と云ふことが眼目でせう。

話は又。他人の批判を喜んで聞かねば駄目だ。自ら天狗の癖澤山に、かたまつたのは仕末がわるい。

話術にかゝはらず、すべて發表の技能は、自分がうまいと云ふ自ぼれがなくては出來ません。極端に云ふと、あまり自分が分りすぎたり、相手が見へすぎてはやれません、盲蛇におぢぬ格で初めます。しかし追々相手が見へ出し、自分が見へて來ると手も足も出なくなります。自分の極めて拙いことに氣付いてまいります。

そこでこれはと一層勤むる氣が起つたなら、進歩の道程に登りつゝあるのです。

うぬぼれの儘の人は一生上手にはなれません。

話を上達せんと思へば、一つの話を數十回やつて、所謂あの人のあれと云ふ十八番を作らねばならぬ。十八番をもつてゐる人なら共に話を語るべしだ。一車通れば千車萬車。ある一つの話にぬけてゐれば、その力が他の話の中にとけ流れて、話を巧妙にせずにはおきません。

お伽噺の先生は何よりも桃太郎の話が十分に出來る人でなくてはなりません。

以上取止めもない誠に統一のない斷片的のことでありますが、どうぞお許しが願ひたい。

史談の話方

岩井榮之助

私は史談實演の方法に就いて、聊か申述べて見たいと思ひます。史談と云ふのは過去人間の活動を談ずるのであつて、動かすべからざる事實に基きて申さねばならぬから、よい加減の事を云ふてはならない。然し歴史家の歴史談と、私の今述べ様とする史談とは自ら趣を異にして居ります。歴史談は智識を主として居るけれ共、所謂史談は德性を涵養するのみならず、兒童の興味を惹き起す事に勉めなければならない。

それで事實に反せない限りなるべく史的人物を活動せしめ情趣を描す事に努力しなければ成功しないものである。

抑もお伽噺は徒然を慰むるお話、又は夜話の意味で病氣を看護する時や子守をする

時にも話したものである。昔織田信長が岐阜の稻葉山に居つた時、尾張の國の沼田藤六がお伽の爲めに歴史の話を申し上げたと云ふ事がお伽噺の現れた最初である。それから豐臣太閤の時、堺の曾呂利新左衞門がお話を申し上げた事がある。此れは主に諷刺的のものであつたけれ共、又史話をも交へて居た。板倉重宗が平林平太夫に話を聞いた事がある。又大久保彦左衞門が三代將軍家光の幼時に武勇談をして戰國の武士の生氣潑溂たる物語をして勇氣を皷舞したこともある。降つて元錄五年江戸長谷川町の鹿野武左衞門が出でゝ本統のお伽噺を案出した。彼のお伽噺の一例を擧ぐれば、江戸の町にトウユカツバ(桐油合羽)といふ看板を掛けた店があつたので、人々が讀み違へてトウユガツバ(トウユガ鍔)とはどんな物だらうと珍らしがつて買ひに行つたと云ふ話がある。又或所に薩摩芋を貰つた禮狀に「ケツカウナル(結構なる)品下され有難く存じ候」と書いたのを讀み違へて「けつがうなる品」とは無禮な禮狀と怒つた大變な滑稽を演じたといふ話等がある。

史談はお伽噺と性質が違ふから、話方に於て特別に注意すべき事が多い。先づ日時人名場所を明にする必要がある此は勝手に拵へる事は出來ない。其から特に注意すべき事は繼母の子供の前で繼母の話をするのは、非常に其子供を感ぜしめ、又其結果は實際上よろしからざる方面に現れ易いから、大いに注意しなければならん。又不具者の前で不具者の話をする事もよろしくない。其から歴史上の人物の氏名が兒童の一人と同氏名であれば、大數の兒童の注意を其の方に奪はれるから氣を附けなければならん。其んな場合には人物の名前をとらずに薪木屋の息子とか酒屋の親父とか云ふ風にして取扱つたがよからふ。一般に同一談話の時間は時刻によつて加減すべきである。例へば朝ならば二時間目が最もよく、又午後は午前の談話より少し短くした方がよい其から時候とも關係があるものであつて、暑い時には暑い話や、更に又文覺が瀧に打たれた樣な凉味を感ずる話をしたがよい。

兒童に話をする時には(一)聞かす事が出來るや否や(二)解するや否や(三)話を見得

るや否やを省みなければならん。最早兒童が話を見得るに至れば全く成功である。其から話に興味を付ける爲めに、子供に諂ひ、子供をもてはやすはよろしくない。全く子供を敎へる心で話さねばならん。

談話が堅くなつた時には、ちよい〳〵滑稽を入れる必要がある、滑稽を云ふ時は自ら笑つてはいかん、眞面目な顏で云はなければならん、音聲は低くて大きいのがよろしい、卽ち鐘の音が遠く響く樣にありたい。而して言葉に緩急がなければならん。

語氣も强弱をつけ、語にも遲速を入れなければならん。斯くすれば割合に長い時間注意を持續せしむる事が出來る。淨瑠璃の寺子屋は一時四十分間を要するが、其間に緩急强弱遲速を適宜に入るれば、始終興味を惹起す事が出來る如きである。

態度は極めて大切なものであつて、人物の位置によつて身體を左右に向き替へて、談話の主客を明にしなければならん。斯くて口で話す外態度で話す樣に修養すべきである。講演者の持ち物を利用する事が大切である。卽ち扇子一本でも種々の工夫を凝らせば談話を助け得るものである。

已上述べたところは談話法の一端であります。

史談とは歷史上の人物の行ひ、或は物語として云ひ遺された話を、卽ち過去の事柄を現在の或物と結びつけ、相對照して子供に聞かせ、而して兒童の趣味と敎育的價値とを齎らすものである。だから史談の或ものは趣味を主とし、或物は敎育的價値を主としてゐる。加之史談をやる上に於て、難有い事は外國と趣きを異にする我國の特長を知らしめ、國民的自覺を促すに大なる力がある。卽ち幾千年連綿たる皇統の精華、親子の如き君臣の關係、父子家庭の關係等、我國我國民のみが有する誇を自覺せしむる事が出來る。此の誇を自覺せしむると同時に、渡來已來幾百年の長い間、我國民の精神を支配し、我が國民性を作つた佛敎の德澤を自覺せしむるのが佛敎日曜學校の特典であらうと思ふ。普通の日曜學校では佛敎の德澤を自覺せしむる事は困難である。諸氏は此點に注意せられなければならぬ。强ちに佛敎の德澤を云はなくとも、既に佛

殿に於て話し、又法服を着けて話をすれば其邊の味は充分含まれて居ると思ふ。茲に値打があるのである。又世間から云つても其通りで、私は宗教の事は何も知らないが吾々が日常使用する言語が御機嫌宜敷とか普請とか云ふ言葉は皆佛教から來てゐる。佛教が深く國體と統合して居るから、佛教語が通常語になつたのである。普請などは漢學ではわからぬ。普く請と云ふ人淨財を普く天下に請ふ事から其中の二字を取つて出來たのであるが、今日では佛教語と思はれぬ程普通の言葉になつてゐる。醫者が頭部をブツと殊更吳音で云つて居るのは醫術の方面にも宗教の力が及んで居るのである其證據には極古く醫者の書物を見ると、醫官の名に法印、法橋などゝ云ふ僧位の名が付いてゐる。これで見ても古い僧侶が醫者をやつたもので、夫れが後に分化したのである。斯くものゝ名稱が世間普通の言葉になつて佛教語が殘つて居ると云ふ事は諸氏が日曜學校をやる上に之を利用すれば大なる便宜と効果とを得られるであらう。

史談は歴史家の歴史教授ではないから、智識を主としない。歴史教授でなければ何だと云ふと、史談は趣味教育である。即ち歴史教授は智識を主とするが日曜學校でやる史談は趣味の涵養を主とするのである。德性を涵養すると云ふ點に於て、兩者其目的が一であるが、史談は趣味の方面から其目的を達するのであるから、歴史の上の人物の情緒をうつす上に甚だ自由である。例へば歴史家が新井白石の話をする時には、

第一例話

明暦三年正月(今から二百六十一年前)江戸大火死者十萬八千人久留里侯土屋利直邸火す。侯の親族内藤政親の柳原邸に避く此日白石生る

日曜學校で話す場合に此通りやつたら、何の興味も起らない。尤も自由であると云つても、事を曲げたり史實を無視した樣な事は云はれぬが、同じ史實を語るにしても興味の伴ふ樣に興味中心と云ふことを忘れないで其心がけでやる。例へば今の話にしても、

第二例話

明暦三年と言ふと、今から二百六十一年前で、其のお正月に江戸中が大變燒けて死人が十萬八千人どうだ、澤山だらう、其の時久留里のお殿樣の土屋利直樣のおやしきが燒けた、そこで御親類の内藤樣のおやしきが柳原にあつたからこれへおうつりになつたが、此の時にけらいの正濟の女房がお腹が痛い〳〵云ふから如何せうかと心配して、正濟がうろ〳〵して居ると、ほぎやーと聲がした。驚いて飛んで行くと赤い〳〵子供が出來て額に火の字の皺があつた、これが新井白石である。

これは日曜學校の史談と學校の歴史教授との異る所である。夫を間違へて何でも智識を與へねばならぬ。歴史をよく多く知らしめねばならんと思つて、無暗に六ヶ敷く云つて、子供が六ヶ敷くてわからぬものだから、一寸でも偶見でもすると、直ぐ叱つたりする。話中に叱ると話が中途で斷たれるから尚面白みがなくなる。子供も何を聞いてゐたのかわからず、遂には話すものまでが何を云つてゐたのかわからないと云ふ事になつてしまう、故に史談をやるには人物の情緒をうつして愉快にやることが大切である。

借て其史談の効果と云ふものは次の四點であると思ふ。第一に史談は品位ある快樂を與へる、同じ快樂でも品位ある快樂を與へなければ駄目で、只快樂と云ふのでは落語や寄席の方が餘程ましである、品位ある點を與ふるのが日曜學校の史談である。次に趣味を喚起する。事實を間違ない樣にして面白く話せば非常に子供が喜んで聞く、其中に優美な色々のものに對する趣味を涵養せしめるものである。だから興味をつけて話すことは是非必要である。それのみならず、更に進んでは智育の養成にもなり、尚一歩進んでは心身の發育を助けるものである、此中でも分ければ、更に德育と體育に分かれる、此事を忘れずに史談をやつて貰はねばならぬ。所が一つの話に必ず已上四つの要素が含まれてゐるかと云ふにそうではない、其中の一つ或は二つ卽ち一つの史談をやるには品位ある快樂だけを主としてやる。或は智育のみを主とするか心身の發育を主とするかは初に其話の趣意が何處にあるかを考へ、而して其目的を定めればよい。

位置。子供の列ぶ位置は小學校等は長方形をとつて列ぶが、日曜學校などでは子供

を扇形に列べ、先生は其要に當る所に立つがよい。

之をやられる時に、皆さん今度は扇の形に列んで下さいと云へば、子供は興味をもつて直ぐ列んでくれる。

更に今度は話頭中に出てくる人物の位置を考へなければならぬ、即ち甲の者を現はす時に取る場所乙の人物を現はす時による位置及び第三者の地位に立つて斷定を下す時による位置を豫め定める必要がある、例へば、

第三例話

盧元坊が加賀の松任へ來た、月岡の千代は俳諧がやりたくつて仕方がない。盧元坊の行脚して來たを幸に、旅宿を訪ふて俳句を習ふことを願ふたが、盧元坊は承知して時節柄だと「杜鵑」を題した、千代は吟詠を書いて示したが、盧元坊は今一つ考へて見よと言つて詠草を返した。何度出しても考へて見よと返され、遂に明け方になつて、一生懸命に吟じ方を考へ、

杜鵑ほとゝぎすとて明けにけり

と詠じて盧元坊の手元へ出したが、初めて師は感じた。何んと千代は辛抱強いものでないか。

自分が盧元坊になつて話す時は右側へ寄り、千代になつたときは左側へ寄り、第三者に立つて千代の求道に熱心であることを述べる場合には中央に立つのである。と云つて之を忙はしく右へ行き左へ行き又は左へ行き右へ走りしては粗々つかしくて話も何もわからなくなつて却つて惡い。尙又掛圖を利用して話す場合、例へば湊川に於ける楠公父子の訣別の圖で、右に正成が居り、左に正行が居る時には話すものも此圖と同じ位置をとる。即ち正行になつて話す時は左に寄り、正成を現す時は右へ寄るがよい。若し圖の位置と反對の位置をとると子供の頭が混亂する憂ひがある。

態度。これは既に久留島先生が話された樣だが、其中多分先生が話して居られない點と思ふだけをお話する。が然し、私の云ふ所と氏のお話と重複する場合に於て、二人の意見が同じであれば幸ひであるし、若し又異がへば諸氏の判斷にお委せする。

第一態度としては餘り氣取らない樣にして話すがよい。東京の講談家伊藤痴游が講演をやるのを見ると、まるで吾々が普通の會話をやつて居る樣な語方が、際立つた技

工は用ひないが、あのやり方がよいと思ふ。東京では話方を研究してゐる人達は、皆各自に講談家のモデルをもつて居て、之を手本にして居る、例へば福邊氏は柳家小三をモデルにして、小三の話方を研究して居るから氏の態度は小三によく似て居る。又、雉彦氏は細谷風谷氏を學んで居る。これが史談實演上の研究の仕所である。

先に述べた様に史談は普通の話をする様にやればよいと云ふのであるが、其中に熱心が籠つて居なければ駄目である。熱があつて初めて話に力があり、力があつて子供を動かす事ができるので、如何によい話でも悠長に冷やかに話して居ては到底徹底しない。私が史談をやると如何な短い話でも仕終るまでにびつしより汗をかくが如何しても一つの話をしたら話す中に熱心の餘り汗で濡れる程でなければ感動を與へることはできない。

私の幼稚園では毎年三月に卒業生を出しますが、其卒業式の時にこんな歌を歌はせますっ私の園の主義として自分の事は自分でやると云ふ方針を取つてゐますから、一切他のお世話にならない様にしてゐます。夫で歌も私が作つたのですが、『にーさん、ねーさん、たつしやになさい。こののちどこでもあひますならば、いつでも仲よくおじぎをしませう』と云ふのです。これを園に殘る子供に歌はせました所が、三月の十九日に園の子供が日曜だつたので、他家へ遊びにまゐつて御菓子を貰つた。其お菓子が惡るかつた爲にか、疫痢にかゝつて病院へ入院したのです。病院でも種々心配して手當を施しましたが、腦が惡くなつた爲に非常に重態に陷つた。醫師も注射をしたり酸素吸入をやらせたりして離れず見守つてゐるし、母親も枕頭に看護して非常に心配してゐるが、危險は刻々に迫まつてきた。到底駄目だと云ふ時に母親が、夫れでも萬々一治ることはなからうかと醫者にきくと醫者も曖昧な返事をして、もう一度注射をして見ようと最後の注射をした。此時に其今にも死にかゝつてゐる子供が囈言の様に「兄さん姉さん達者になさい、こののちどこでもあひますならば、いつでも仲よくおじぎをしませう」と歌つたので、皆泣かされた。史談は人物や事件を話すのでなくて、